

北区

十条台遺跡群南橋遺跡

—都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

第2分冊



2023・9

東京都埋蔵文化財センター

十条台遺跡群南橋遺跡（王子・王子母子アパート地区）の調査

1 遺跡の概要

十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）は、武蔵野台地東縁部の本郷台地北側に位置する十条台の崖線沿いに立地しています。亀山遺跡・宿遺跡・南橋遺跡・十条台古墳群・十条台小学校横穴墓などからなる、東西約 0.7km、南北約 1.8km を測る広大な遺跡群です。これまでに東京都北区教育委員会による試掘調査・本調査の成果が積み重ねられ、旧石器時代から近世に至る複合遺跡であることが分かっています。

今回の調査地は十条台遺跡群の中の南橋遺跡の範囲にあたります。南橋遺跡は十条台遺跡群の南西側、中十条一丁目や王子本町二丁目の一带に広がる遺跡です。これまでに北区教育委員会により数十回の調査が行われており、その成果から、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての大規模な集落と古代の集落が営まれていたことが明らかになっています。

2 遺構と遺物

本調査は、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に伴うもので、調査対象地は北区王子本町二丁目に所在し、調査面積は 4,698m² です（写真 1）。発掘調査は令和 2 年 12 月 1 日から令和 4 年 2



写真 1 調査区全景（北から）

月 28 日まで、整理作業は令和 4 年 2 月 1 日から令和 5 年 5 月 31 日まで行いました。

調査の成果として、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の竪穴住居跡や土坑等の遺構と、土器等の遺物が検出されました。

なお、令和元年 7 月から令和 2 年 10 月まで実施された王子・王子母子アパート地区の北側に隣接する中十条アパート地区的調査では、主に弥生時代後期から古墳時代初頭と、古代の竪穴住居跡を含む遺構が多数検出されました。これに対して今回の地区は後世に削平され、遺構の密度が薄いことが試掘成果から示されていましたが、今回の調査でも前回の地区に比べ遺構の検出数は少なく、遺構分布が密でないことが明らかとなりました。

縄文時代（写真 2・3）

隅丸長方形の土坑が 2 基検出されました（写真 2）。長軸方向の両端壁が外側に抉り込まれており、深さは 1.0m 前後を測ります。2 基のうち 1 基からは、縄文時代前期前葉関山式の深鉢の破片が 2 点出土しました。このほか、縄文時代のものと思われる竪穴住居跡 1 軒と柱穴 1 基も検出されています。

調査区の表土や攪乱からは、前期前葉黒浜式や後期前葉堀之内 2 式の土器片、石鏃や石錐などの石器も出土していることから、南橋遺跡では縄文時代にも、人々の活動の痕跡があったことが確認されました。しかし、後の弥生時代や古代に竪穴住居等が築かれたことにより、縄文時代の遺構や遺物の痕跡の多くが失われたことが想定されます。

弥生時代後期から古墳時代初頭（写真 4～11）

竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 1 棟、柱穴 8 基、土坑 4 基、溝跡 1 条が検出されました。竪穴住居跡は全体的に削平や攪乱の影響を受けており、遺存状態は良好ではありませんでした。しかし、調査区中央で検出された 141 号住居跡では遺物が良好に残存しており、ほぼ完形の直口壺が潰れた状態で出土しました（写真 4～8）。

柱穴は多くが調査区北側でまとまって検出されました。この中から 1 棟の掘立柱建物跡が復元され、その配置と重なりから、何度か建て替えを行ったことが推定されます。柱穴の周囲にも攪乱が広範囲に及んでおり、いくつかの柱穴は失われたことが考えられます（写真 9）。

溝跡は調査区北側で検出され、その位置と規模・形状から、中十条アパート地区的調査で検出された 2 号方形周溝墓と繋がる可能性があり、わずかに遺物も出土しています（写真 10）。

中十条アパート地区や南橋遺跡の過去の調査成果と比べると、王子・王子母子アパート地区での当該期の遺構の検出数は希薄であり、今回の調査区が南橋遺跡における当該期の集落の南端となる可能性が考えられます。

古代（写真 12～16）

竪穴住居跡 9 軒、柱穴 4 基が検出され、竪穴住居跡の多くは攪乱により上面が削平されていました。

遺物は各住居跡から出土し、調査区北側で検出された 126 号住居跡では、カマド内から 9 世紀初頭～中葉の土師器甕の破片が良好に出土しました。同じく調査区北側で検出された 132 号住居跡からは、7 世紀後半の土師器杯の破片が良好に出土しました。この他、調査区南側で検出された 134・135 号住居跡からは鉄製の刀子が出土しました（写真 12～15）。

各住居跡の年代は 7 世紀後半から 9 世紀後半にわたり（写真 16）、当該期においても人々の連続的な居住があったことが、中十条アパート地区的調査と合わせて明らかになりました。



写真2 織文時代の土坑（26号土坑）（南から）



写真3 織文時代の土器と石器

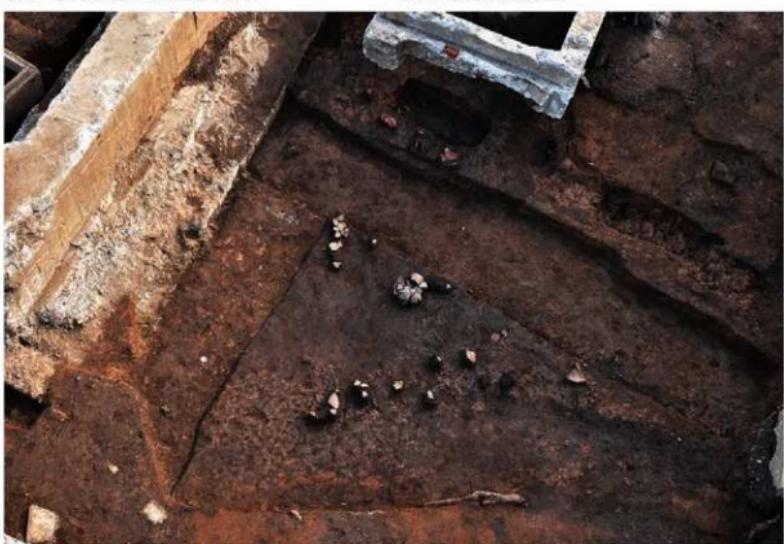


写真4 弥生時代後期から古墳時代初頭の壁穴住居跡（141号住居跡）（北から）



写真5 同住居跡内土器出土状態（北から）



写真6 同住居跡内直口壺出土状態（南から）



写真7 同住居跡内出土直口壺正面 (1/5)



写真8 同住居跡内出土直口壺内面 (1/5)



写真9 弥生時代後期から古墳時代初頭の据立柱建物跡 (7号据立柱建物跡) (南から)



写真10 弥生時代後期から古墳時代初頭の溝跡 (4号溝跡) (西から)



写真11 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器



写真12 古代の竪穴住居跡（135号住居跡）（東から）



写真13 古代の竪穴住居跡（126号住居跡）土器出土状態（西から）



写真14 古代の竪穴住居跡（132号住居跡）土器出土状態（南から）



写真15 古代の刀子（2/3）



写真16 古代の土器

A Survey of the Minamibashi Site, One of the Jujodai Sites (Oji and Oji Boshi Apartment House Zone)

The Jujodai Sites (Kita Ward Site No. 19) are located along the cliff line of Jujodai in the north of the Hongo Plateau on the east edge of the Musashino Plateau. It is a vast group of sites, about 1.1 km east to west and 4.6 km north to south. The present investigation site is the Minamibashi Site. The Minamibashi Site, in the southwest part of the Jujodai Sites, is located throughout the area of 1-chome, Nakajyo, and 2-chome, Oji Honmachi. Previous surveys have revealed that there were ancient settlements here from the late Yayoi Period to the early Tumulus Period.

The present investigation has excavated relics and remains from the Jomon Period, the late Yayoi Period to the early Tumulus Period, and the Ancient Times.

Two earthen pits, round cornered and rectangular, from the Jomon Period have been found. Both ends of the longitudinal axes of these pits face inward, about 1.0 m deep. There is also one pit dwelling and one pillar hole that are considered to be from the Jomon Period.

The top soil layer and disturbance of the investigation site also revealed some pieces of Jomon earthenware and stoneware, suggesting that people lived in the Minamibashi Site during the Jomon Period as well.

From the soil layers dating back to the late Yayoi Period and the early Tumulus Period, five pit dwellings, one dug pillar dwelling, 8 pillar pits, four earthen pits, and one former groove were excavated.

From the Former Dwelling 141, which was found in the middle of the investigation site, well-preserved relics were unearthed, including a crushed pot with an almost complete rectangular mouth. Regarding the pillar holes, many were excavated together in the north of the investigation site. Of these, it is thought that one dug pillar dwelling was restored and rebuilt several times. The site, found in the north of the investigation site, may be linked to grave no. 2 with square ditches around it, which was excavated during the investigation of the Naka Jujo Apartment House zone.

Compared with previous survey findings on the Naka Jujo Apartment House zone and the Minamibashi Site, the Oji and Oji Boshi Apartment House Zone accounted for only a few sites in the relevant era. This investigation zone is therefore presumed to be at the south end of the settlement from the relevant era in the Minamibashi Site.

From the soil layers dating back to the Ancient Times nine pit dwellings and four pillar holes were unearthed.

Most of the pit dwellings were lost due to the disturbance. As for the furnace kitchen ranges, only a part of their sides and scorched soil remained. The former dwellings date back to the late 7th to late 9th century. It has been found, along with the investigation of the Naka Jujo Apartment House Zone, that people continuously lived there in that era too.

序　言

北区十条台遺跡群南橋遺跡の発掘調査は、東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所による、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に先立つて行われました。

遺跡は、東京都北区王子本町二丁目に所在し、武蔵野台地東縁部の本郷台地縁辺部にあたる十条台に位置しています。南橋遺跡はこれまでの調査成果から、弥生時代後期から古墳時代初頭および古代の集落遺跡であることが分かっています。

今回の発掘調査では、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の遺構や遺物が検出され、本遺跡を含む周辺地域一帯の歴史と地域史の解明に繋がる貴重な資料が得られました。特に、南橋遺跡の弥生時代後期から古墳時代初頭の集落の様相が明らかになったことは大きな成果と言えます。

これらの成果をまとめた本報告書が地域研究の資料としてばかりでなく、埋蔵文化財に対する理解を深める上で、北区民の皆様をはじめ多くの方々にご活用していただけることが出来れば幸いです。

本報告の刊行にあたり、ご協力とご指導を賜りました東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所、東京都教育委員会、北区教育委員会に厚く御礼申し上げるとともに、ご教示いただきました研究者の皆様と調査にご協力いただいた地域住民の皆様に、心より感謝いたします。

令和5年9月

公益財団法人 東京都教育支援機構
理事長 坂東 真理子

例　言

- 1 本書は都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う北区十条台遺跡群南橋遺跡（北区 No.19 遺跡）の発掘調査報告書（東京都埋蔵文化財センター調査報告 第372集）である。なお、本報告は2分冊構成となっており、各分冊の主な掲載内容は、以下のとおりである。
 - 第1分冊 中十条アパート地区に関する報告
 - 第2分冊 （本書）王子・王子母子アパート地区に関する報告

中十条アパート地区及び王子・王子母子アパート地区に関する総括報告
- 2 発掘調査事業は東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所の委託を受け、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（現、東京都教育支援機構）東京都埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査に先立つ試掘調査は、平成29年1月16日から1月25日にかけて、北区教育委員会立ち会いのもと、共和開発株式会社によって実施された。
- 4 遺跡所在地：東京都北区王子本町二丁目12番2号
- 5 調査面積：4.698m²
- 6 調査及び一次整理期間：令和2年12月1日～令和4年2月28日
二次整理及び報告書作成期間：令和4年3月1日～令和5年5月31日
- 7 本事業における事業者との事業調整等は東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。

課長代理	鈴木 徳子	（令和2年12月1日～令和5年5月31日）
埋蔵文化財係 担当学芸員	野口 舞	（令和2年12月1日～令和3年3月31日）
		（令和4年4月1日～令和5年5月31日）
	山田 和史	（令和3年4月1日～令和3年5月31日）
	石井香代子	（令和3年6月1日～令和4年3月31日）
- 8 調査担当者
東京都埋蔵文化財センター北区王子アパート（王子本町）分室
調査課課長 西澤 明（令和2年12月1日～令和5年5月31日）
調査研究主任 飯塚武司（令和2年12月1日～令和4年8月31日）
調査研究員 島崎瑛美（令和2年12月1日～令和5年5月31日）
調査協力 岩倉建設株式会社 テイケイトレード株式会社
- 9 本報告書の執筆はⅠ～Ⅲ章・V章2節(2)(5)B(2)・C・D(2)、3節を島崎瑛美、V章1節、2節(1)(3)(4)(5)A・B(1)・D(1)を飯塚武司が担当し、V章のみ文末に文責を示した。なお、遺跡の位置と環境については、第1分冊で記述しており、重複することから割愛している。
- 10 本報告書の編集は島崎瑛美が行った。
- 11 出土遺物の分析に関して、下記の機関に協力を得た。
弥生時代後期から古墳時代初頭竪穴住居出土炭化材の樹種同定：株式会社古環境研究所
- 12 本報告の概要については、令和2～4年度「東京都埋蔵文化財センター年報」に報告されているが、本書の刊行をもって正式報告とする。

13 出土遺物及び発掘調査・整理に関わる図面・写真等の記録類は、北区教育委員会で保管している。

14 本文用例等

(1) 土層の土色や含有物の面積割合、土器の色調等の標記には、農林水産省水産技術會議事務局監修『新版標準土色帖』(日本色彩研究所発行 1998年)を用い、土色・マンセルノーションで示している。

(2) 出土遺物の注記番号は、「JMOA-〇〇〇」である。

(3) 挿図中に標記した標高値は、東京湾平均海面(T.P.)に基づいた標高を示している。

(4) 調査時における遺構平面図の実測、遺物の取り上げはトータル・ステーションシステムにより行った。

・光波測距器：トプロン トータルステーション ES

・データコレクター：トプロン FC-250

・使用ソフト：Totalstation 3 Dimension designed for IntelliCAD

(5) 本報告書掲載の地形図は以下のとおりである。

・国土地理院電子地形図 25000

・国土地理院基盤地図情報

15 グリッドの設定は北区の公共座標（世界測地系）を使用し、5mを単位として設定し、必要に応じてその中を細分した。標高はT.P.を用いている。遺跡の座標については以下のとおりである。

A22杭 十条台遺跡群南橋遺跡王子・王子母子アパート地区0基点座標

世界測地系(日本測地系 2000) X=27065.000 Y=-9395.000

北緯 35° 45' 21.46243" 東経 139° 43' 45.99369" 真北 0° 03' 38.54"

16 発掘調査及び整理・報告書作成業に関して、下記の方々と機関にご指導・ご協力を賜った。記して深謝いたします。(順不同・敬称略)

牛山英昭 東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所 東京都教育庁地域教育支援部管理課
北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館事業係

17 本報告書内で用いた遺構の略称記号は以下のとおりである。なお、竪穴住居跡等に伴う柱穴等にも、Pを使用している。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SX：方形周溝墓 P：柱穴

18 各挿図中で用いた主なスクリートーンは以下のとおりである。

遺構 ローム層 カマド・袖 カマド火床面

焼土範囲 柱痕

遺物 織維 赤彩 石器磨面・付着物

炭化材

19 各挿図中で用いた主なドットは以下のとおりである。

● 土器 ▲ 土製品 △ 石器・礫 □ 鉄器

◆ 炭化材 ◇ 炭化種子

目 次

十条台遺跡群南橋遺跡（王子・王子母子アパート地区）の調査

Summary

序言

例言

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の方法	1
3	調査の経過	4
II	層序	6
III	遺構と遺物	9
1	縄文時代	11
1)	遺構	11
A	住居跡	11
B	柱穴	11
C	土坑	11
2)	遺物	13
A	遺構内出土遺物	13
B	遺構外出土遺物	13
2	弥生時代後期から古墳時代初頭	18
1)	遺構	18
A	住居跡	18
B	掘立柱建物跡	20
C	柱穴	21
D	土坑	21
E	溝跡	21
2)	遺物	22
A	遺構内出土遺物	22
B	遺構外出土遺物	23
3	古代	38
1)	遺構	38
A	住居跡	38
B	柱穴	42
2)	遺物	43

A	遺構内出土遺物	43
B	遺構外出土遺物	45
C	石器	45
D	鉄器	45
IV	自然科学分析	71
V	調査の成果と課題	74
1	縄文時代	74
2	弥生時代後期から古墳時代初頭	74
3	古代	90
	引用・参考文献	97
	報告書抄録	

卷頭図目次

写真1	調査区全景（北から）	i	写真10	弥生時代後期から古墳時代初頭の溝跡 (4号溝跡)（西から）	iv
写真2	縄文時代の土坑（26号土坑）（南から）	iii	写真11	弥生時代後期から古墳時代初頭の土器	iv
写真3	縄文時代の土器と石器	iii	写真12	古代の竪穴住居跡（135号住居跡） (東から)	v
写真4	弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡 (141号住居跡)（北から）	iii	写真13	古代の竪穴住居跡（126号住居跡） 土器出土状態（西から）	v
写真5	同住居跡内土器出土状態（北から）	iii	写真14	古代の竪穴住居跡（132号住居跡） 土器出土状態（南から）	v
写真6	同住居跡内直口壺出土状態（南から）	iii	写真15	古代の刀子（2/3）	v
写真7	同住居跡内出土直口壺正面（1/5）	iv	写真16	古代の土師器	v
写真8	同住居跡内出土直口壺内面（1/5）	iv			
写真9	弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物 跡（7号掘立柱建物跡）（南から）	iv			

挿図目次

第1図	遺跡の位置（1/25,000）	1	第11図	127号住居跡（1）（1/30・1/60）	24
第2図	調査区区割図（1/800）	3	第12図	127号住居跡（2）・128号住居跡（1/4 ・1/60）	25
第3図	基本層序実測位置（1/700）	7	第13図	129号住居跡・138号住居跡（1/60）	26
第4図	基本層序（1/80）	8	第14図	141号住居跡（1）（1/20・1/60）	27
第5図	発掘調査区 全体図（1/700）	10	第15図	141号住居跡（2）（1/30）	28
第6図	縄文時代 遺構分布図（1/700）	12	第16図	弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群 (1/50)	29
第7図	縄文時代の竪穴住居跡・柱穴（1/60・ 1/40）	14	第17図	7号掘立柱建物跡（1）（1/60）	30
第8図	縄文時代の土坑（1/40）	15	第18図	7号掘立柱建物跡（2）（1/40）	31
第9図	縄文時代の土器・石器（1/3・2/3・ 1/1）	16	第19図	7号掘立柱建物跡（3）・その他の柱穴 (1/40)	32
第10図	弥生時代後期から古墳時代初頭 遺構分布図（1/700）	19			

第 20 図	その他の柱穴（2）（1/40）	33
第 21 図	弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑・溝跡（1/4・1/40・1/80）	34
第 22 図	弥生時代後期から古墳時代初頭の土器（1/3・1/4）	35
第 23 図	古代 遺構分布図（1/700）	39
第 24 図	126 号住居跡（1）（1/30・1/60）	46
第 25 図	126 号住居跡（2）（1/4・1/20・1/30・1/60）	47
第 26 図	126 号住居跡（3）・131 号住居跡（1/30・1/60）	48
第 27 図	132 号住居跡（1）（1/60）	49
第 28 図	132 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）	50
第 29 図	134 号住居跡（1）（1/30・1/60）	51
第 30 図	134 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/60）	52
第 31 図	135 号住居跡（1）（1/30・1/60）	53
第 32 図	135 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）	54
第 33 図	136 号住居跡（1）（1/30・1/60）	55
第 34 図	136 号住居跡（2）（1/8・1/30・1/60）	56
第 35 図	137 号住居跡（1）（1/60）	57
第 36 図	137 号住居跡（2）（1/20・1/60）	58
第 37 図	140 号住居跡（1）（1/30・1/60）	59
第 38 図	140 号住居跡（2）（1/30・1/60）	60
第 39 図	143 号住居跡（1）（1/30・1/60）	61
第 40 図	143 号住居跡（2）（1/8・1/60）	62
第 41 図	古代の柱穴（1/40）	63
第 42 図	古代の土師器・須恵器（1）（1/4）	64
第 43 図	古代の土師器・須恵器（2）（1/4）	65
第 44 図	古代の石器・鉄器（1/2・1/3）	66
第 45 図	十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	73
第 46 図	南橋遺跡調査地点全体図（1/2,700）	75
第 47 図	弥生時代後期から古墳時代初頭の土器分類図（1/8）	79
第 48 図	南橋遺跡 土器編年表（1/10）	83
第 49 図	中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡（1/200・1/400）	91
第 50 図	2 号方形周溝墓・4 号溝跡（1/100）	93
第 51 図	中十条アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭 時期別遺構分布図（1/600）	94
第 52 図	王子・王子母子アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭 時期別遺構分布図（1/1,200）	95
第 53 図	中十条アパート、王子・王子母子アパート地区 古代 時期別遺構分布図（1/1,200）	96

表 目 次

第1表	発掘調査・整理作業工程表	5	第7表	古代の竪穴住居跡 計測値一覧表	66
第2表	縄文時代土器観察表	17	第8表	古代の土師器・須恵器(1)~(4) 観察表	67
第3表	縄文時代石器観察表	17	第9表	古代の石器 観察表	70
第4表	弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居 跡 計測値一覧表	36	第10表	古代の鉄器 観察表	70
第5表	弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴 計測値一覧表	36	第11表	樹種同定結果	71
第6表	弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 観察表(1)(2)	36	第12表	南橋遺跡調査地点一覧表(1)(2)	76

写 真 図 版 目 次

図版 1

1. 王子・王子母子アパート地区着手前①(北から)
2. 王子・王子母子アパート地区着手前②(北から)

図版 2

1. VII区、IX①区全景(南から)
2. IX②区全景(北から)

図版 3

1. IX③区全景(北から)
2. X区全景(南から)

図版 4

1. XI①区全景(北から)
2. XI②-1、2区全景(北から)

図版 5

1. XI②-3区全景(東から)
2. XIII区全景(北から)

図版 6

1. VII区基本層序(A)(南から)
2. VII区基本層序(B)(西から)
3. IX区基本層序(C)(北から)
4. X区基本層序(D)(西から)
5. X区基本層序(E)(東から)
6. XI区基本層序(F)(東から)
7. XI区基本層序(J)(西から)
8. XIII区基本層序(L)(北から)

図版 7

1. 133号住居跡全景(西から)
2. 133号住居跡完掘(西から)
3. 88号柱穴完掘(東から)
4. 88号柱穴堆積土層(東から)
5. 22号土坑完掘(南から)
6. 22号土坑堆積土層(南から)
7. 26号土坑完掘(南から)
8. 26号土坑堆積土層(南から)

図版 8

1. 127号住居跡全景(西から)
2. 127号住居跡完掘(西から)

図版 9

1. 127号住居跡P4完掘(南から)
2. 127号住居跡P4堆積土層(東から)
3. 127号住居跡P5完掘(南から)
4. 127号住居跡P5堆積土層(東から)
5. 127号住居跡遺物出土状況(南から)
6. 127号住居跡A-A'堆積土層(東から)
7. 128号住居跡完掘(南から)
8. 128号住居跡A-A'堆積土層(南から)

図版 10

1. 129号住居跡全景(南から)
2. 129号住居跡完掘(南から)

3. 129号住居跡A-A'堆積土層（西から）
4. 129号住居跡C-C'堆積土層（南から）
5. 138号住居跡全景（南から）
6. 138号住居跡完掘（南から）
7. 138号住居跡A-A'堆積土層（南から）
8. 138号住居跡B-B'堆積土層（東から）

図版 11

1. 141号住居跡全景（北から）
2. 141号住居跡完掘（北から）

図版 12

1. 141号住居跡遺物出土状態（北から）
2. 141号住居跡土器出土状態①（北から）
3. 141号住居跡土器出土状態②（北から）
4. 141号住居跡P1完掘（南から）
5. 141号住居跡P2完掘（北から）

図版 13

1. 弓生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群（南から）
2. 60号柱穴完掘（東から）
3. 60号柱穴堆積土層（東から）
4. 61号柱穴完掘（東から）
5. 61号柱穴堆積土層（東から）

図版 14

1. 65号柱穴完掘（東から）
2. 65号柱穴堆積土層（東から）
3. 62・65号柱穴完掘（東から）
4. 62号柱穴堆積土層（東から）
5. 63号柱穴完掘（東から）
6. 63号柱穴堆積土層（東から）
7. 64号柱穴完掘（東から）
8. 64号柱穴堆積土層（東から）

図版 15

1. 66号柱穴完掘（南から）
2. 66号柱穴堆積土層（南から）
3. 67号柱穴完掘（東から）
4. 67号柱穴堆積土層（東から）
5. 68号柱穴完掘（西から）
6. 68号柱穴堆積土層（西から）
7. 69号柱穴完掘（東から）
8. 69号柱穴堆積土層（東から）

図版 16

1. 70号柱穴完掘（南から）
2. 70号柱穴堆積土層（南から）
3. 73号柱穴完掘（東から）
4. 73号柱穴堆積土層（東から）
5. 75号柱穴A-A'堆積土層（東から）
6. 75号柱穴B-B'堆積土層（東から）
7. 76号柱穴完掘（北から）
8. 76号柱穴堆積土層（北から）

図版 17

1. 77・78・79号柱穴完掘（北から）
2. 77号柱穴堆積土層（南から）
3. 78号柱穴堆積土層（西から）
4. 79号柱穴堆積土層（南から）
5. 80号柱穴完掘（南から）
6. 80号柱穴堆積土層（南から）
7. 81・82号柱穴完掘（西から）
8. 81・82号柱穴堆積土層（西から）

図版 18

1. 84号柱穴完掘（東から）
2. 84号柱穴堆積土層（東から）
3. 21号土坑完掘（東から）
4. 21号土坑堆積土層（北から）
5. 23号土坑完掘（南から）
6. 23号柱穴堆積土層（東から）
7. 24号土坑完掘（南から）
8. 25号土坑堆積土層（東から）

図版 19

1. 4号溝跡完掘①（東から）
2. 4号溝跡完掘②（西から）
3. 4号溝跡A-A'堆積土層（東から）
4. 4号溝跡B-B'堆積土層（東から）

図版 20

1. 126号住居跡全景（西から）
2. 126号住居跡完掘（西から）

図版 21

1. 126号住居跡カマド全景（西から）
2. 126号住居跡カマド完掘（西から）
3. 126号住居跡カマドN-N'堆積土層（西から）

4. 126号住居跡カマド M-M' 堆積土層（南から）
5. 126号住居跡土器器出土状態（西から）
6. 126号住居跡須恵器出土状態（西から）
7. 126号住居跡鉄器出土状態（南から）
8. 126号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）
- 図版 22
1. 131号住居跡全景（西から）
2. 131号住居跡完掘（西から）
3. 131号住居跡焼土範囲（西から）
4. 131号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
5. 131号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）
- 図版 23
1. 132号住居跡全景（東から）
2. 132号住居跡完掘（東から）
- 図版 24
1. 132号住居跡カマド全景（南から）
2. 132号住居跡カマド完掘（南から）
3. 132号住居跡カマド J-J' 堆積土層（西から）
4. 132号住居跡カマド内土器器出土状態（西から）
5. 132号住居跡土器器出土状態（西から）
6. 132号住居跡鉄器出土状態（北から）
7. 132号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
8. 132号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）
- 図版 25
1. 134号住居跡全景（西から）
2. 134号住居跡完掘（西から）
- 図版 26
1. 134号住居跡カマド焼土範囲（西から）
2. 134号住居跡カマド完掘（西から）
3. 134号住居跡カマド H-H' 堆積土層（西から）
4. 134号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）
5. 134号住居跡 P1 完掘（西から）
6. 134号住居跡 P1 堆積土層（西から）
7. 134号住居跡鉄器出土状態（西から）
8. 134号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）
- 図版 27
1. 135号住居跡全景（東から）
2. 135号住居跡完掘（東から）
- 図版 28
1. 135号住居跡カマド全景（南から）
2. 135号住居跡カマド完掘（南から）
3. 135号住居跡 P3 完掘（南から）
4. 135号住居跡 P3 堆積土層（南から）
5. 135号住居跡 P7 完掘（南から）
6. 135号住居跡 P7 堆積土層（東から）
7. 135号住居跡鉄器出土状態（南から）
8. 135号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）
- 図版 29
1. 136号住居跡全景（西から）
2. 136号住居跡完掘（西から）
- 図版 30
1. 136号住居跡カマド全景（西から）
2. 136号住居跡カマド完掘（西から）
3. 136号住居跡 P1 完掘（西から）
4. 136号住居跡 P1 堆積土層（西から）
5. 136号住居跡土器器出土状態①（西から）
6. 136号住居跡土器器出土状態②（西から）
7. 136号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
8. 136号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）
- 図版 31
1. 137号住居跡全景（西から）
2. 137号住居跡完掘（西から）
- 図版 32
1. 137号住居跡焼土範囲全景（南から）
2. 137号住居跡焼土範囲堆積土層（西から）
3. 137号住居跡 P1 完掘（東から）
4. 137号住居跡 P2 完掘（東から）
5. 137号住居跡 P3 完掘（東から）
6. 137号住居跡 P4 完掘（東から）
7. 137号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
8. 137号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）
- 図版 33
1. 140号住居跡全景（南から）
2. 140号住居跡完掘（南から）
- 図版 34
1. 140号住居跡カマド全景（南から）
2. 140号住居跡カマド完掘（南から）

3. 140号住居跡P1完掘（南から）
4. 140号住居跡P1堆積土層（東から）
5. 140号住居跡P2完掘（南から）
6. 140号住居跡P2堆積土層（南から）
7. 140号住居跡A-A'堆積土層（東から）
8. 140号住居跡B-B'堆積土層（南から）

図版 35

1. 143号住居跡全景（南から）
2. 143号住居跡完掘（南から）

図版 36

1. 143号住居跡カマド全景（南から）
2. 143号住居跡カマド完掘（南から）
3. 143号住居跡カマドH-H'堆積土層（南から）
4. 143号住居跡カマドG-G'堆積土層（東から）
5. 143号住居跡カマド石製支脚出土状態（南から）
6. 143号住居跡カマド石製支脚出土状態-近接
(南から)
7. 143号住居跡A-A'堆積土層（東から）
8. 143号住居跡B-B'堆積土層（南から）

図版 37

1. 83号柱穴完掘（西から）
2. 83号柱穴堆積土層（西から）
3. 85号柱穴完掘（南から）
4. 85号柱穴堆積土層（南から）
5. 86号柱穴完掘（東から）
6. 86号柱穴堆積土層（東から）
7. 87号柱穴完掘（東から）
8. 87号柱穴堆積土層（南から）

図版 38

縄文時代の土器・石器

図版 39

弥生時代後期から古墳時代初頭の土器

図版 40

古代の土師器・須恵器（126号住居跡）

図版 41

古代の土師器・須恵器（126号住居跡以外）

図版 42

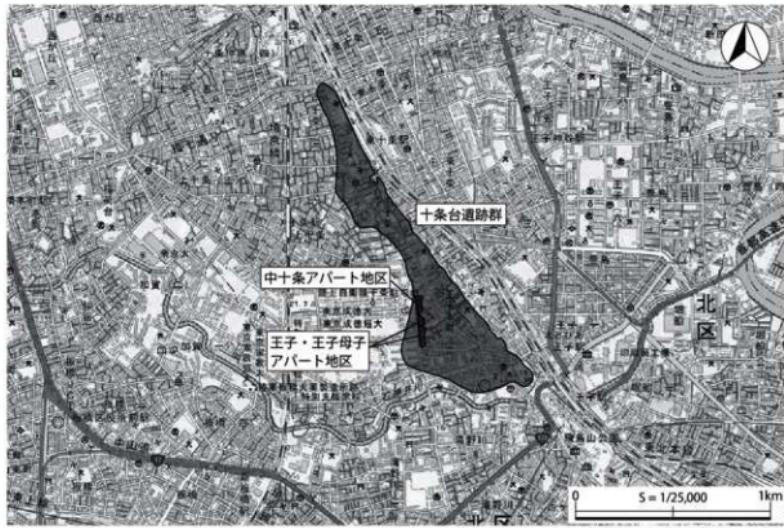
古代の石器・鉄器

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

本発掘調査は、東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所（以下「事業者」という。）による、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に伴い、事前に実施したものである。今回調査対象となった地区は、東京都北区王子本町二丁目に所在しており、当該地区とその周辺は南橋遺跡にあたり、十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）として包括されている。本事業による発掘調査の対象面積は、4,698m²である。

本事業に先立ち、埋蔵文化財保護法 94 条に基づく届出、試掘調査等の経緯を踏まえ、本発掘調査の実施が決定した。調査は除却工事完了後に開始されることとなり、令和 2 年 10 月 28 日付で東京都埋蔵文化財センター（以下「都埋文」という。）から東京都教育委員会（以下「都教委」という。）へ発掘届（2 斯文事埋文 2378 号）を提出し、令和 2 年 11 月 25 日付で都教委から通知（2 教地管理第 2802 号）を受け取った。令和 2 年 11 月より準備工を行い、12 月より発掘調査に着手した。



第 1 図 遺跡の位置 (1/25,000)

2 調査の方法

調査対象地は、東京都遺跡地図に「十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）」として登録された遺跡内の南西側に位置し、十条台遺跡群の中でも特に南橋遺跡と呼ばれる範囲に該当する。十条台遺跡群は複数の遺跡で構成されており、南橋遺跡の南側には宿遺跡、南東側には亀山遺跡が位置する。

調査の方法は都教委と北区教育委員会（以下「区教委」という。）との協議・指導の上決定した。住居跡や土坑等の遺構番号は、中十条アパート地区の調査で使用した番号の続きから付番している。また、遺構調査の方法や作図、遺物の取り上げ方法や写真撮影等の記録については、これまでの調査と互換性を保持できるようおおよそ準拠している。

発掘調査の作業手順については、東京都埋蔵文化財センターの作業工程水準表及び掘削作業標準に従って実施した。

また調査にあたり月に一回程度、事業者・都教委・区教委と都埋文の四者で北区王子アパート（王子本町）分室において定例会議を行い、発掘調査の進捗状況や調査工程等を確認し、調査状況を把握・共有し、調査を円滑に進めるための協議を行った。

調査区設定

調査区の設定は、調査区の軸線方向を国土座標に準拠させた $5 \times 5\text{m}$ 方眼で区画し、その方眼 1 単位を 1 グリッドとした。グリッド名は北西隅を基点に、東西軸にアルファベットを D ~ M、南北軸にアラビア数字を 21 ~ 54 まで付した。また調査区内は、発生残土の場内処理や出入口の関係で、VII区～XIII区に区分し、さらにIX区は①～③、XI区は①と②-1～3に分割して調査を行った。区分けのローマ数字は中十条アパート地区の調査で使用した数字の続きから付番している（第2図）。

座標軸の基点（原点）は、調査区を包括するグリッド域北東端の A22 杭を 0 基点原点杭とし、世界測地系（日本測地系 2000）に基づく座標値は、平面直角座標 X=27065.000・北緯 35° 45' 21.46243''、Y=-9395.000・東経 139° 43' 45.99369''、真北 0° 03' 38.54''を示す。

遺物の取り上げ

遺物の取り上げ方法は、遺構出土の遺物は光波測量機器（トータル・ステーションシステム）を利用して、その出土位置を記録している。遺構等の実測に關しても光波測量機器を活用し、そこで得られた 3 次元データについては、発掘調査整理支援システムで処理する方法を採択して、作業の省力化とデータの信頼性確保を図った。

本遺跡はこれまでの調査や試掘成果から、弥生時代から古墳時代初頭と古代を中心とした遺構・遺物が遺存している可能性が高いため、調査は基本的に、表土掘削を重機を用いて行い、遺構の掘削や図化作業を段階的に人力で行った。

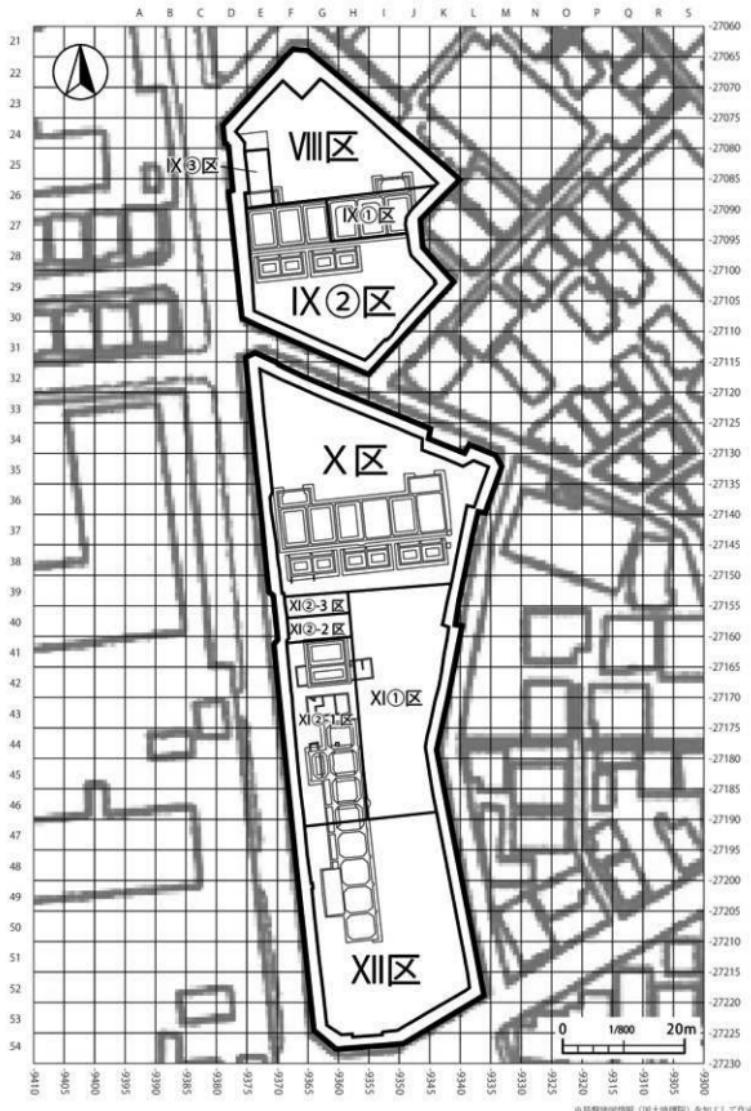
遺構図の作成は、平面図は遺り方測量による手描作図とトータル・ステーションシステムによる測量を併用して図化を行っている。土層堆積状態等の断面図は基本的には手書きによる作図である。

出土遺物の取り上げは、トータル・ステーションシステムにより出土地点を記録して取り上げることを基本としているが、表土や攪乱層、明らかに混在していると判断される遺物については、一括して取り上げている。

写真撮影

記録写真的撮影は 35mm フィルムカメラ、デジタルカメラを併用して撮影を行っている。また、それらのカメラを用いて高所作業車による撮影を適宜実施した。調査区全体の写真是、発生残土を場内で処理を行う関係上、調査区をVII区～XIII区に区分したため、一度に全てを撮影することは不可能で、各区について高所作業車を適宜用いて撮影を行っている。

遺構・遺物精査



第2図 調査区区割図 (1/800)

検出された遺構と遺物は調査時と整理作業時に精査し、出土遺物やその配置から帰属時期を決定している。さらに遺構の性格や帰属時期における特性を踏まえて報告書への掲載を判断し、個別遺構図・遺構全体図・遺物分布図及び各種観察表を作成している。

出土遺物については、各時期の遺構や出土層位等を鑑みて器種分類し、遺存状態が良好な資料を中心に抽出して掲載している。

報告書作成

報告書の作成は、挿図・図版・表等全てパソコン上で作業を行った。遺構図版は、手描き図面はスキャナーで取り込み、それを下図としてドローソフト（Adobe Illustrator CC）に取り込みトレース及び版組みを行った。遺物図面は、手描きにより作成した実測図をスキャナーで取り込みトレースし、拓本画像と合わせて版組みを行った。

これらのデータは編集ソフト（Adobe InDesign CC）に貼り付け、文章とともにレイアウトして編集したものを、印刷業者に入稿した。

3 調査の経過

令和2年11月下旬より準備工を行い、11月30日まで完了した。調査事務所となる仮設建物はXI②-1区に設置した。発掘作業は令和2年12月1日から令和4年2月28日まで行い、整理作業は令和4年2月1日から令和5年5月31日まで行った（第1表）。

調査区内は全体的に攪乱により大きく削られており、遺構の遺存状態は良いとは言えず、当初予定よりも遺構・遺物の検出数は少なかった。アパート基礎内でも遺構確認作業を行い、わずかに遺構が遺存している状態が確認された。また、各調査区に点在する樹木根については、表土掘削時及び遺構調査終了時に 0.35m^3 バックホウを用いて抜根した。

発掘調査に伴う排土は場内に仮置きし、調査区の終了とともに埋戻し作業を行った。排土仮置き場については、防塵シートを設置し、水撒きを適宜行って、近隣への粉塵の飛散防止に努めた。

また、新型コロナウイルス感染症の対策を行ないながら調査することに留意した。発掘調査中は新たに作業員休憩所を増設して三密にならないよう調整し、マスク着用、手洗い・うがいを励行した。

令和2年度は、VII・IX区の調査を行った。VII区の調査を令和2年12月1日から、IX①区の調査を令和3年1月7日から開始した。北側から表土掘削を行って、排土はIX②区に仮置きし、調査終了後の令和3年2月12日から埋め戻しを行い、令和3年3月9日に終了した。

IX②区は令和3年2月17日から、IX③区は令和2年3月16日から調査を開始した。北側から表土掘削を行い、排土はVII・IX①区に仮置きして、調査終了後の令和3年3月19日から埋め戻しを開始し、令和3年3月26日に終了した（図版1～3）。

令和4年度は、X・XI・XII区の調査を行った。調査事務所をXII区に移動する関係上、最初はXII区の調査から開始した。令和3年4月1日に北側から表土掘削を行い、排土はXI区に仮置きして、調査終了後の令和3年5月17日から埋め戻しを開始し、令和3年5月31日に終了した。

X区は令和3年5月11日から調査を開始した。北側から表土掘削を行い、排土はXI区に仮置きした。北側の調査が終了した後の7月7日に、調査事務所をXI②-1区からXII区へ移動した。その後X区南側の調査を開始し、X区の調査が完全に終了したのは令和3年9月10日である。埋め戻しを令

和3年9月14日から開始し、令和3年10月15日に終了した。

XII区は、まずXI①区の調査を令和3年9月21日から開始した。北側から表土掘削を行い、排土はXII区に仮置きして、調査終了後の令和3年11月25日から埋め戻しを開始し、令和3年12月7日に終了した。XI②-1区の表土掘削は、XI①区の埋め戻しと同時の令和3年11月25日から開始した。南側から掘削し、令和4年1月12日からはXI②-2区の表土掘削も開始した。排土はX区へ仮置きし、調査終了後の令和4年1月24日から両地区の埋め戻しを開始し、令和4年1月27日に終了した。XI②-3区は令和4年1月31日から表土掘削を開始し、排土はX区に仮置きして、調査終了後の令和4年2月21日に埋め戻しを開始して同日中に終了した（図版3～5）。

その後、調査区内の整備・保全作業等を行い、令和4年2月28日に全ての発掘調査が終了した。

発掘調査終了後、東京都教育委員会教育長宛に令和4年3月2日付で終了報告（3ス文事埋文第2455号）、埋蔵文化財保管証（3ス文事埋文第2454号）、発掘調査の概要（3ス文事埋文第2456号）、警視庁王子警察署宛に令和4年3月2日付で発見届（3ス文事埋文第2454号）を提出した。令和4年3月16日付で東京都教育委員会教育長より文化財認定（3教地管理第4728号）を受けた。

整理作業は、遺物の水洗い・注記の一次整理作業を現地事務所にて令和4年2月1日から開始し、令和4年2月28日に終了した。

二次整理作業は令和4年3月1日から開始し、令和4年4月1日以降の令和4年度は二次整理作業を中心に行った。主な作業は、測量データ処理、遺構図面の修正・トレース、遺物の分類、接合・復元、遺構写真整理、各種台帳作成等である。なお、調査地を事業者へ返還するため、令和4年7月1日より整理作業場を東京都埋蔵文化財センター大塚分室へ移動した。

令和5年度は、引き続き大塚分室にて二次整理作業を行った。主な作業は、報告書の版組み・修正及び編集作業、移管準備で、令和5年5月31日に全ての作業を終えた。

また、令和5年5月10日に、北区教育委員会の管理する北区内の収蔵庫へ遺物や記録類を移管した。

第1表 発掘調査・整理作業工程表

	令和2年		令和3年												令和4年	
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
発掘作業		■														
VII区																
XII区																
X区																
XI区																
XIII区																
場内整備																
整理作業	一次整理															
	令和4年												令和5年			
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
整理作業	二次整理 遺物保管															■

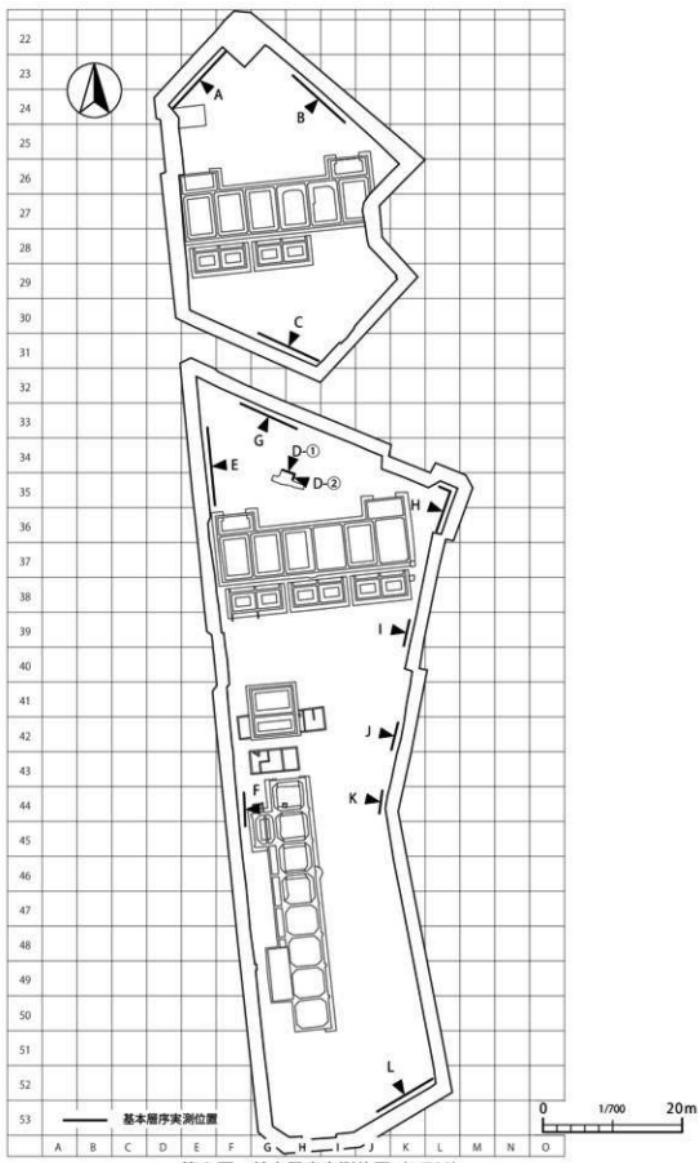
II 層序

南橋遺跡が属する十条台遺跡群は、武藏野台地東縁部の本郷台地縁辺部にあたる十条台に立地する。台地の標高は 20m 台で、東側は急崖となり、荒川をはじめとする多くの水系によって形成された東京低地が広がる。今回の調査地の標高は、地表面で 24.0m 前後、遺構確認面で 23.0m 前後を測り、南側になるにつれて、徐々に地形が下っていく。

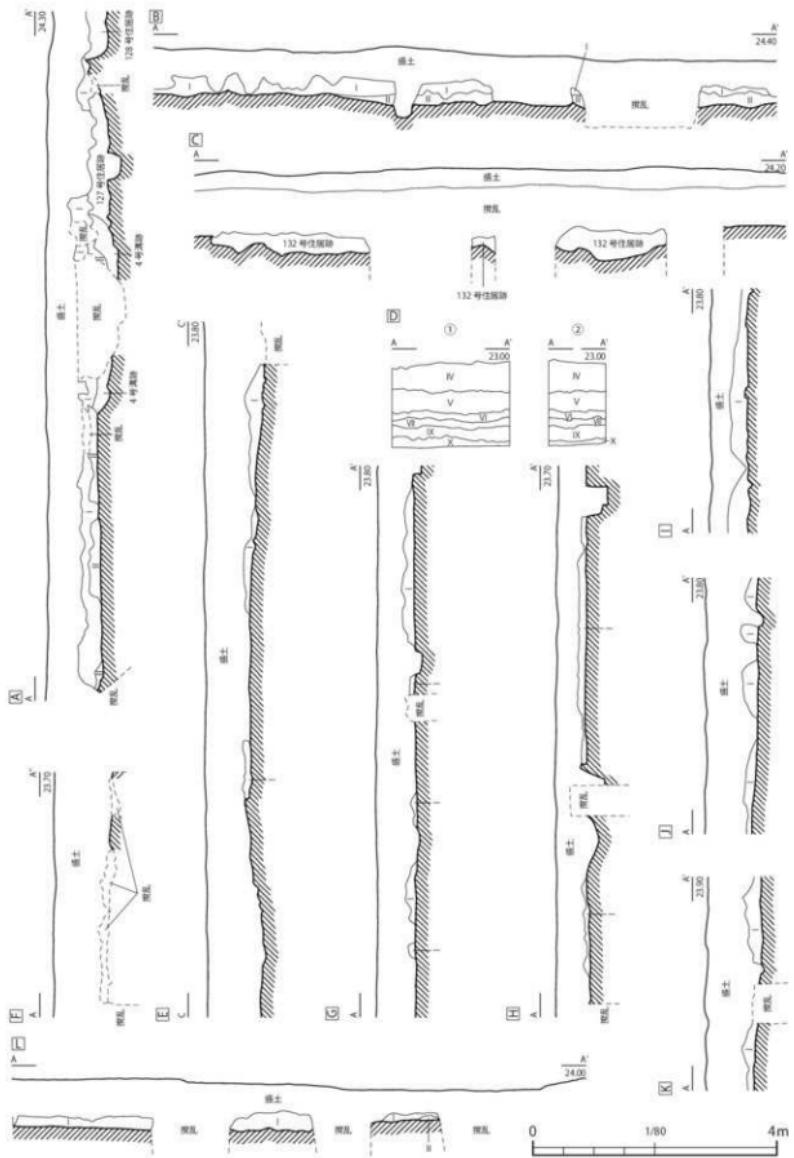
今回の調査では、調査区内の東・西・南・北壁と、深く掘り込まれた防空壕の壁面を利用して、堆積状態の記録作業を行った。調査区内は後世の土地利用によって地表面が平坦化し、全面に厚さ約 0.8 ~ 1.0m の盛土や攪乱が広がっていた。アパート建設・解体時に整地されたものと思われる。掘削は広範囲に及んでおり、部分的にアパート建設・解体以前の I ・ II 層が残存していたが、ほとんどの箇所で III 層ソフトローム層は失われており、盛土や攪乱の下では IV 層ハードローム層が確認された。

ここでは、堆積状態の記録を取った箇所から比較的遺存状態の良い箇所を抽出し、基本層序として掲載する。各層の詳細は以下のとおりである（第 3 図、図版 6）。

- I 層：黒褐色土（10YR2/2） 旧表土。径 5 ~ 10mm のローム粒子を 1 ~ 3% 含む。
締り弱い。粘性強い。
- II 層：黒褐色土（10YR2/3） 耕作土。径 10mm 以上のロームブロックを 5 ~ 7% 含む。
締り弱い。粘性強い。
- IV 層：褐色土（10YR4/6） ハードローム層。径 1 ~ 2mm の赤色スコリアを 5 ~ 7%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 5 ~ 7% 含む。
締り強い。粘性強い。
- V 層：褐色土（10YR4/4） 第一黒色帯。径 1 ~ 2mm の赤色スコリアを 5 ~ 7%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 5 ~ 7%、径 1 ~ 2mm の黄色スコリアを 1 ~ 2% 含む。締り強い。粘性強い。
- VI 層：黄褐色土（10YR5/8） AT 層。径 1 ~ 2mm の赤色スコリアを 7 ~ 10%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 7 ~ 10%、径 1 ~ 2mm の黄色スコリアを 1 ~ 2%、径 1 ~ 2mm の青灰色スコリアを 2 ~ 3%、径 1mm 以下のガラス質粒子を 1% 以下含む。締り強い。粘性強い。
- VII 層：暗褐色土（10YR3/4） 第二黒色帯上層。径 1 ~ 2mm の赤色スコリアを 10 ~ 15%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 10 ~ 15% 含む。
締り強い。粘性強い。
- IX 層：黒褐色土（10YR2/3） 第二黒色帯下層。径 1 ~ 2mm の赤色スコリアを 10 ~ 15%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 10 ~ 15% 含む。締り強い。粘性強い。
- X 層：褐色土（10YR4/6） 立川ローム最下層。径 1 ~ 2mm 赤色スコリアを 3 ~ 5%、径 1 ~ 2mm の黒色スコリアを 3 ~ 5% 含む。
締り強い。粘性強い。



第3図 基本層序実測位置 (1/700)



第4図 基本層序 (1/80)

III 遺構と遺物

今回の調査では、主に縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の遺構・遺物が検出された。令和元年7月から令和2年10月まで調査が実施された北側に隣接する中十条アパート地区では、同様の遺構・遺物が数多く検出されている。今回調査が実施された王子・王子母子アパート地区は、全体的に地表面が削平されており、地形が南側に下るにつれて遺構の密度が薄くなることが試掘成果から示されていたが、遺構の検出数は少なく、前回の地区に比べ遺構分布が密でないことが窺われた。遺物も出土数は多くない（第5図）。

しかしながら今回の調査成果は、南橋遺跡が弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の集落を形成していることを示し、南橋遺跡の過去の調査成果を補強するものと言うことができる。また、詳細はV章まとめに記すが、今回の調査地点が弥生時代後期から古墳時代初頭の集落の南端に相当する部分と思われ、前回の地区を含む集落の構造の様相を把握できたことは大きな成果である。

今回の調査で検出された遺構・遺物は以下のとおりで、次頁から時代ごとの報告を行う。なお遺構の番号は、中十条アパート地区で使用した番号に続けて順に付番している。また、調査中は時代に関わらず付番しているため、時代別の報告の中で必ずしも連番ではない。整理作業段階で、遺構としての認定から外れたものは欠番としている。遺物に関しては、時代ごとに分類・実測し、主要なものを図化、掲載している。

《縄文時代》（第6図）

遺構 住居跡－1軒、柱穴－1基、土坑－2基

遺物 土器 前期前葉・中葉・後葉、中期後葉、後期後葉

石器 石鏃、石錐、剥片、石皿

《弥生時代後期から古墳時代初頭》（第10図）

遺構 住居跡－5軒、掘立柱建物跡－1棟、柱穴－8基、土坑－4基、溝跡－1条

遺物 土器 瓢、壺、高坏、器台、塊

土製品 燃成粘土塊

礫

その他 炭化材

《古代》（第23図）

遺構 住居跡－9軒、柱穴－4基

遺物 土器 土師器甕、鉢、坏 須恵系土器坏 須恵器甕、瓶、坏

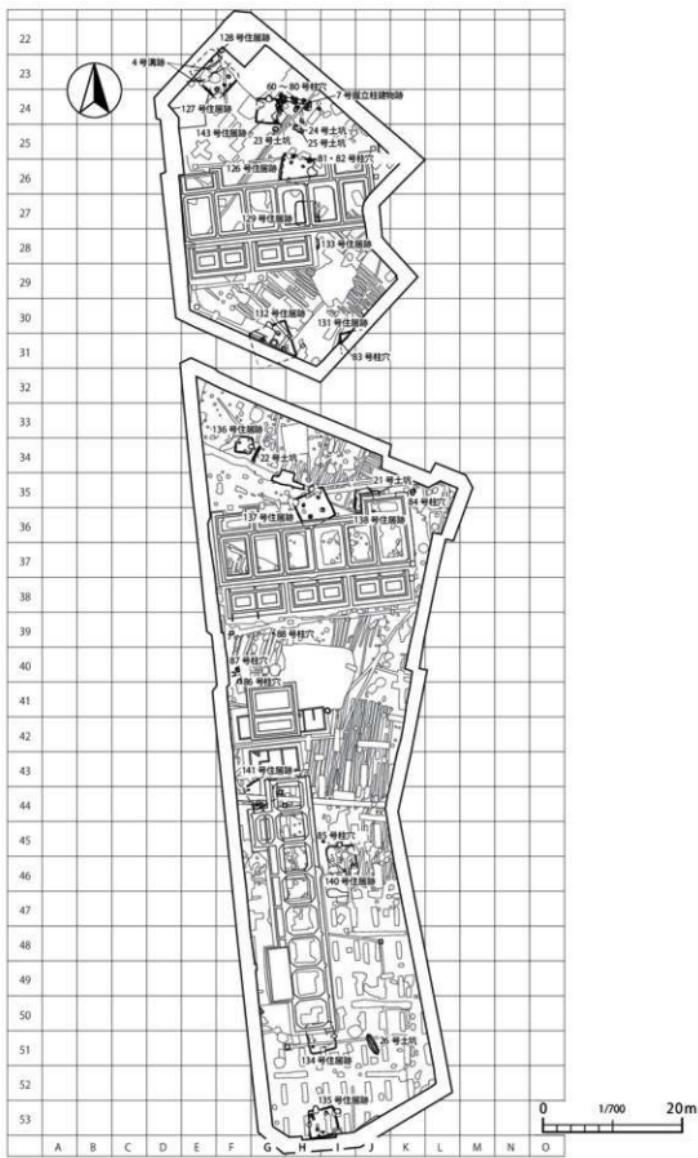
土製品 支脚、燃成粘土塊

石器 支脚、砥石

礫

鉄器 棒状鉄器、釘、刀子、鉄滓

その他 炭化種子



第5図 発掘調査区 全体図 (1/700)

『中世以降』

遺構 なし

遺物 土器 土師質土器环

1 繩文時代

1) 遺構

A 住居跡

133号住居跡（第7図、図版7）

調査区北側28-H区で検出された。アパート基礎や搅乱によりローム面まで削平を受けていることから、遺存状況は良くなく、住居跡の東壁の一部が検出されるにとどまった。残存部の長軸は1.58mで、住居跡の南東端に長軸推定0.45m×短軸0.23m×深さ0.20mの平面楕円形の柱穴が確認された。堆積土は6層に分かれ、5・6層が貼床で、貼床の厚さは15.0～25.0cmを測る。炉跡や貯蔵穴は検出されておらず、遺物は出土していない。

堆積土が弥生時代後期以降の遺構の土とは異なり、貼床の残存状況などから縄文時代の住居跡とした。

B 柱穴

88号柱穴（第7図、図版7）

調査区中央西側39-G区で検出された。規模は長軸0.46m×短軸0.44m×深さ0.85m、平面形は円形の柱穴である。遺物は出土していない。堆積土は2層に分かれ、縄文時代に特徴的なもやがかかったような暗褐色土を呈していたことから、縄文時代の柱穴とした。

C 土坑

22号土坑（第8図、図版7）

調査区中央北側34-G区で検出された。規模は長軸2.60m×短軸0.64m×深さ0.65mを測り、平面形は隅丸長方形、断面形は下部に向かって狭まるV字形である。長軸の両端壁が外側に抉れ、とりわけ南側が大きく抉り込まれている。短軸の東壁に1箇所、5.0cm程度の凹部が認められる（断面C-C'）。

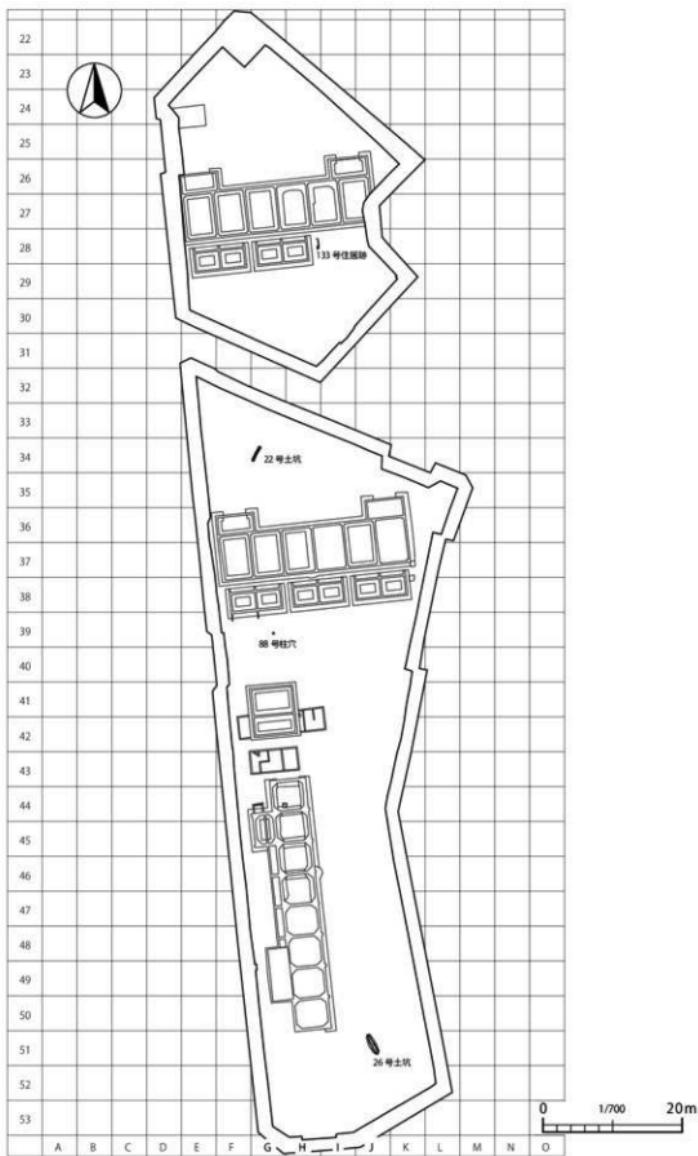
堆積土は5層に分かれれる。遺物は出土していない。

26号土坑（第8図、図版7）

調査区南側51-J区で検出された。規模は長軸3.1m×短軸1.1m×深さ1.7mを測り、平面形は楕円形、断面形は下部に向かって狭まるV字形である。長軸の両端壁は外側に抉り込まれ、短軸の東壁に1箇所、西壁に3箇所、10.0～20.0cmの凹部が認められる（断面C-C'～F-F'）。

堆積土は7層に分かれ、自然堆積土と埋め戻し土が交互になっている。1・2・4・7層が土坑使用時の自然堆積土で、3・5・6層が埋め戻し土と思われ、少なくともこの土坑は3回にわたって機能していたと考えられる。

遺物は、上層から縄文時代前期前葉関山式の深鉢の破片が2点出土した。



第6図 繩文時代 遺構分布図 (1/700)

2) 遺物

縄文時代の遺物は、遺構内外から、土器 41 点、石器 7 点が出土した。ここでは、そのうち土器 11 点、石器 4 点を報告する。

A 遺構内出土遺物

26 号土坑（第 9 図、図版 38、第 2 表）

土器が 2 点出土し、1 点を図示した。1 は前期前葉関山式の深鉢の破片で、胎土に纖維を含んでいる。単節 LR 縄文を施文し、その下にループ文を施文している。内面のミガキが顕著である。

126 号住居跡（第 9 図、図版 38、第 2 表）

古代の住居跡から土器が 2 点出土し、1 点を図示した。1 は後期前葉堀之内 2 式の深鉢の破片で、沈線区画内に単節 LR 縄文を施文している。

135 号住居跡（第 9 図、図版 38、第 2 表）

古代の住居跡から土器が 10 点出土し、4 点を図示した。1～4 は前期中葉黒浜式の深鉢の破片で、胎土に纖維を含んでいる。1 は単節 RL 縄文を施文し、2 は結束 RL 縄文を施文している。3 は単節 LR・RL 羽状縄文を施文し、縄文はタテ方向である。4 は単節 RL・LR 縄文を施文している。

B 遺構外出土遺物

土器（第 9 図、図版 38、第 2 表）

調査区の表土や擾乱から 26 点出土し、5 点を図示した。1 は前期中葉黒浜式の深鉢の破片で、胎土に纖維を含み、単節 RL 縄文を施文している。2 は前期後葉諸磯 b 式の深鉢の破片で、単節 LR 縄文を施文している。

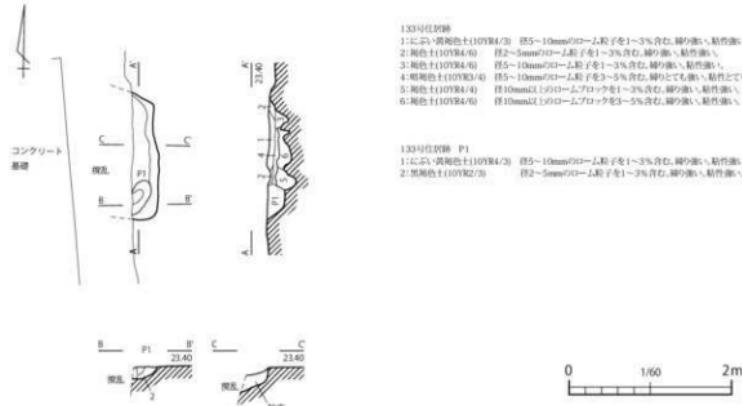
3 は中期後葉加曾利 E3 式の深鉢の口縁部で、2 本の沈線を施文している。4 は中期後葉の深鉢の破片だが、小破片であることや摩耗が著しいことから、型式は不明である。沈線による 3 本の山形文を施文し、その下に無節 L 縄文を施文している。

5 は後期前葉堀之内 1 式の深鉢の破片で、単節 LR 縄文を施文している。

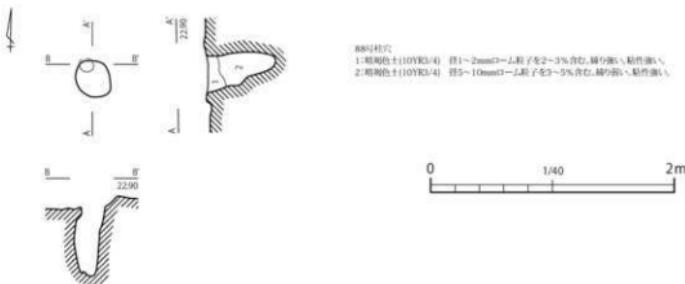
石器（第 9 図、図版 38、第 3 表）

調査区の表土から 7 点出土し、4 点を図示した。1 は黒曜石製の凹基無莖石鏃で、直径約 1.1cm と非常に小さい。抉りは浅く脚部が短く、先端部は鋭角に作出している。2 はチャート製の石錐で、先端部のみ残存している。右側縁部に細かな調整加工を施している。3 は珪質頁岩製の剥片で、形状は縱長である。4 は安山岩製の石皿で、扁平円盤を用いている。片面を使用しており、使用面は緩やかなカーブを描く。側面の一部に敲打痕が認められる。

133号住居跡

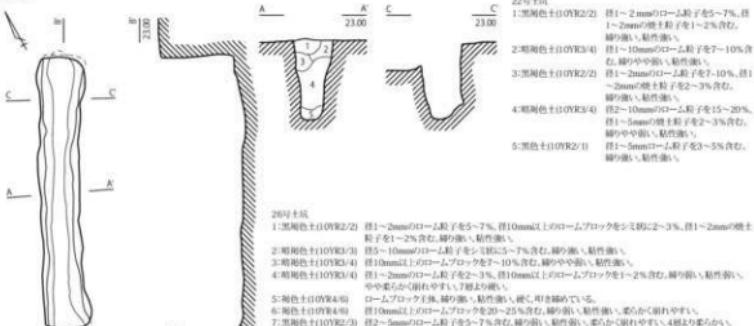


88号柱穴

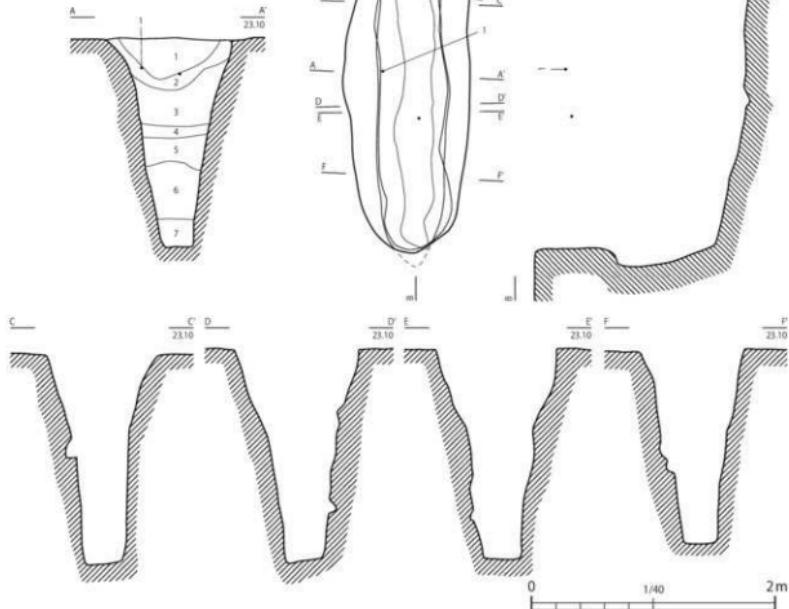


第7図 繩文時代の竪穴住居跡・柱穴 (1/60・1/40)

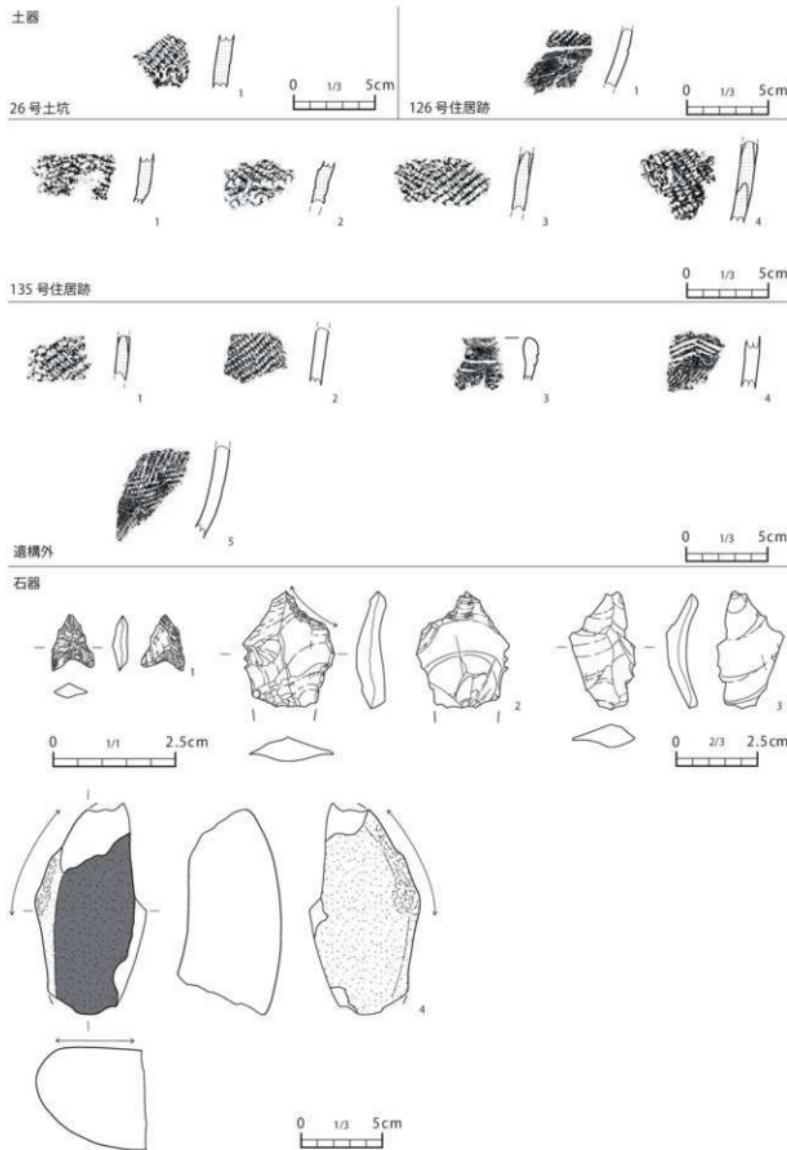
22号土坑



26号土坑



第8図 繩文時代の土坑 (1/40)



第9図 繩文時代の土器・石器 (1/3・2/3・1/1)

第2表 繩文時代土器観察表

補助 図版 番号	国 家 登 録 番 号	遺構名 出土地点	番 号	器種	残存高 (cm)	出土	焼成	色調	文様	備考
9	38	26号土坑	1	深鉢	3.2	良好。繊維含む。	良好	明褐色 (7.5YR5/6)	単節LR 繩文施文。 その下にループ文施文。	圓山式 内面ミガキ痕著。
9	38	126号住居 跡	1	深鉢	3.6	良好。細砂粒含む。	良好	黒 (10YR2/1)	沈線(区画内に単節LR 繩文施文)。	瓶之内2式
9	38	135号住居 跡	1	深鉢	3.1	良好。繊維含む。	良好	明褐色 (5YR5/6)	単節RL 繩文施文。	黒浜式 全体的に摩耗している。
9	38	135号住居 跡	2	深鉢	2.5	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	結束短 繩文施文。	黒浜式
9	38	135号住居 跡	3	深鉢	3.6	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	単節LR・RL 羽状繩文施文。 縞文タテ方角。	黒浜式
9	38	135号住居 跡	4	深鉢	5.0	良好。繊維含む。	良好	赤褐色 (2.5YR4/8)	単節RL・LR 羽状繩文施文。	黒浜式
9	38	XII区 表土	1	深鉢	2.7	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	単節RL 繩文施文。	黒浜式
9	38	XII区 表土	2	深鉢	3.5	良好。細砂粒含む。	良好	暗褐色 (10YR3/3)	単節LR 繩文施文。	諸磣b式
9	38	XII区 表土	3	深鉢	2.6	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐色 (2.5YR5/8)	沈線施文。	加賀利E3式 全体的に摩耗している。
9	38	XII区 表土	4	深鉢	3.2	良好。細砂粒含む。	良好	明黄褐色 (10YR7/6)	沈線による3本の山形文施文。 以下無節L 繩文施文。	全体的に摩耗している。
9	38	XII区 表土	5	深鉢	5.7	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	単節LR 繩文施文。	瓶之内1式

第3表 繩文時代石器観察表

補助 図版 番号	国 家 登 録 番 号	遺構名 出土地点	番号	器種	岩種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率	備考
9	38	XII区 441	1	石鏃	黑曜石	1.2	0.8	0.3	0.2	完形	凹基無茎石鏃。
9	38	XII区 表土	2	石鏃	チャート	3.5	2.6	0.7	7.7	一部分欠損	右側縫部に調整加工痕あり。
9	38	XII区 表土	3	刮片	珪質岩	3.5	1.9	0.6	3.7	完形	縦長刮片。
9	38	XII区 表土	4	石鏃	安山岩	12.6	6.8	5.7	750.7	大部分欠損	扁円形の縫を使用している。 縫曲面に研削痕あり。

2 弥生時代後期から古墳時代初頭

1) 遺構

A 住居跡

127号住居跡（第11・12図、図版8・9、第4表）

調査区北側23・24-E・F区で検出された。南壁と西壁の範囲が検出され、東壁はごく一部を除き攢乱により消失しており、北壁側は調査区外のため調査していない。また北東側は、4号溝跡に切られている。

長軸は柱穴の配置から北壁の位置を復元し、推定6.0m×短軸4.8mの規模を測り、面積約28m²の平面形隅丸長方形の中型住居と考えられる。3基の柱穴と2基の梯子穴が確認されており、炉跡と北西側の柱穴は検出されなかった。2基の梯子穴の内、古い梯子穴はP4で、規模は長軸0.38m×短軸0.35m×深さ0.18mを測り、平面形は隅丸方形である。貼床残存面で確認した新しい梯子穴はP5で、規模は長軸0.50m×短軸0.35m×深さ0.40mを測り、平面形は隅丸長方形である。堆積土は14層に分かれ、貼床は一度貼り替えられ、6層と7・8・9層に分かれる。貼床の厚さはどちらも10.0～15.0cmである。

遺物は住居跡の北東側と南側を中心出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕13点、壺24点、碟1点、古代の土師器甕4点、环1点、須恵器甕1点、环1点である。

128号住居跡（第12図、図版9、第4表）

調査区北側22-F区で検出された。127号住居跡の北東側にあり、南西端のみ検出され、大部分は調査区外のため調査していない。残存部の長軸は0.80mで、平面形は隅丸方形と推測される。炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は4層に分かれ、貼床は4層が相当し、厚さは約10.0cmを測る。遺物は出土していない。

129号住居跡（第13図、図版10、第4表）

調査区北側27-H区で検出された。北西端と西壁、東壁の一部が検出され、それ以外の部分はアパート基礎や攢乱により消失している。

長軸推定3.45m×短軸3.4mの規模を測り、面積約11m²の平面形隅丸方形の小型住居と考えられる。炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は5層に分かれ、貼床は4・5層が相当し、厚さは5.0～12.0cmを測る。

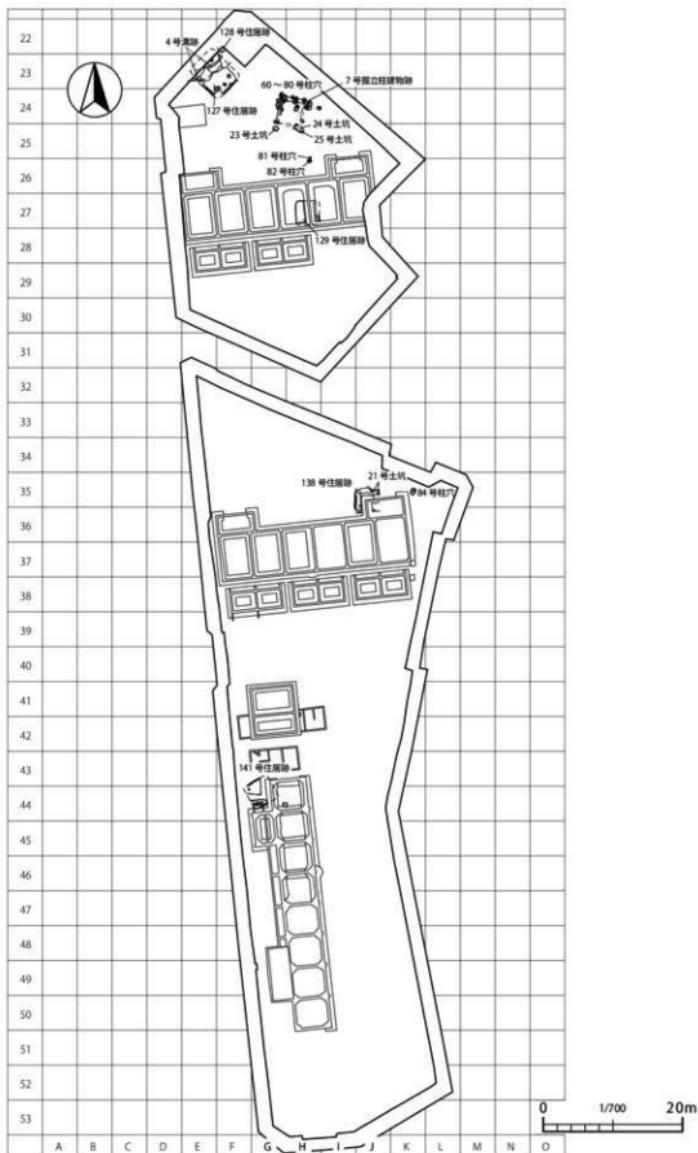
遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕2点、壺1点、焼成粘土塊1点、古代の土師器甕69点、环2点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

堆積土が弥生時代後期に特徴的な濃い暗褐色土であることから、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡とした。古代の遺物が多く出土しているのは、近くにある古代の126号住居跡の遺物が流れ込んできたものと推定される。

138号住居跡（第13図、図版10、第4表）

調査区中央北側35・36-I・J区で検出された。西側と北東側、南東側の貼床の一部が検出され、それ以外の部分はアパート基礎や攢乱により消失している。また、北東端で21号土坑を切っている。

残存部の短軸は2.5mで、長軸は推定復元で約3.8m前後を測り、平面形は梢円形と推測される。



第10図 弥生時代後期から古墳時代初頭 遺構分布図 (1/700)

炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は5層に分かれ、貼床は5層が相当し、厚さは5.0～12.0cmを測る。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕7点、古代の土師器甕52点、環6点、須恵器甕1点、环3点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

堆積土が弥生時代後期に特徴的な濃い黒褐色土であることから、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡とした。

141号住居跡（第14・15図、図版11・12、第4表）

調査区中央南側43・44F・G区で検出された。北側と南側が検出され、それ以外の部分は攪乱により大きく削られている。

残存部の短軸は3.78mで、平面形は隅丸方形と推測される。北西側と南西側に柱穴が2基検出された。対になる柱穴、炉跡、貯蔵穴は検出されていない。堆積土は7層に分かれ、貼床は5・6・7層が相当し、厚さは約10.0cmを測る。主柱穴と見られるP1は掘方面の径0.25m×深さ0.35m、P2は掘方面的径0.3m×深さ0.3m、芯々間距離は約2.5mを測る。

遺物は主に覆土中から良好に出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕14点、壺61点、炭化材3点、古代の土師器環6点、須恵器瓶1点である。

壺2は直口壺で、上半部を欠失している。住居跡中央付近で底部を下向きに据え、細かく割れた状態で出土した。壺3は直口壺で、ほぼ完形である。壺3の北西側で口縁部を南側、胴部下半部に焼成後の穿孔があり、穿孔部を西側にして横向きに倒れ、潰れた状態で出土した。壺4は広口壺で、口縁部～胴部の一部が残存している。住居跡の南側付近で細かく割れ、散らばった状態で出土した。

甕5は台付甕の脚部で、住居跡の北側で胴部との接合部を南側にして横向きに倒れ、細かく割れ、やや散らばった状態で出土した。

炭化材6・7・8は樹種同定の結果、コナラ属クヌギ節とクリであることが判明している。

B 掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡（第16～19図、図版13～17、第5表）

調査区北側の柱穴群の中、24・25-G・H区で検出された。西側の柱穴列は古代の143号住居跡に切られているが、一部壁の立ち上がりと掘方面を検出した。また南東部は攪乱などにより失われていた。柱間の距離と並びの方向から、①東西63号柱穴-68号柱穴-62号柱穴／南北63号柱穴-79号柱穴-76号柱穴の列、②東西60号柱穴-68号柱穴-65号柱穴／南北60号柱穴-80号柱穴-76号柱穴の列、③東西64号柱穴-69号柱穴-61号柱穴／南北64号柱穴-80号柱穴の列に分かれる。

重複しているため、それぞれの列が別の掘立柱建物跡になるのではなく、南北1棟の掘立柱建物の建て替えと思われ、143号住居跡に切られている柱穴列は重複関係を明確にできなかつたことがあるが、他の柱穴の切り合いや配置から考えて、おおむね③→①→②の順に建て替えられた可能性が高いものと考えられる。また周囲の他の柱穴も激しく切り合っているため、①～③以外にも数度の建て替えがあったと推測される。

①は梁行2間×桁行2間（約1.7m×約1.8～2.1m、床面積13.3m²）、②は梁行2間×桁行2間（約1.4m～1.7m×約1.9～2.0m、床面積12.1m²）、③は梁行2間×桁行現状1間（約1.8m×約1.4m）だが2間になる可能性もあり、7号掘立柱建物跡は2間×2間の南北棟と思われる。

柱痕は 60 号柱穴、61 号柱穴、65 号柱穴で確認された。柱跡の径は、60 号柱穴が 0.24m、61 号柱穴が 0.09m、65 号柱穴が 0.26m である。

遺物は、60 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、61 号柱穴から繩文土器 1 点、弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 3 点、古代の土師器壺 1 点、环 1 点、62 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、63 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、64 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、壺 1 点、古代の土師器环 1 点、65 号柱穴から古代の土師器环 1 点、須恵器环 1 点、68 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、古代の土師器壺 1 点、69 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、壺 2 点、76 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、80 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点が出土している。いずれも小破片のため、図示には至らなかった。

C 柱穴（第 16・19・20 図、図版 15～18、第 5 表）

調査区北側 24・25-G・H・I 区から、柱穴群（60～70 号柱穴、73 号柱穴、75～80 号柱穴）が検出された。このうち、60・61・62・63・64・65・68・69・76・79・80 号柱穴は 7 号掘立柱建物跡として復元され、他の柱穴も別棟の掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。

また、これらの柱穴群から約 8m 南側の 25・26-H 区からは、81・82 号柱穴が検出された。古代の 126 号住居跡に切られており、7 号掘立柱建物跡とは別棟の建物跡の可能性が想定される。82 号柱穴が 81 号柱穴を切る。調査区中央北側 35-K 区からは 84 号柱穴が検出され、柱痕が確認された。柱痕の径は、0.24m である。

遺物は 7 号掘立柱建物跡を構成する柱穴以外の柱穴からは、67 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、70 号柱穴から古代の土師器壺 1 点、78 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点が出土している。小破片のため、図示には至らなかった。

D 土坑

21 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区中央北側 35-J 区で検出された。138 号住居跡に切られている。残存部の長軸 1.06m × 短軸 0.7m × 深さ 0.18m を測り、平面形は隅丸長方形と推測される。底面は不整形で、大部分がアパート基礎や攪乱により失われているため、明確な性格は不明である。堆積土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

23 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-G 区で検出された。残存部の長軸 0.73m × 短軸 0.64m × 深さ 0.21m を測り、平面形は不整円形である。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

24 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-H 区で検出された。25 号土坑を切っている。長軸 1.23m × 短軸 0.73m × 深さ 0.14m を測り、平面形は隅丸長方形である。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

25 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-H 区で検出された。24 号土坑に切られている。残存部の長軸 0.27m × 短軸 0.39m × 深さ 0.1m を測り、平面形は円形である。堆積土は 1 層である。遺物は出土していない。

E 溝跡

4号溝跡（第21・50図、図版19）

調査区北側23-E・F区で検出された。127号住居跡を切っている。残存部の長軸4.8m×短軸1.2m×深さ0.34mを測り、断面形はU字形を呈する。

方形周溝墓の南側の溝跡で、中十条アパート地区の2号方形周溝墓と繋がる可能性が高いと考えられる（第50図）。しかし、明確に方形周溝墓と言い切ることは出来ないため、溝跡として報告している。堆積土は5層に分かれる。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕4点、壺7点、古代の須恵器环1点が出土した。

2) 遺物

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物は、遺構内外から、土器1,522点、焼成粘土塊34点、礫1点、炭化材3点が出土した。土器は小破片が多いため図示できるものが少なく、ここでは土器20点を報告する。

A 遺構内出土遺物

127号住居跡（第22図、図版39、第6表）

土器が37点出土し、1点を図示した。1は台付甕の脚部で、下半部のみ残存している。外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整を施している。

137号住居跡（第22図、図版39、第6表）

古代の住居跡からの流れ込みによる土器が8点出土し、1点を図示した。1は壺の口縁部で、外面は網目状撚糸文を施文後、棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は2本残存しており、刻みを施している。内面はナデ調整を施し、赤彩されている。また、口唇部に網目状撚糸文を施文している。

141号住居跡（第22図、図版39、第6表）

土器が75点出土し、5点を図示した。1は装飾壺の肩部で、かなり大型の壺になると思われる。外面は網目状撚糸文を全面に施文後、赤彩する部分を擦り消して沈線で区画し、区画内に赤彩を施している。内面はナデ調整である。

2は直口壺で、胴部～底部が残存し、上半部は欠失している。外面は下から上方向のタテヘラミガキ、内面は指ナデ調整を施している。

3は直口壺で、ほぼ完形である。外面は頸部～胴部がタテヘラミガキ、口縁部と胴部下部がヨコヘラミガキを施している。調整は、胴部下部→頸部→胴部→口縁部の順で3回に分けて行っている。内面は口縁部～頸部が斜・ヨコヘラミガキ、胴部が指ナデ調整を施している。胴部下部に焼成後穿孔が認められ、意図的に孔を開けたと思われる。同様の特徴を持つ土器が、十条久保遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑と井戸址から2点出土している。

4は広口壺で、口縁部～胴部の一部が残存している。外面は頸部がタテヘラミガキ、胴部がヨコヘラミガキを施し、口縁部には3～4mm間隔の刻みがある。頸部～胴部は赤彩されており、著しく摩耗している。内面は口縁部～頸部がヨコヘラミガキ、胴部がナデ調整を施している。また、口縁部～胴部は赤彩されている。

5は台付甕の脚部で、脚部が高い特徴を持ち、大型の台付甕になると思われる。外面・内面ともにナデ調整を施している。

143号住居跡（第22図、図版39、第6表）

古代の住居跡から先行して存在した柱穴を切って築かれているため、流れ込みによる土器が118点出土し、5点を図示した。1～4は壺の破片で肩部にある。1は、外面は沈線による区画内にRL単節縄文を施文している。また、文様以外に赤彩を施している。内面はナデ調整で、全体的に摩耗している。2は、外面は沈線による区画内にRL・LR羽状縄文を施文し、RL縄文とLR縄文の間にS字状結節が1段入る。また、文様以外に赤彩を施している。内面はナデ調整である。3・4は、外面はLR・RL羽状縄文を施文し、内面はナデ調整である。3は全体的に摩耗している。5は広口壺の破片である。外面はタテハケ後にナデ調整を施し、内面・口縁部はナデ調整である。また口縁部は、幅約1mmの沈線を1条施している。

4号溝跡（第22図、図版39、第6表）

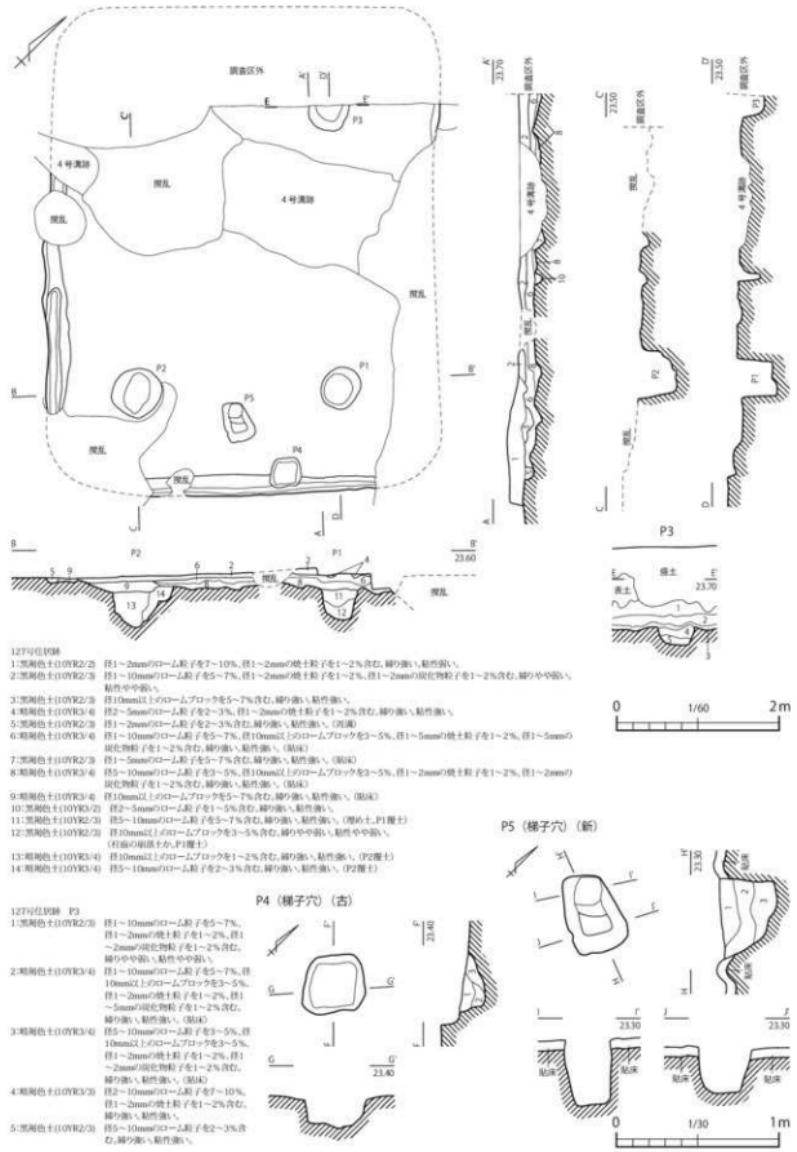
土器が11点出土し、1点を図示した。1は台付甕の脚部で、上部のみ残存している。外面はタテハケとナデ調整、内面はナデ調整を施している。

B 遺構外出土遺物（第22図、図版39、第6表）

調査区の表土や攪乱から土器が1,131点出土し、7点を図示した。1・2は壺の口縁部で、どちらも外面はRL・LR羽状縄文を施文し、内面はナデ調整で赤彩されている。また、口唇部に単節LR縄文を施文し、1は口縁部に粘土帯を貼り付け、刻みも施されている。3は直口壺の口縁部で、外面は単節LR縄文を1段のS字状結節で区画している。内面はナデ調整で赤彩されている。また、口唇部に単節LR縄文を施文している。

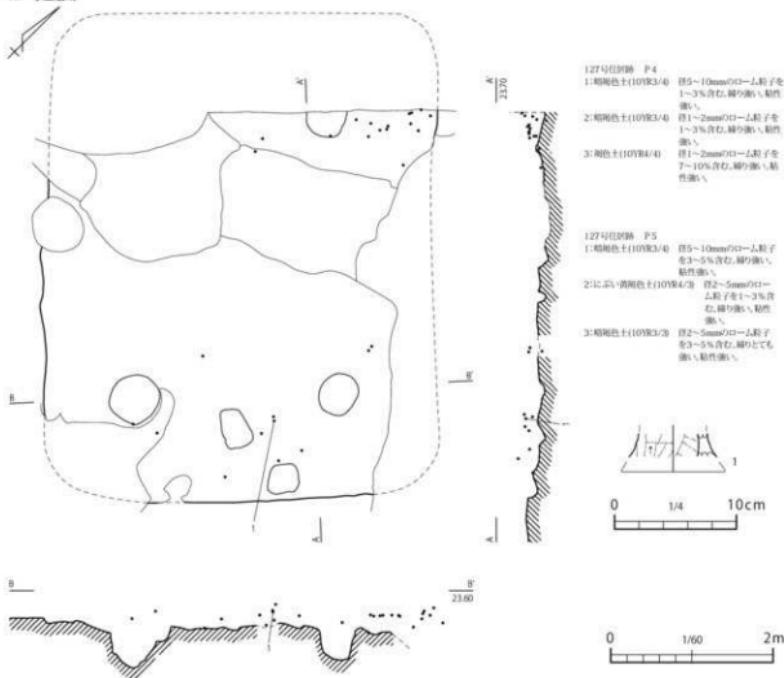
4は壺の口縁部で、外面と口唇部に網目状撚糸文を施文している。内面はナデ調整を施し、外面・内面ともに赤彩されている。5は台付甕の口縁部で、外面はヨコハケとナデ調整、内面はナデ調整である。口唇部は3～5mm間隔のハケ状木工具木口による刻みが施されている。

6は高环で、环部の底部のみ残存している。有稜低脚高环の破片と考えられる。外面はタテヘラミガキ、内面はヨコ・タテヘラミガキが施されている。外面・内面ともに赤彩されており、全体的に摩耗している。7は高环で、环部と脚部の接合部のみ残存している。外面は粘土帯を貼り付け、その下にタテヘラミガキを施している。内面は环部がヨコハケ、脚部が指ナデ調整で、赤彩されている。

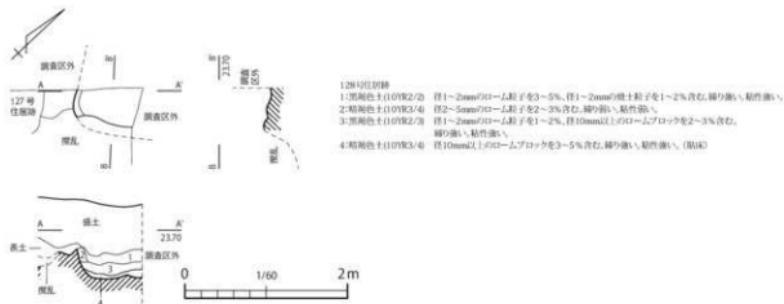


第11図 127号住居跡 (1) (1/30・1/60)

127号住居跡

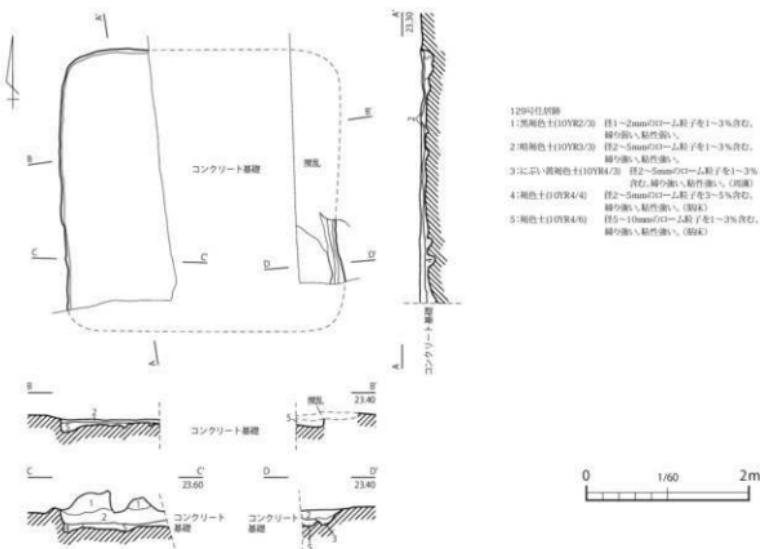


128号住居跡

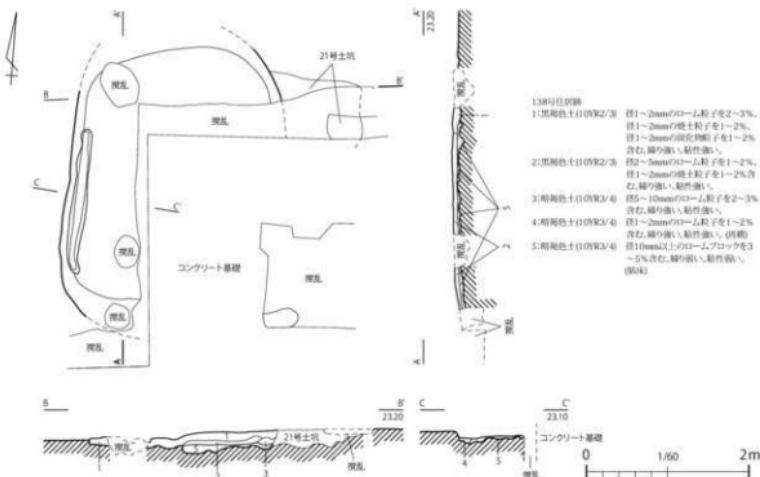


第12図 127号住居跡(2)・128号住居跡(1/4・1/60)

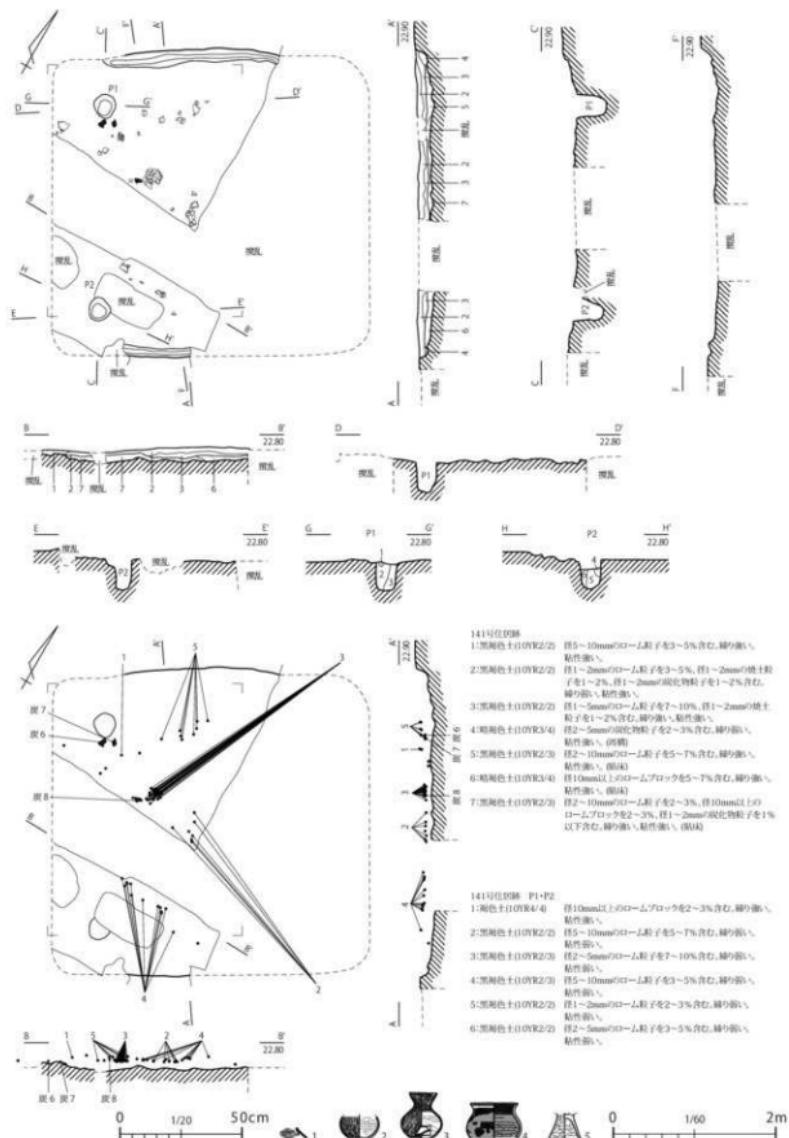
129号住居跡



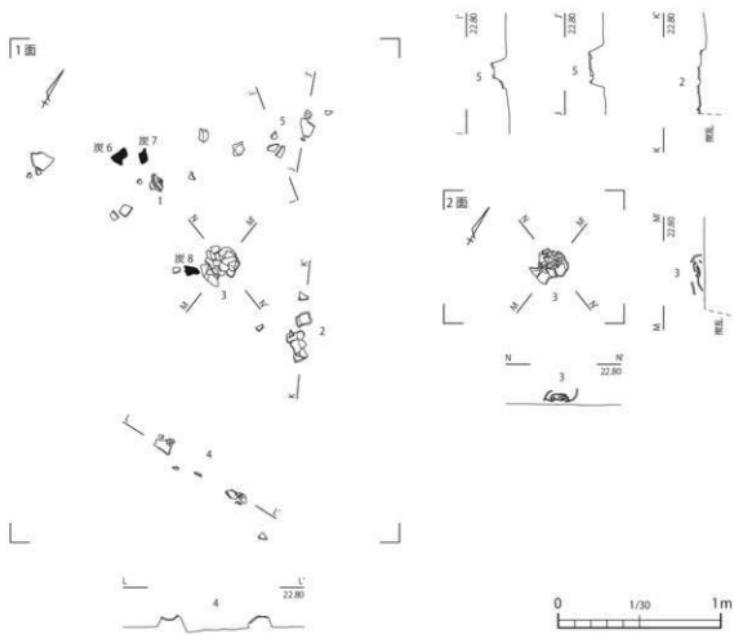
138号住居跡



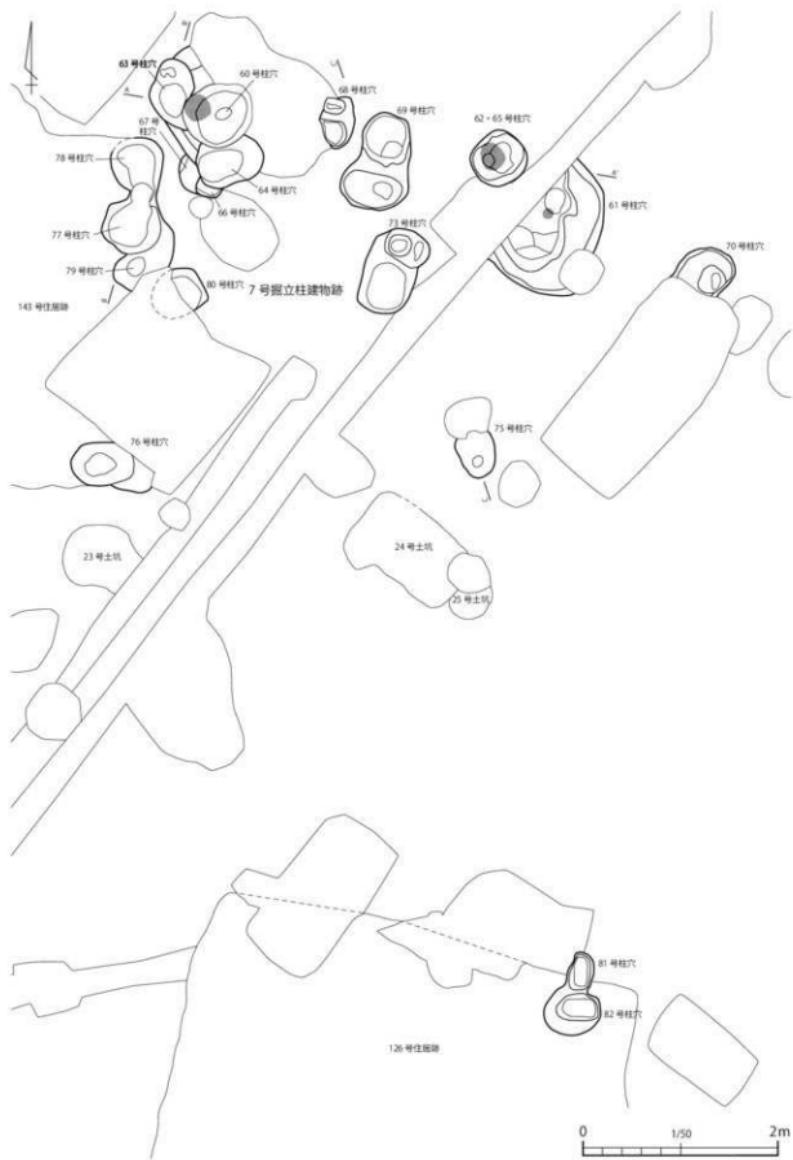
第13図 129号住居跡・138号住居跡(1/60)



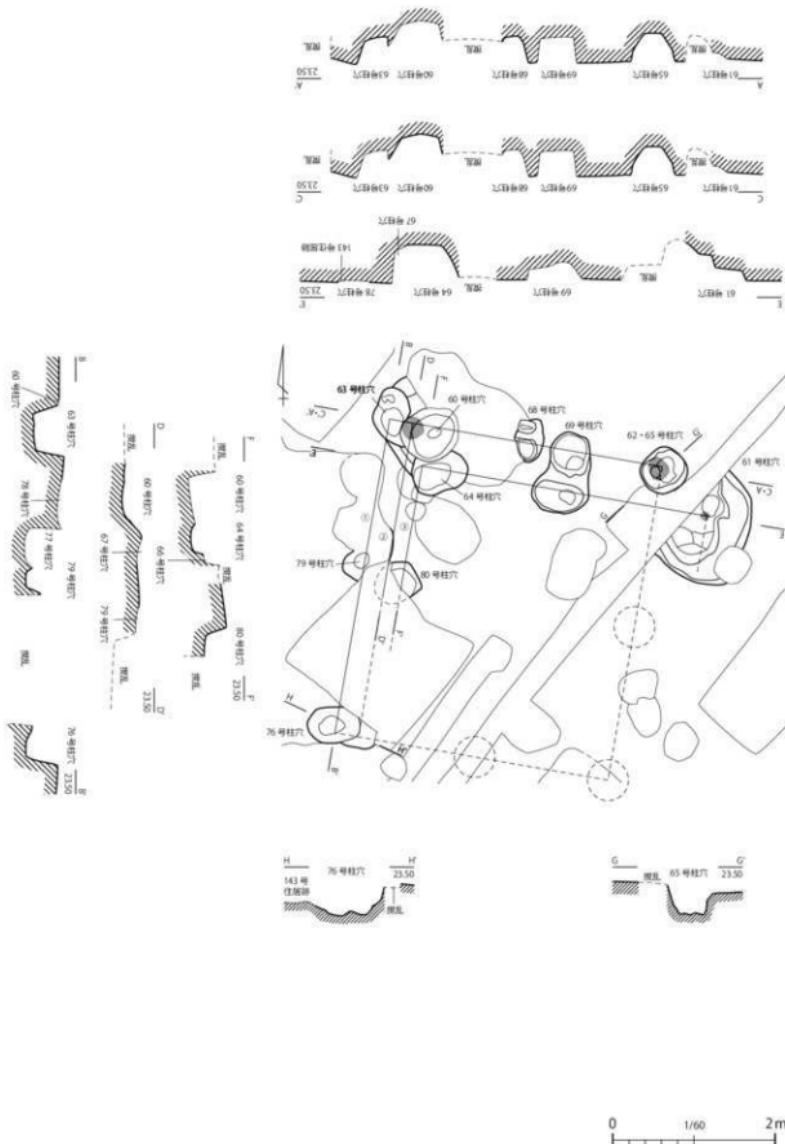
第14図 141号住居跡(1)(1/20・1/60)



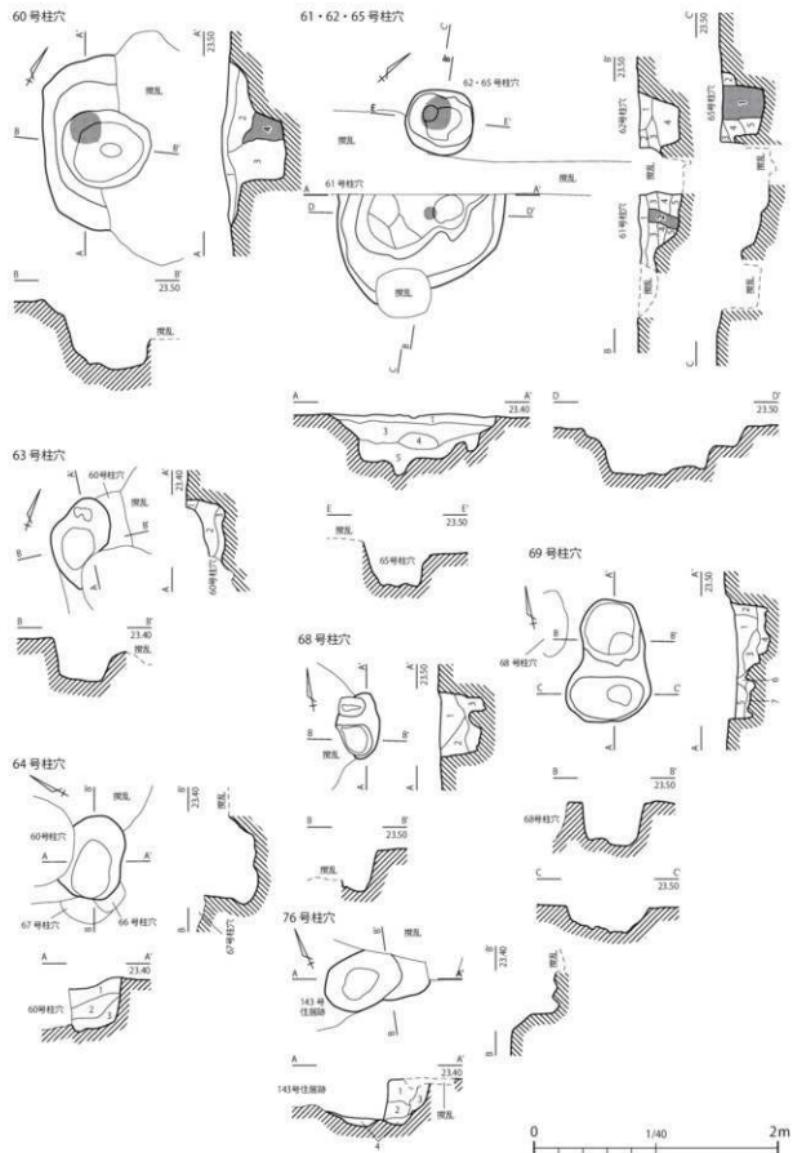
第15図 141号住居跡(2)(1/30)



第16図 弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群 (1/50)

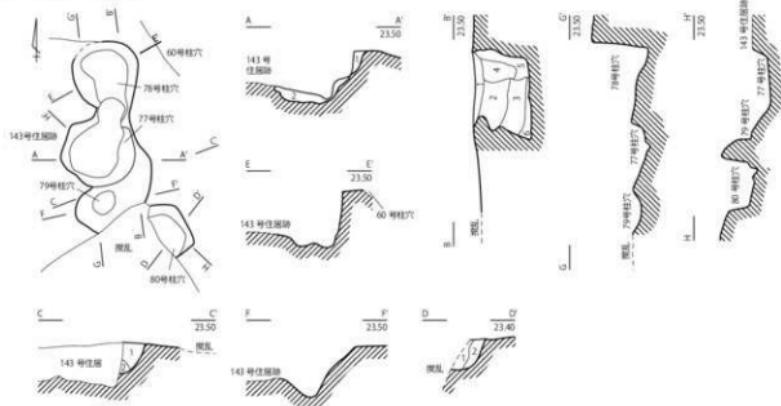


第17図 7号掘立柱建物跡 (1) (1/60)

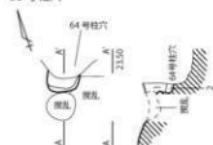


第18図 7号掘立柱建物跡(2) (1/40)

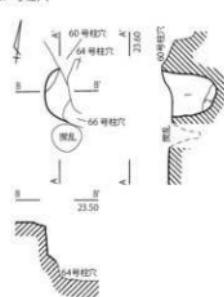
77・78・79・80号柱穴



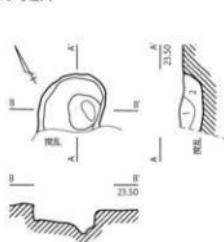
66号柱穴



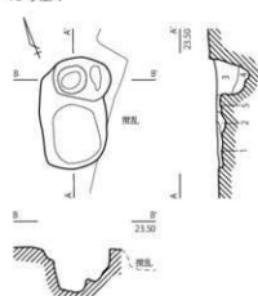
67号柱穴



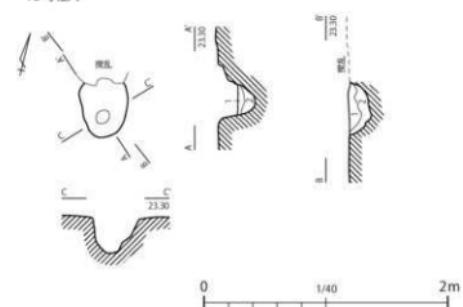
70号柱穴



73号柱穴

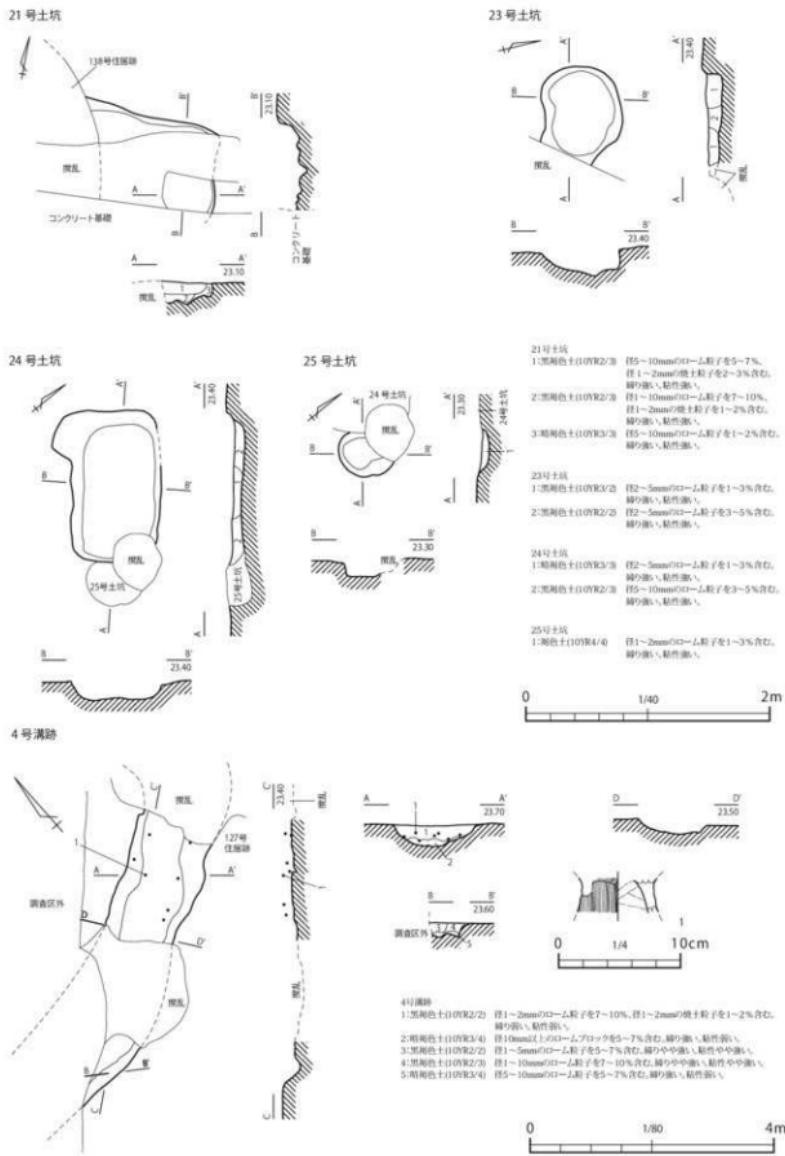


75号柱穴

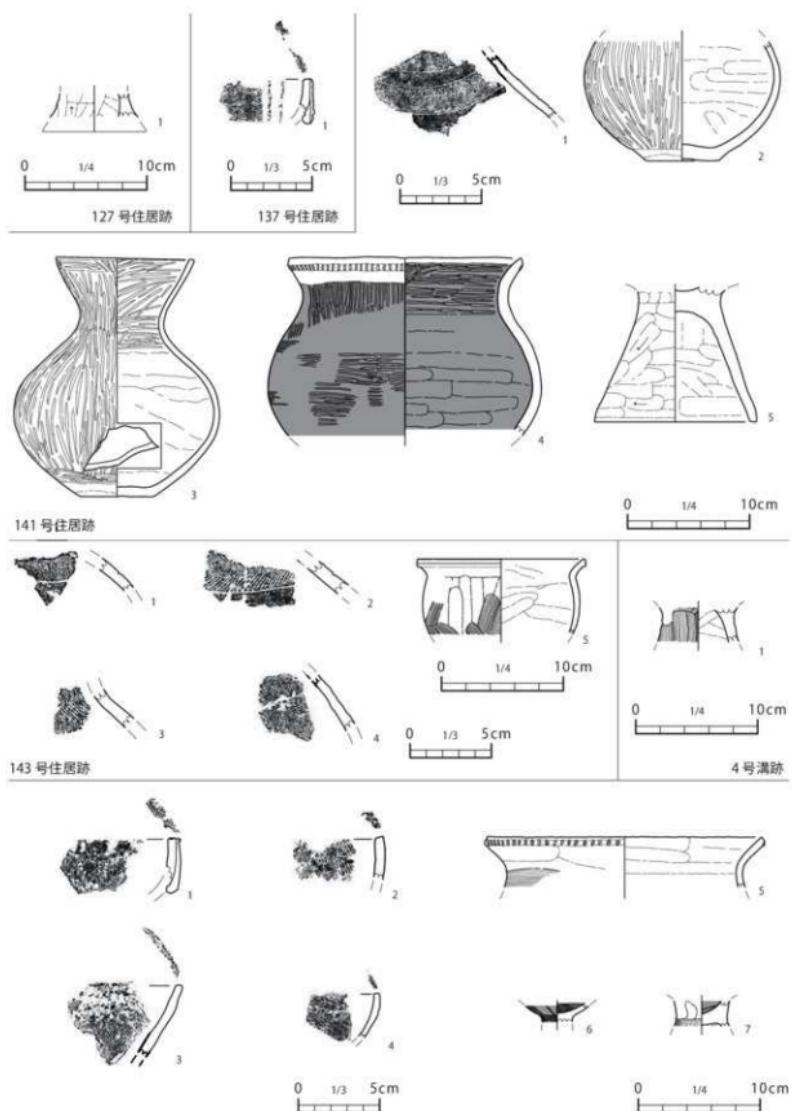


0 1/40 2m

第19図 7号掘立柱建物跡(3)・その他の柱穴(1) (1/40)



第21図 弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑・溝跡 (1/4・1/40・1/80)



第22図 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 (1/3・1/4)

第4表 弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡 計測値一覧表

種別 番号	団版 番号	住居 番号	調査区	グリッド	平面形 ※ ○ 内は推定	長軸 (m) ※ ○ 内は推定	短軸 (m) ※ ○ 内は推定	壁高 (m) ※ ○ 内は推定	主軸方向	付属施設	柱穴	備考
11 + 12	8 +	127	VII	23・24-E・F	(隅丸長方形)	(6.0)	(4.8)	0.11	N 49°W	梯子穴(2基)	3	中型住居 梯子穴の造り替え、 馬蹄形入り構造を行 っており、4号溝跡に切られる。
12	9	128	VII	22-F	(隅丸方形)	—	—	0.35	—	—	—	南北端のみ櫛出
13	10	129	IV(i)	27-H	隅丸方形	(3.45)	3.4	0.25	—	—	—	小型住居
13	10	138	X	35・36-I・J	(楕円形)	—	2.5	0.15	—	—	—	おそらく小型住居
14 + 15	11 +	141	XII②-I	43・44-F・G	(隅丸方形)	—	3.78	0.14	—	—	2	おそらく小型住居

第5表 弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴 計測値一覧表

種別 番号	団版 番号	柱穴 番号	調査区	グリッド	平面形 ※ ○ 内は推定	長軸 (cm) ※ ○ 内は推定	短軸 (cm) ※ ○ 内は推定	深さ (cm)	備考
16~18	13	60	VII	24-G・H	—	144	—	58	7号擬立柱建物跡 63・64・66・67号柱穴を切る。
16~18	13	61	VII	24-H	—	137	—	40	7号擬立柱建物跡
16~18	13・14	62	VII	24-H	(隅丸方形)	(55)	(53)	32	7号擬立柱建物跡 65号柱穴を切る。
16~18	13・14	63	VII	24-G	不整椭円形	75	46	40	7号擬立柱建物跡 60号柱穴に切られる。
16~18	13・14	64	VII	24-G・H	椭円形	69	—	34	7号擬立柱建物跡 60号柱穴に切られる。 66・67号柱穴を切る。
16~18	13・14	65	VII	24-H	楕丸方形	55	53	24	7号擬立柱建物跡 62号柱穴に切られる。
16~19	13・15	66	VII	24-G	—	27	—	24	60・64号柱穴に切られる。 67号柱穴を切る。
16~19	13・15	67	VII	24-G	—	43	—	47	60・64・66号柱穴に切られる。
16~18	13・15	68	VII	24-H	不整椭円形	52	36	33	7号擬立柱建物跡
16~18	13・15	69	VII	24-H	不整椭円形	98	50	37	7号擬立柱建物跡
16~19	13・16	70	VII	24-H	—	—	53	20	
16~19	13・16	73	VII	24-H	隅丸方形	93	55	35	
16~19	13・16	75	VII	24-H	椭円形	—	35	29	
16~18	13・16	76	VII	24-H	(不整椭円形)	—	43	38	7号擬立柱建物跡
16~19	13・17	77	VII	24-G	(不整椭円形)	—	54	44	78・79号柱穴を切る。
16~19	13・17	78	VII	24-G	(円形)	—	54	46	77号柱穴に切られる。
16~17 + 19	13・17	79	VII	24-G	(不整椭円形)	76	—	42	7号擬立柱建物跡 77号柱穴に切られる。
16~17 + 19	13・17	80	VII	24-G	—	—	46	27	7号擬立柱建物跡
16~20	17	81	VII	25・26-H	椭円形	34	26	69	
16~20	17	82	VII	26-H	円形	57	50	47	
20	18	84	X	35-K	椭円形	96	70	26	

第6表 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 観察表(1)

種別 番号	団版 番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a: 口徑 (cm) b: 底径 (cm) c: 高さ (cm) d: 残存高 (cm) ※ ○ 内は推定値	胎土	焼成	色調 ※ ○ 内は赤彩	底形・調整	残存率	備考
22	39	127号住居 跡	I	台付甕	b:(8.0) d:1.9	良好	細 砂粒含む。	暗赤系 SYRS/4	外面: ヘラナデ。 内面: ナデ。	5%	脚部の下部のみ残 存。
22	39	137号住居 跡	I	甕	d:3.7	良好	細 砂粒含む。	に赤い黄褐色 SYRS/3 (暗赤 10RS/3) (暗赤 10R3/6)	外面: 創口状様式文施文後、棒状 浮文貼付(2本残存)。棒状浮文に 引込みあり。 内面: ナデ。 口部: 刨口状様式文施文。	5%	

第6表 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 観察表（2）

番号 番号 番号	開拓番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a:口径(cm) b:底径(cm) c:高さ(cm) d:残存高(cm) ※()内は推定値	胎土	焼成	色調 ※()内は水彩	成形・調整	残存率	備考
22	39	141号住居跡	1	装飾壺	d: 6.9	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	明赤褐色 5YR5/8 (暗赤 7.5R3/6)	外面：頭部状態有文を全面に施文。 赤彩部分を擦り消して沈線で区画し赤彩。 内面：ナデ。	5%	頭部のみ残存。 大型の頭口型。
22	39	141号住居跡	2	直口壺	b: 6.0 d: 9.8	良好。細砂礫含む。	良好	赤褐色 5YR4/6	外面：タテヘラミガキ。 内面：ナデ。	35%	頭部～底部のみ残存。
22	39	141号住居跡	3	直口壺	a: 11.3 b: 6.0 c: 19.6	良好。細砂礫含む。	良好	暗褐色 7.5YR3/3	外面：タテ・ヨコヘラミガキ。 内面：口縁部～腹部ヨコヘラミガキ。 口縁部斜め方向のヨコヘラミガキ。	95%	頭部下部穿孔あり。
22	39	141号住居跡	4	広口壺	a: 19.0 d: 14.5	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	明赤褐色 5YR5/8 (暗赤 10R3/6)	外面：タテ・ヨコヘラミガキ。 内面：ヨコヘラミガキ・ナデ。 口縁部・腹部赤彩。 口縁部削み(3～4mm間隔)あり。	25%	著しく摩耗している。
22	39	141号住居跡	5	台付壺	b: 13.2 d: 10.8	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	黒褐色 10YR3/2	外面：ナデ。 内面：ナデ。	25%	頭部のみ残存。
22	39	143号住居跡	1	壺	d: 2.5	良好。細砂礫含む。	良好	に赤い黄褐色 10YR6/4 (極端赤褐色 10YR3/4)	外面：沈線による区画内を、RL, 水路開き。 内面：ナデ。	5%	頭部のみ残存。 全体的に摩耗している。
22	39	143号住居跡	2	壺	d: 1.4	良好。細砂礫含む。	良好	に赤い黄褐色 10YR6/4 (暗赤 10YR3/4)	外面：沈線による区画内を RL, LR 以降横文施文。 RL と LR の間に S字状結節が1段入る。 内面：ナデ。	5%	頭部のみ残存。
22	39	143号住居跡	3	壺	d: 2.6	良好。細砂礫含む。	良好	に赤い黄褐色 10YR7/4	外面：LR・RL 羽状横文施文。 内面：ナデ。	5%	頭部～頭部の一部のみ残存。 全体的に摩耗している。
22	39	143号住居跡	4	壺	d: 4.6	良好。細砂礫含む。	良好	に赤い黄褐色 10YR5/3	外面：LR・RL 羽状横文施文。 内面：ナデ。	5%	頭部のみ残存。
22	39	143号住居跡	5	広口壺	a: 13.6 d: 6.2	良好。細砂礫含む。	良好	暗赤褐色 5YR3/3	外面：タテハケ後ナデ。 内面：ナデ。 口縁部：ナデ。沈線。	10%	
22	39	4号溝跡	1	台付壺	d: 2.8	良好。細砂礫含む。	良好	に赤い黄褐色 10YR4/3	外面：タカハゲ。ナデ。 内面：ナデ。	5%	頭部の上部のみ残存。
22	39	埋区 表土	1	壺	d: 3.3	良好。細砂礫含む。	良好	黒褐色 10YR3/2 (明赤褐色 2.5YR5/8)	外面：RL・LR 羽状横文施文。 内面：ナデ。赤彩。 口縁部：LR 羽状横文施文。剥みあり。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	埋区 表土	2	壺	d: 2.6	良好。細砂礫含む。	良好	褐褐色 7.5YR4/6 (暗赤褐色 10YR3/4)	外面：RL・LR 羽状横文施文。 内面：ナデ。赤彩。 口縁部：LR 羽状横文施文。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	埋区 表土	3	直口壺	d: 4.4	良好。細砂礫含む。	良好	明褐色 10YR5/6 (赤 10R4/6)	外面：単線 RL 施文を S字状結節で区画。 内面：ナデ。赤彩。 口縁部：明褐色 LR 純文施文。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	埋区 表土	4	壺	d: 2.3	良好。細砂礫含む。	良好	(暗褐色 7.5YR3/4)	内面：ナデ。赤彩。 口縁部：口縁部；頭部状横文施文。赤彩。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	埋区 表土	5	台付壺	a: 22.4 d: 4.1	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	明赤褐色 5YR5/6	外面：コロナケ。 口縁部：ハケ状工具口部による削みあり。 内面：ナデ。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	埋区 表土	6	高坏	d: 1.3	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	(暗赤褐色 10YR3/6)	外面：タテヘラミガキ。赤彩。 内面：タテ・ヨコヘラミガキ。赤彩。	5%	有棱低高坏。 全体的に摩耗している。
22	39	X区 36-G	7	高坏	d: 2.0	良好。細砂礫を複数個に含む。	良好	暗赤褐色 2.5YR5/6 (暗赤褐色 7.5YR3/3)	外面：粘土模様付き。タテヘラミガキ。 内面：部品 ヨコハケ。 脚部：ナデ。赤彩。	10%	接合部のみ残存。

3 古代

1) 遺構

A 住居跡

126号住居跡（第24～26図、図版20・21、第7表）

調査区北側25・26-G・H区で検出された。南側がアパート基礎に削られ、北東側では81・82号柱穴を切っている。

長軸は4.55mで、短軸は柱穴の配置等から復元し推定3.96mの規模を測り、床面積約28m²の平面形長方形の中型住居と考えられる。柱穴は3基検出され、南東側の柱穴や貯蔵穴は検出されていない。主柱穴P1～P3は掘方上面の径0.3～0.5m、深さ0.5mを測る。P4は梯子穴と考えられ、北壁側に楕円形に一段深く掘り込みを持つ。地表からの深さは0.7mを測る。堆積土は9層に分かれ、貼床は8・9層が相当し、厚さは5.0～10.0cmを測る。

カマドは東壁中央に位置し、全長約1.4m×左右幅約1.2mを測る。袖と天井が大きく潰れ、粘土を含む構築土が広範囲に広がった状態で検出された。煙道がやや角度を急にして立ち上がり、火床面はカマドの中央で長軸約0.5m×短軸約0.4m×厚さ約0.03mの範囲で、不整楕円形に広がっていた。

遺物はカマドを中心に、住居跡の全面で良好に出土した。縄文時代の深鉢2点、弥生時代後期から古墳時代初頭の壺11点、壺32点、焼成粘土塊28点、古代の土師器壺625点、环20点、須恵系土器环30点、須恵器壺8点、瓶13点、环50点、石器1点、礫7点、鉄器1点、鉄滓1点である。

土師器壺11・12・13・17・18はカマドとカマドから西側にかけて広がり、覆土中から細かく割れて重なった状態で出土した。住居廃絶後に投げ入れて遺棄されたものと思われる。壺の時期は9世紀初頭～中葉にわたる。壺20は台付壺の脚部で、重なり合った壺の破片の側から、脚部を斜め上に向けて割れた状態で出土した。

土師器壺から、9世紀前半～中葉の住居跡と思われる。

131号住居跡（第26図、図版22、第7表）

調査区北側30・31-I区で検出された。北西端のみ検出され、その他の範囲は調査区外のため調査していない。また、83号柱穴に切られている。正確な平面形や規模は不明である。柱穴等は検出されていない。堆積土は9層に分かれ、貼床は8・9層で、厚さは5.0～15.0cmを測る。

カマドも検出されていないが、住居跡の北側の調査区外壁に焼土粒子の分布が認められたことから、カマドは北壁にあると推測される。また、住居跡の床面西壁側に、長軸約0.4m×短軸約0.2m×厚さ約0.1mの半円形の焼土の分布が確認された。

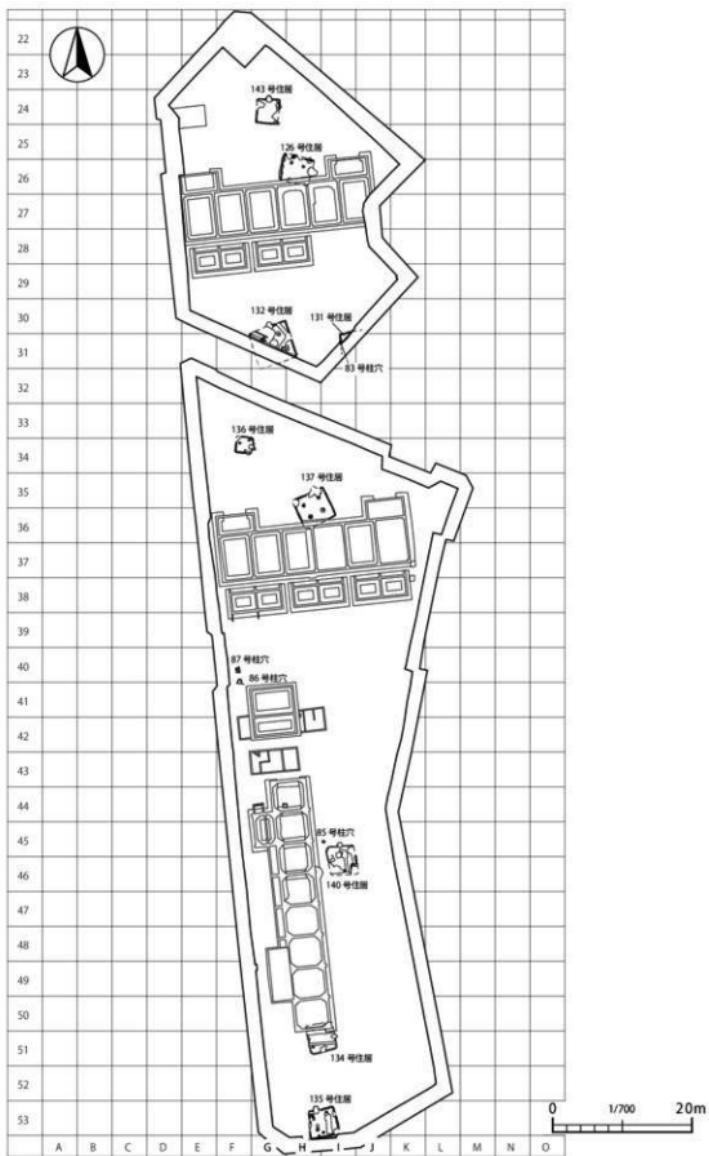
遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の壺2点、古代の土師器壺12点、环6点、須恵器环1点、土製支脚1点、焼成粘土塊4点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

出土した土師器环が8世紀前半のものであることから、8世紀前半の住居跡と思われる。

132号住居跡（第27・28図、図版23・24、第7表）

調査区北側30・31-F・G・H区で検出された。北東側が検出され、南西側は調査区外であり、検出された北東側も攪乱により削られている部分が多く、住居跡の残存部は多くない。

東西5.7m×南北推定5.5mの規模を測り、床面積約31m²の平面形方形の中型住居と考えられる。



第23図 古代 遺構分布図 (1/700)

柱穴が3基検出され、南西側の柱穴や貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は11層に分かれ、貼床は8～11層が相当し、厚さは10.0～20.0cmを測る。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、掘方の規模は全長約1.0m×左右幅約0.9mを測る。1～4層の後世の掘り込みや攪乱により遺存状態は悪く、袖は東側に極わずかに残存していた。白色粘土ブロックで構築され、被熱しており、最大幅約0.18m×高さ0.19mを測る。火床面は確認することが出来なかった。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕8点、壺5点、古代の土師器甕82点、环82点、須恵器甕1点、环3点、焼成粘土塊2点、鉄器1点が出土している。土師器环1はほぼ完形で、住居跡の北東端の覆土中から割れた状態で出土し、破片の半分は見込みを上向きにしていた。

7世紀後半の土師器环が多く出土していることから、7世紀後半の住居跡と思われる。

134号住居跡（第29・30図、図版25・26、第7表）

調査区南側50・51-H・I区で検出された。南側が検出され、北側はアパート基礎と攪乱により削られ、北壁のごく一部のみ残存している。

南北推定4.2m×東西3.93mの規模を測り、床面積約16m²の平面形隅丸方形の中型住居と考えられる。柱穴・貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は5層に分かれ、貼床は5層に相当し、厚さは5.0～10.0cmを測る。

カマドは東壁中央部に位置し、掘方の規模は全長約0.8m×左右幅約0.5mを測る。カマドの上に攪乱が被っていたため残存状態は良くなく、袖は検出されなかった。火床面はカマドの中央で、長軸0.4m×短軸約0.35m×厚さ約0.01mの範囲で、不整円形に広がっていた。

遺物は縄文時代の石器1点、古代の土師器甕63点、环8点、須恵器环19点、鉄器1点が出土した。

出土した土師器环のうち1点は暗文が施されている破片で、7世紀後半のものとみられ、流れ込みによるものと考えられる。同じような暗文が施された土師器环の破片は、135号住居跡から1点、調査区の表土から2点出土している。

9世紀初頭の須恵器环の破片が多く出土していることから、9世紀初頭の住居跡と思われる。

135号住居跡（第31・32図、図版27・28、第7表）

調査区南端53・54-H・I区で検出された。東・西・南壁の一部が、攪乱により削られている。

東西4.25m×南北4.1mの規模を測り、床面積約17m²の平面形隅丸方形の中型住居であるが、南壁が北壁より長い特徴をもつ。柱穴4基（P1・P2・P4・P6）と梯子穴が検出され、南東側の柱穴と貯蔵穴は検出されていない。堆積土は11層に分かれ、貼床は9～11層が相当し、厚さは5.0～15.0cmを測る。

P3は住居跡の南側中央に位置し、長軸0.41m×短軸0.34m×深さ0.18mを測る。平面形は不整円形である。また、P3の南西にP7がある。深さが約0.65mあり、梯子穴や貯蔵穴にするには深すぎるため通常の柱穴として扱っているが、性格は不明である。

カマドは北壁西寄りに位置し、掘方は全長約1.1m×左右幅約0.9mを測る。袖はローム土と粘土により構築され、左右に部分的に残存し、右袖は外側に大きく広がっている。右袖は最大幅約0.15m×高さ0.22m、左袖は最大幅約0.2m×高さ0.16mを測る。煙道が残存し、火床面は確認されなかった。

遺物は縄文時代の深鉢 10 点、弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 1 点、壺 2 点、古代の土師器甕 202 点、壺 11 点、焼成粘土塊 4 点、須恵器瓶 1 点、壺 19 点、碟 1 点、鐵器 1 点、中世以降の土師質土器 1 点が出土している。

縄文時代の土器が他の遺構よりもやや多く出土しており、型式は前期前葉黒浜式である。同様の土器が住居跡の北東にある縄文時代の 26 号土坑からも出土している。このことから、135 号住居跡やその周辺には縄文時代の何らかの遺構があった可能性が考えられる。

また、出土した土師器壺のうち破片の 1 点は暗文が施されている破片で、7 世紀後半のものと考えられる。

土師器壺 1 などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

136 号住居跡（第 33・34 図、図版 29・30、第 7 表）

調査区中央北側 33・34-F・G 区で検出された。北西端やカマドの一部が攪乱により削られている。

一辺 2.4m の規模を測り、面積約 5m² の平面形隅丸方形の極小型住居と考えられる。主柱穴・貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は 9 層に分かれ、貼床は 7 ~ 9 層が相当し、厚さは 5.0 ~ 20.0cm を測る。

P1 は住居跡の西側中央寄りで検出された。貼床面での径 0.3m × 深さ約 0.6m を測り、梯子穴や貯蔵穴にするには深すぎるため通常の柱穴として扱っている。堆積土層を見ると、3 層が堆積した後に 1・2 層が混入しており、上層部を何かに利用していたことが分かるが、性格は不明である。

カマドは東壁中央部に位置し、掘方は全長約 0.7m × 左右幅約 0.9m を測る。袖は粘土により構築され、左右にわずかに残存していた。右袖は最大幅約 0.4m × 高さ 0.08m、左袖は最大幅約 0.3m × 高さ 0.09m を測る。両袖の間に、長軸約 0.4m × 短軸約 0.2m × 厚さ約 0.04m の不整長方形に広がる火床面が確認された。

遺物はカマドを中心に出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 49 点、壺 3 点、古代の土師器甕 129 点、壺 8 点、須恵器壺 1 点、焼成粘土塊 3 点である。

甕 1 はカマドの火床面よりや上層から、口縁部を西側の焚口に向けて押し潰された状態で出土した。9 世紀初頭の甕で、住居廃絶後に遺棄されたものと思われる。

甕 1 をはじめ、9 世紀初頭の土師器甕の破片が多く出土していることから、9 世紀初頭の住居跡と思われる。また、規模がかなり小さい住居跡であることから、居住用ではなく、掘立柱建物跡等に付属した煮炊き用施設の可能性も考慮すべきである。

137 号住居跡（第 35・36 図、図版 31・32、第 7 表）

調査区中央北側 35・36-H・I 区で検出された。北西・南西端とカマドがアパート基礎や攪乱により削られている。

東西 4.9m × 南北 4.55m の規模を測り、面積約 22m² の平面形方形の中型住居と考えられる。カマドは消滅しており、貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。カマドは北壁の東寄りに位置していたものと推定される。堆積土は 13 層に分かれ、貼床は 13 層が相当し、厚さは 2.0 ~ 5.0cm と薄い。

主柱穴は 4 基検出され、それぞれ柱痕も残存していた。貼床面の径は 0.4 ~ 0.5m、深さ 0.5 ~ 0.8m を測る。柱痕による芯々間距離は、P1 ~ P4 : 2.5m、P3 ~ P4 : 2.3m、P1 ~ P3 : 2.0m、P2 ~ P4 : 2.0m を測る。また、住居跡の東側床面に長軸約 3.8m × 短軸約 0.7m の範囲に広がる焼土が

確認された。これは、住居廃絶時に土で埋める際、たまたま東側部分を焼土で埋めたものと思われる。

遺物は住居跡の南東側を中心に出土した。弥生時代から古墳時代初頭の甕 2 点、壺 6 点、古代の土師器甕 45 点、鉢 1 点、环 17 点、須恵系土器环 1 点、須恵器甕 1 点、环 3 点である。

7 世紀後半の环や鉢などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

140 号住居跡（第 37・38 図、図版 33・34、第 7 表）

調査区中央 45・46-I・J 区で検出された。住居跡の広範囲に攪乱が及んでおり、遺存状態は良くない。

長軸推定 4.2m × 短軸 4.15m を測り、面積 17m² の平面形隅丸方形の中型住居と考えられる。柱穴は検出されていない。堆積土は 6 層に分かれ、貼床は 5 層が相当し、厚さは 2.0 ~ 5.0cm と薄い。

梯子穴 P1 は住居跡の南側中央に位置し、長軸 0.32m × 短軸 0.26m × 深さ 0.27m を測る。平面形は不整円形である。貯藏穴 P2 は住居跡の南東部に位置し、南側は攪乱により失われており、長軸 0.69m × 残存部の短軸 0.3m × 深さ 0.42m を測る。平面形は隅丸長方形と推測される。

カマドは北壁中央に位置し、全長約 0.7m × 左右幅約 0.7m を測る。袖はローム土と粘土により構築され、左右にわずかに残存していた。右・左袖ともに、最大幅約 0.05m × 高さ 0.05m を測る。煙道が角度をやや急にして残存し、火床面はカマドの中央で長軸約 0.3m × 短軸約 0.15m × 厚さ約 0.05m の範囲で、不整長方形に広がっていた。

遺物は住居跡の北側を中心に出土した。弥生時代初頭から古墳時代初頭の甕 4 点、古代の土師器甕 17 点、环 14 点、須恵系土器环 2 点、須恵器环 2 点である。

床面から出土した土師器环 1 などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

143 号住居跡（第 39・40 図、図版 35・36、第 7 表）

調査区北側 24-G 区で検出された。東・西壁の一部が攪乱により削られ、また、7 号掘立柱建物跡の 76 ~ 79 号柱穴を切っている。

長軸 3.6m × 短軸 3.15m の規模を測り、面積約 11m² の平面形方形の小型住居と考えられる。柱穴は検出されていない。堆積土は 12 層に分かれ、貼床は 11 層が相当し、厚さは 2.0 ~ 5.0cm と薄い。

カマドは北壁中央に位置し、全長約 1.0m × 左右幅約 1.1m を測る。袖はローム土と粘土により構築され、袖構築土内部にはわずかに砂利が含まれている。右袖は最大幅約 0.4m × 高さ 0.22m、左袖は最大幅約 0.3m × 高さ 0.19m を測る。煙道が残存し、北壁から北側に約 0.5m 程張り出し、煙道近くに長軸約 0.4m × 短軸約 0.3m × 厚さ約 0.03m の楕円形に広がる火床面が確認された。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 25 点、壺 90 点、高环 3 点、古代の土師器甕 72 点、环 7 点、須恵器环 6 点、石器 1 点、炭化種子 1 点が出土した。

石器 2 は支脚で、カマドの火床面上から横向きに倒れた状態で出土した。

9 世紀後半代の土師器甕の破片が多く出土していることから、9 世紀後半の住居跡と思われる。また古代の遺物のほかに、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が多量に出土しているが、これは住居跡の近くに弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群があり、その遺物が紛れ込んだためだと考えられる。

B 柱穴

柱穴はまとまるごとに分布しており、堆積土から古代に含まれる柱穴と判断された。遺物は出土せず、性格は不明である。

83号柱穴（第41図、図版37）

調査区北側31-I区で検出された。131号住居跡を切っている。長軸0.4m×短軸推定0.39m×深さ0.35mを測り、平面形は円形になると思われる。堆積土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

85号柱穴（第41図、図版37）

調査区中央45-I区で検出された。長軸0.43m×短軸0.33m×深さ0.29mを測り、平面形は橢円形である。堆積土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

86号柱穴（第41図、図版37）

調査区中央40・41-F区で検出された。長軸0.64m×残存部の短軸0.63m×深さ0.19mを測り、平面形は橢円形になると思われる。堆積土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

87号柱穴（第41図、図版37）

調査区中央40-F区で検出された。残存部の長軸0.67m×短軸0.59m×深さ0.35mを測り、平面形は不整形になると思われる。堆積土は6層に分かれる。遺物は古代の土師器甕が1点出土した。

2) 遺物

古代の遺物は、遺構内外から、土師器2,202点、須恵系土器65点、須恵器482点、土製支脚1点、焼成粘土塊13点、石器2点、礫8点、鉄器5点、炭化種子1点が出土した。遺物は小破片が多いため図示できるものが少なく、ここでは土師器28点、須恵系土器3点、須恵器21点、石器2点、鉄器4点を報告する。

A 遺構内出土遺物

126号住居跡（第42図、図版40、第8表）

土師器645点、須恵系土器30点、須恵器71点、石器1点、鉄器2点が出土し、ここでは土師器14点、須恵系土器3点、須恵器4点を図示した。

1は7世紀後半の土師器環で、外面はヨコ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。2～4は9世紀初頭の須恵系土器環で、4は底部回転糸切り後未調整である。

5は須恵器瓶で、胴部下半のみ残存していた。外面にススのような付着物が見られる。6は9世紀前半～中葉の須恵器瓶で、底部のみ残存していた。底部回転糸切り後、外周ヘラケズリを施し、高台を取り付け、ナデ調整をしている。高台の接合面は外側である。7・8は9世紀前半の須恵器環で、8は底部回転糸切り後未調整である。

9～21は土師器甕で、9～14は口縁部が「く」の字形から「コ」の字形へ変わる移行期の9世紀初頭、15～18は口縁部「コ」の字形が成立した9世紀中葉のものである。それぞれ、外面はケズリ、内面・口縁部はナデ調整が施されている。16は口縁部に粘土帶の輪積み痕が一部残る。19は平底の底部、20は小型の台付甕、21は大型の台付甕の脚部で、脚部裾にはナデ調整が施されている。それぞれ、9世紀初頭のものと思われる。

132号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器164点、須恵器4点、鉄器1点が出土し、ここでは土師器5点、須恵器1点を図示した。

1～4は7世紀後半の土師器環で、外面はヨコ・ナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。1は外面上部と内面全面に、赤彩が施されている。

5は9世紀前半の須恵器環で、底部回転糸切り後未調整である。6は7世紀後半の土師器甕で長胴甕と思われる。口縁部のみ残存し、粘土帯の輪積み痕が見られる。

134号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器71点、須恵器19点、鉄器1点が出土し、ここでは土師器2点、須恵器3点を図示した。

1は8世紀中葉の落合型と思われる土師器環で、内面の口縁部に赤彩が残り、全体的に摩耗している。2～4は須恵器環で、2・3は9世紀前半、4は8世紀後半～9世紀前半と思われる。3は底部回転糸切り後未調整で、4は底部回転糸切り後外周ヘラケズリを施している。

5は9世紀前半と思われる台付甕の脚部で、外面・内面ともに調整痕は認められない。

135号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器213点、須恵器20点、鉄器1点が出土し、ここでは土師器1点、須恵器2点を図示した。

1は7世紀後半の土師器環で、外面はヨコ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。また、外面上部と内面全面に赤彩が施されている。2は9世紀前半と思われる須恵器環で、内外面に火燐痕が残る。

3は7世紀後半の長頸瓶で、頸部のみ残存し、胸部との接着面の直径は5.9cmを測る。

136号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器137点、須恵器1点が出土し、土師器1点を図示した。

1は9世紀初頭の土師器甕で、口縁部が「く」の字形から「コ」の字形に変わる様相を呈している。外面はケズリ・内面・口縁部はナデ調整を施している。

137号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器63点、須恵系土器1点、須恵器4点が出土し、土師器3点を図示した。

1・2は7世紀後半の土師器環で、1は外面にナナメ方向のケズリとナデ調整、内面にナデ調整を施し、内・外面ともに口縁部に幅1.5mm程度の沈線が施文されている。また口唇部に幅1mm程度の刻みがわずかに見られる。2は内・外面ともに調整痕不明で、底部に丸みをもつ。

3は7世紀後半の土師器鉢で、外面はヨコ・ナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施している。底部に直径6.2cmの孔が空いており、甕に転用した可能性が考えられる。

138号住居跡（第43図、図版41、第8表）

弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡だが、土師器58点、須恵器4点が出土し、須恵器1点を図示した。

1は9世紀前半と思われる須恵器環で、破片のため底部の調整痕は不明である。

140号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器31点、須恵系土器2点、須恵器2点が出土し、土師器1点、須恵系土器1点を図示した。

1は7世紀後半の土師器環で、外面はナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施している。2は9世紀後半と思われる須恵系土器環で、底部回転糸切り後未調整である。

141号住居跡（第43図、図版41、第8表）

弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡だが、土師器6点、須恵器1点が出土しており、須恵器1点を図示した。

1は9世紀以降の須恵器瓶で、底部回転糸切り後未調整である。

143号住居跡（第43図、図版41、第8表）

土師器79点、須恵器6点、石器1点が出土し、ここでは土師器1点を図示した。

1は土師器甕の底部で、小破片のため年代は不明である。外面はヨコ・ナナメ方向のケズリ、内面はナデ調整を施している。

B 遺構外出土遺物（第43図、図版41、第8表）

調査区の表土や攪乱から、土師器634点、須恵器系土器32点、須恵器345点が出土した。また、出土した土師器環のうち2点は暗文が施されている破片で、7世紀後半のものとみられる。同じような暗文が施された土師器環の破片は、134・135号住居跡からも1点ずつ出土している。

ここではこれらの出土遺物のうち、須恵器8点を図示した。

1～8は須恵器環で、1・2は8世紀後半のものと思われ、底部回転糸切り後外周ヘラケズリと全面ヘラケズリが見られる。3・4は8世紀後半～9世紀前半のもので、底部回転糸切り後外周ヘラケズリである。5・6は9世紀前半のもので、底部回転糸切り後未調整と外周ヘラケズリが見られる。7・8は9世紀後半のものと思われ、底部回転糸切り後未調整である。

C 石器（第44図、図版42、第9表）

1は126号住居跡から出土した、砂岩製の砥石である。大部分を欠損し、現存長・幅約4.5cm、厚さ約1.1cmを測る。表面に1.5cm程度の研磨痕が残り、研磨部分はやや凹んでいる。

2は143号住居跡から出土した、砂岩製の支脚である。全面が被熱し、右下部を欠損している。また、頂部から約7cmの範囲全面に付着物が付着している。支脚として使用した際に下部を火床内に埋めて立てたため、露出する頂部～中部に付着物が付着したと思われる。

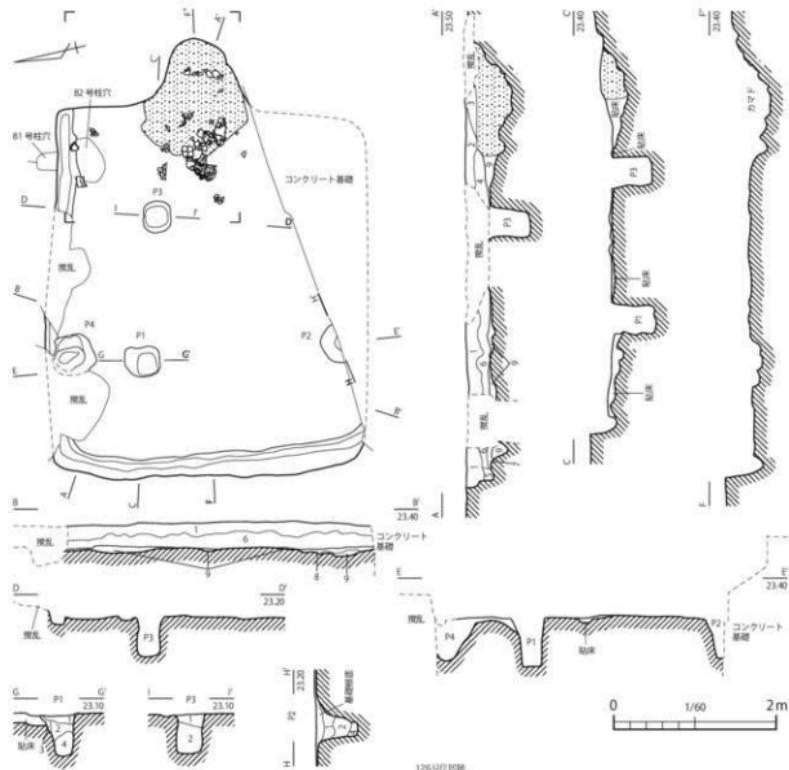
D 鉄器（第44図、図版42、第10表）

1は126号住居跡から出土した、鉄製品である。器種不明で、現存長2.9cm、幅0.4cm、厚さ0.35cmと長細く、棒状の鉄製品と思われる。断面形は方形を呈し、下部は欠損している。

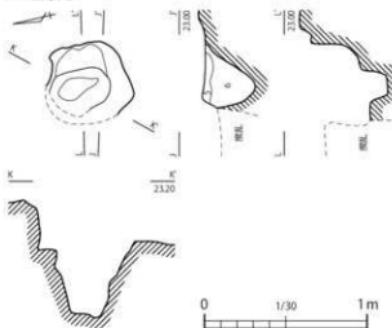
2は132号住居跡から出土した、釘である。現存長2.1cm、幅0.4cm、厚さ0.5cmを測り、釘頭が残存している。断面形は方形を呈する。

3は134号住居跡から出土した、刀子である。平造りで、現存長5.6cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。刃部先端と茎部が欠損している。

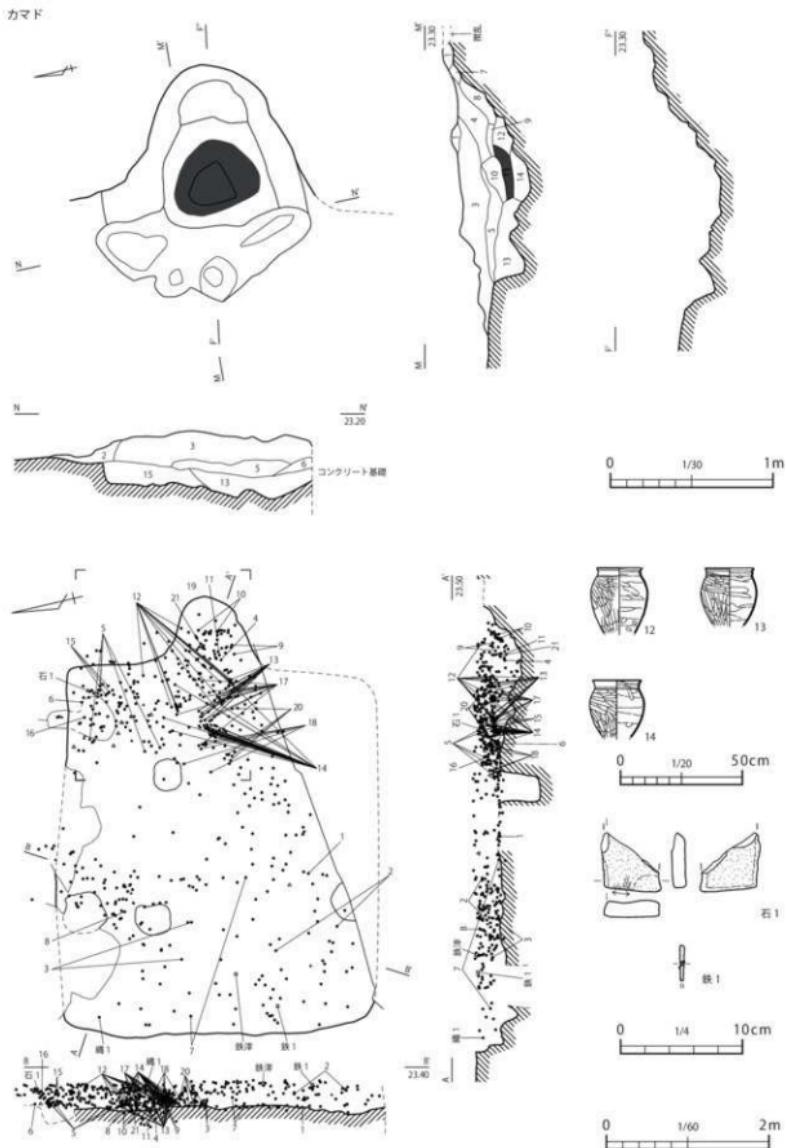
4は135号住居跡から出土した、刀子である。平造りで、現存長7.6cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。刃部先端と茎部が欠損し、片闇を有する。



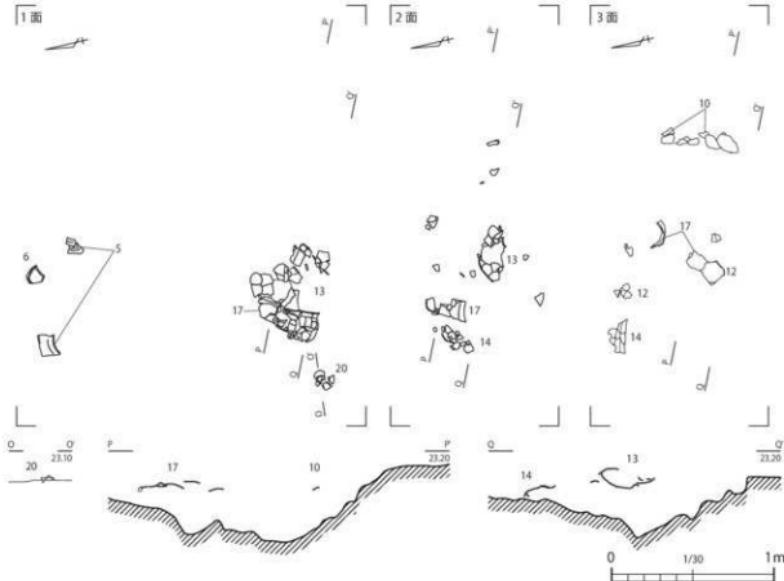
P4(梯子穴)



第24図 126号住居跡(1) (1/30・1/60)



第25図 126号住居跡(2) (1/4・1/20・1/30・1/60)



1200 号佳人图

1. 黒潮土(10YR2/2)
① -2mm²粒径の粒子を1~2%、1mm²粒径の粒子を2~3%含む。緑色、強粘性土。

2. 明相土(10YR3/2)
① -2mm²粒径の粒子を2~3%、1mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色、強粘性土。

3. 黒潮土(10YR3/3)
① -2mm²粒径の粒子を1~2%、1mm²粒径の粒子を3~5%、1mm³粒径の粒子を1~5%、1mm⁴以上の粒子を5~7%含む。緑色強い粘性土。

4. 黒潮土(10YR3/2)
① -10mm²粒径の粒子を3~5%、1mm²粒径の粒子を2~5%、1mm³粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

5. 黒土(10YR2/2)
① -5mm²粒径の粒子を3~5%、1mm²粒径の粒子を2~3%、1mm³粒径の粒子を2~3%、1mm⁴以上の粒子を10~15%含む。緑色、弱粘性土。

6. 黒潮土(10YR2/2)
① -2mm²粒径の粒子を1~2%、1mm²粒径の粒子を2~3%含む。緑色、弱粘性土。

7. 黒潮土(10YR2/2)
① -2mm²粒径の粒子を1~2%、1mm²粒径の粒子を2~3%含む。緑色、弱粘性土。

8. 黒潮土(10YR2/2)
① -5mm²粒径の粒子を2~3%、1mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

9. 黒潮土(10YR2/2)
② -5mm²粒径の粒子を2~3%、1mm²粒径の粒子を2~3%含む。緑色少少粘性土。

10. 黒潮土(10YR3/3)
② -6mm²粒径の粒子を3~5%、1mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

11. 黒潮土(10YR2/3)
② -10mm²粒径の粒子を7~10%、1mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

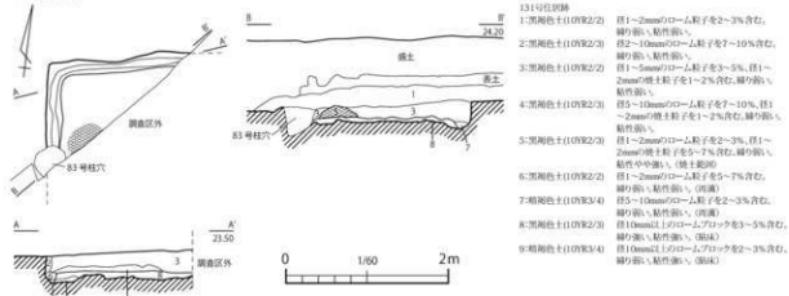
12. 黒潮土(10YR3/4)
② -2mm²粒径の粒子を1~2%、-5mm²粒径の粒子を3~5%含む。緑色少少粘性土。

13. 黒潮土(10YR3/4)
② -5mm²粒径の粒子を1~2%、-10mm²粒径の粒子を5~7%、1mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

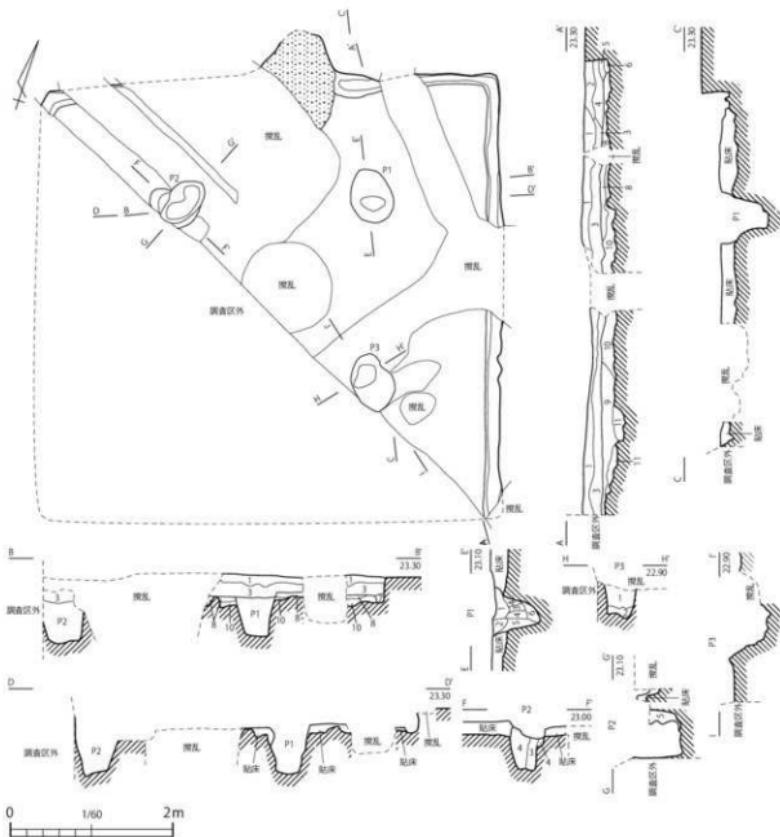
14. 黒潮土(10YR2/3)
② -10mm²粒径の粒子を2~3%、-5mm²粒径の粒子を2~3%含む。緑色少少粘性土。

15. 黒潮土(10YR2/3)
② -10mm²粒径の粒子を5~7%、-2mm²粒径の粒子を1~2%含む。緑色少少粘性土。

131号住居跡



第26図 126号住居跡(3)・131号住居跡(1/30:1/60)



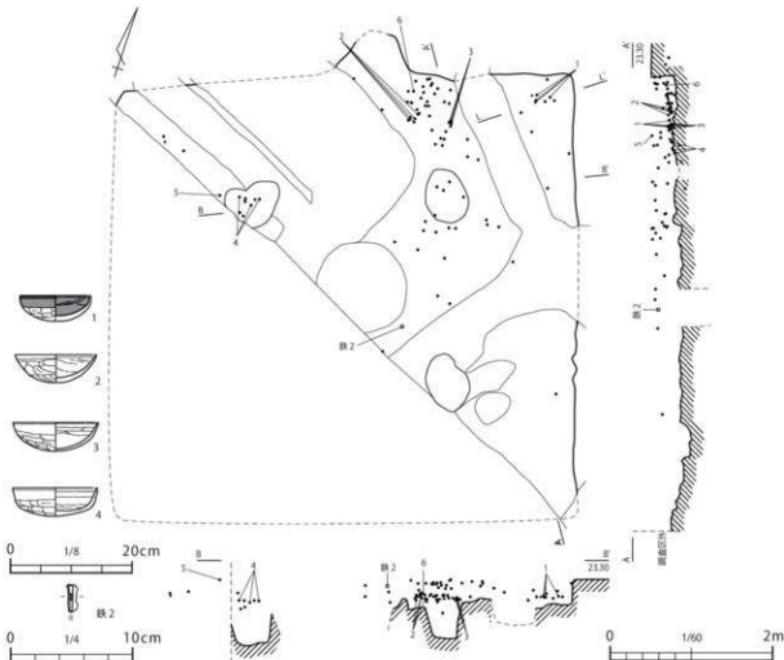
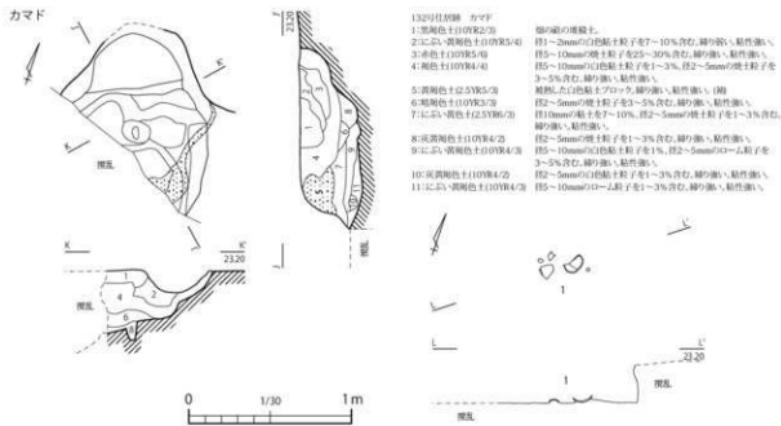
132号住跡

- 1: 黒褐色土(10YR2/3)
径1~2mmのローム粒子を3~5%、径1~2mmの粘土粒子を1~2%含む。
緑少く、粘性高い。
- 2: 黒褐色土(10YR2/3)
径1~2mmのローム粒子を3~5%、径1~2mmの粘土粒子を2~3%、
径5~10mmの粘土粒子を1~2%含む。緑少く、粘性中程度。
- 3: 黒褐色土(10YR2/3)
径2~5mmのローム粒子を5~7%、径1~2mmの粘土粒子を1~2%含む。
- 4: 黑褐色土(10YR2/3)
径1~2mmのローム粒子を2~3%、B2~5mmの粘土粒子を2~3%、
径1~2mmの砂状粘土粒子を1~2%、径5~10mmの粘土粒子を3~5%含む。
緑少く、粘性高い。
- 5: 黑褐色土(10YR3/4)
径1~2mmのローム粒子を5~7%、径1~2mmの粘土粒子を1~2%含む。
緑少く、粘性高い。
- 6: 黑褐色土(10YR3/4)
径1~2mmのローム粒子を7~10%含む。緑少く、粘性高い。(表面)
径2~20mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。(内部)
- 7: 黑褐色土(10YR3/4)
径1~2mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。
- 8: 黑褐色土(10YR3/4)
径10mm以上のロームプロックを20~25%含む。緑少く、粘性高い。(表面)
径10mm以上のロームプロックを1~3%含む。緑少く、粘性高い。(内部)
- 9: 黑褐色土(10YR3/2)
径10mm以上のロームプロックを7~10%含む。緑少く、粘性高い。
- 10: 黑褐色土(10YR3/2)
径10mm以上のロームプロックを1~3%含む。緑少く、粘性高い。
- 11: 黑褐色土(10YR3/4)
径10mm以上のロームプロックを1~3%含む。緑少く、粘性高い。(表面)

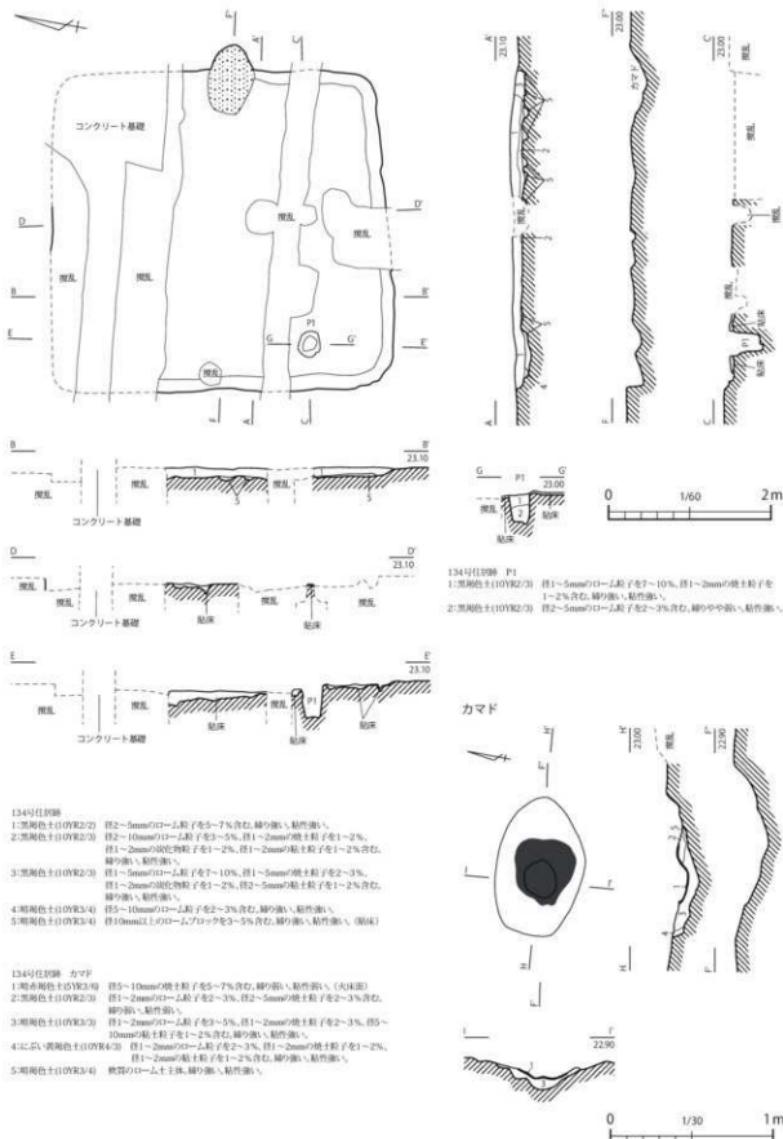
- 132号住跡 P1-P2
径5~10mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。
- 2: 黑褐色土(10YR3/3)
径5~10mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。
- 3: 黑褐色土(10YR3/3)
径2~5mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。
- 4: 黑褐色土(10YR4/4)
径10mmのロームプロックを2~5%含む。緑少く、粘性高い。
- 5: 黑褐色土(10YR4/6)
径10mmのロームプロックを2~7%含む。緑少く、粘性高い。
(3) P2壁を修理した土)
- 6: 黑褐色土(10YR4/6)
径10mmのロームプロックを1~3%含む。緑少くとも無い。

- 132号住跡 P3
1: 黑褐色土(10YR2/3)
径20mm以上のロームプロックを7~10%含む。緑少く、粘性高い。
- 2: 黑褐色土(10YR4/4)
径2~5mmのローム粒子を1~3%含む。緑少く、粘性高い。

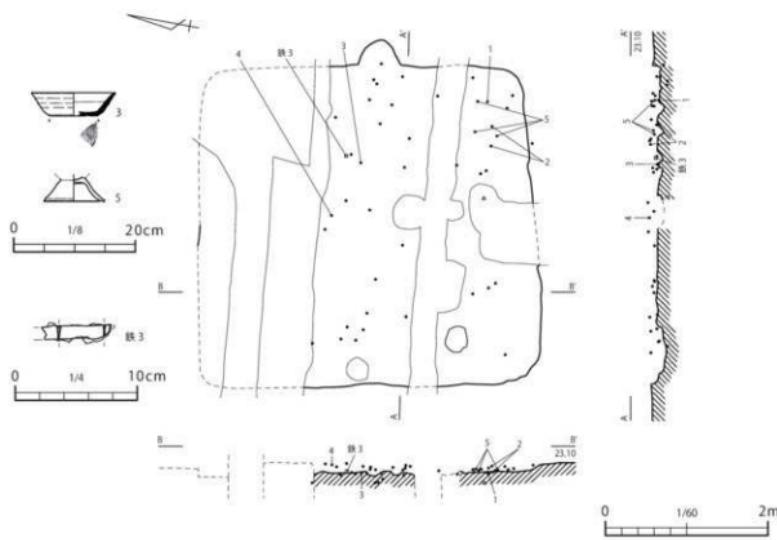
第27図 132号住跡 (1) (1/60)



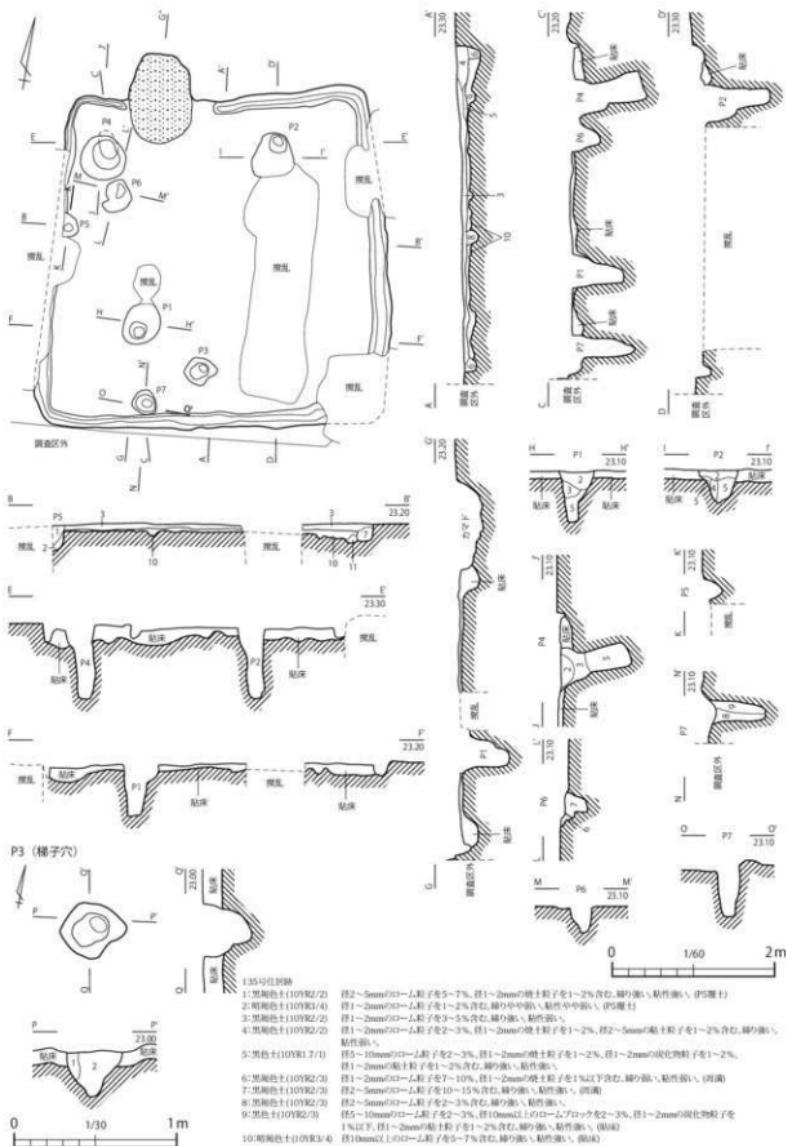
第28図 132号住居跡(2) (1/4・1/8・1/30・1/60)



第29図 134号住居跡(1)(1/30・1/60)



第30図 134号住居跡(2)(1/4・1/8・1/60)

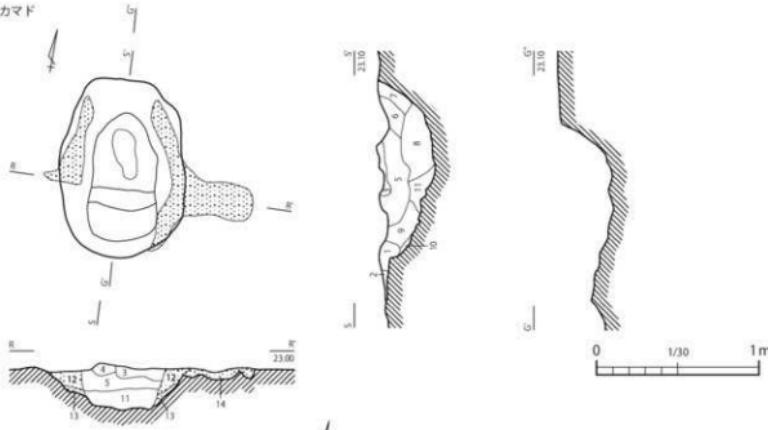


第31図 135号住跡(1) (1/30・1/60)

135号住居跡 P1~4-P6-P7

- 1.黒褐色土(10YR3/2) H2~5mmの口～ム粒子を2~3%, 径1~2mmの礫土粒子を1~2%含む。縁り細い、粘性高い。
- 2.黒褐色土(10YR2/2) H2~5mmの口～ム粒子を5~9%, 径1~2mmの礫土粒子を1~2%含む。縁り細い、粘性高い。
- 3.黒褐色土(10YR2/2) H2~10mmの口～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性高い。
- 4.黒褐色土(10YR2/2) H1~2mmの口～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性高い。
- 5.黒褐色土(10YR2/2) H1~2mmの口～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性高い。
- 6.黒褐色土(10YR2/2) H1~2mmの口～ム粒子を7~10%含む。縁りやや細い、粘性やや高い。
- 7.黒褐色土(10YR3/4) H1~6mmの口～ムロックを2~3%, 径1~2mmの礫土粒子を1~2%, 径2~5mmの礫土粒子を1~2%含む。縁りやや細い、粘性やや高い。
- 8.黒褐色土(10YR3/4) H1~5mmの口～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性やや高い。
- 9.黒褐色土(10YR3/3) H1~5mmの口～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性やや高い。

カマド



135号住居跡 カマド

- 1.黒褐色土(10YR3/4)

H2~5mm以下の中～ム粒子を1%以下、径1~2mmの

礫土粒子を2~3%含む。縁り細い、粘性高い。

- 2.黒褐色土(10YR2/2)

H2~5mm以下の中～ム粒子を5~9%、径1~2mmの

礫土粒子を1~2%含む。縁り細い、粘性高い。

- 3.黒褐色土(10YR2/2)

H2~10mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、

粘性高い。

- 4.黒褐色土(10YR2/2)

H1~2mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、

粘性高い。

- 5.黒褐色土(10YR3/4)

H1~6mm以下の中～ムロックを2~3%, 径1~2mmの

礫土粒子を1~2%含む。縁りやや細い、粘性やや高い。

- 6.黒褐色土(10YR2/2)

H1~5mm以下の中～ム粒子を2~3%, 径1~2mmの

礫土粒子を1~2%含む。縁りやや細い、粘性やや高い。

- 7.黒褐色土(10YR2/2)

H1~5mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁りやや細い、

粘性やや高い。

- 8.黒褐色土(10YR2/2)

H1~5mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁りやや細い、

粘性やや高い。

- 9.黒褐色土(10YR2/2)

H1~5mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁りやや細い、

粘性やや高い。

- 10.黒褐色土(10YR2/2)

H1~5mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁りやや細い、

粘性やや高い。

- 11.黒褐色土(10YR3/4)

H2~5mm以下の中～ム粒子を2~3%、径1~5mmの

礫土粒子を5~7.5%含む。縁り細い、粘性高い。

- 12.黒褐色土(10YR2/2)

H2~5mm以下の中～ム粒子を3~5%、径1~5mmの

礫土粒子を5~7.5%含む。縁り細い、粘性高い。

- 13.黒褐色土(10YR2/2)

H2~5mm以下の中～ム粒子を2~3%含む。縁り細い、

粘性高い。

- 14.黒褐色土(10YR2/2)

H2~5mm以下の中～ム粒子を2~3%、径1~5mmの

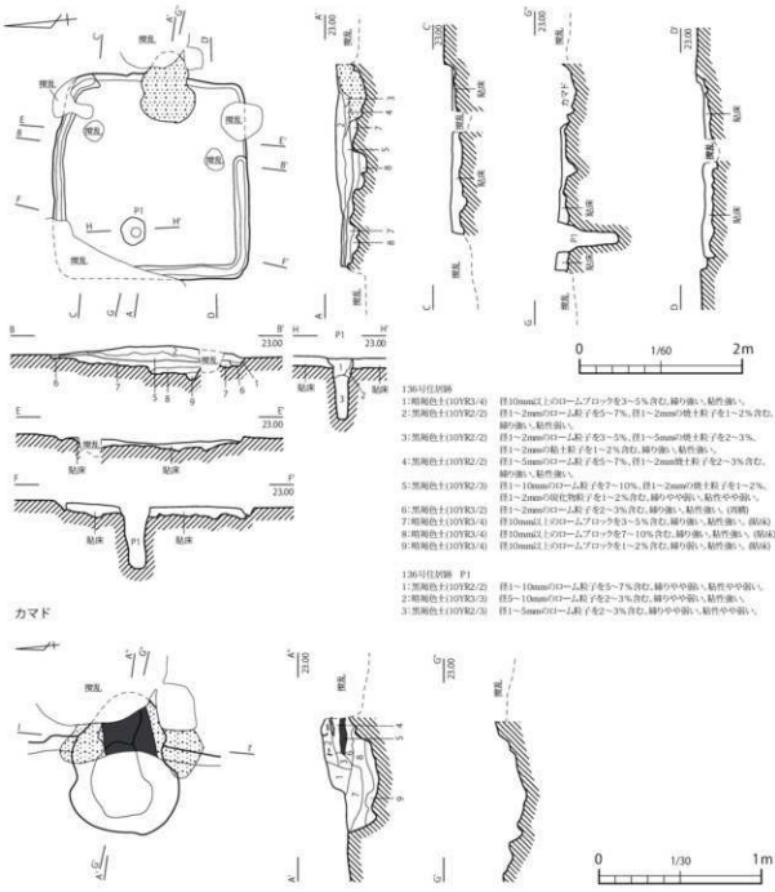
礫土粒子を3~5%含む。縁り細い、粘性高い。

(縁りの内側部分)

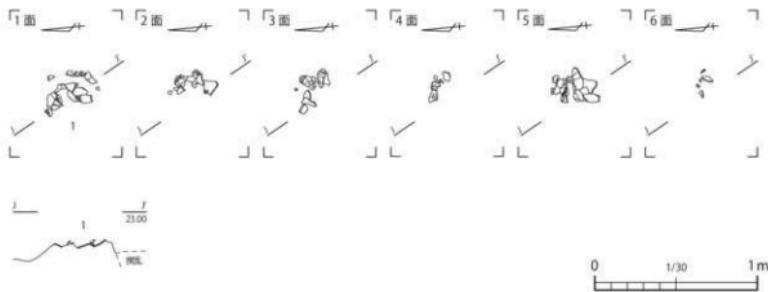
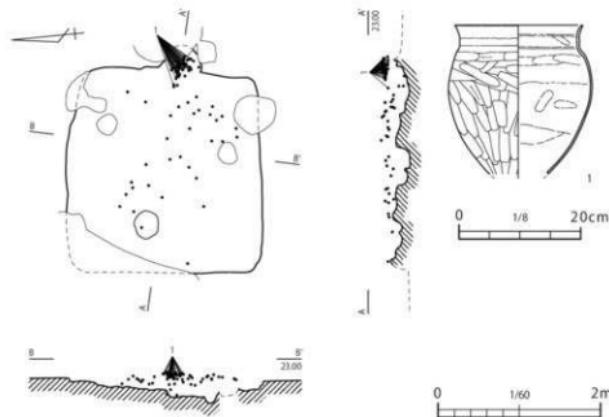
0 1/8 20cm 0 1/4 10cm

0 1/60 2m

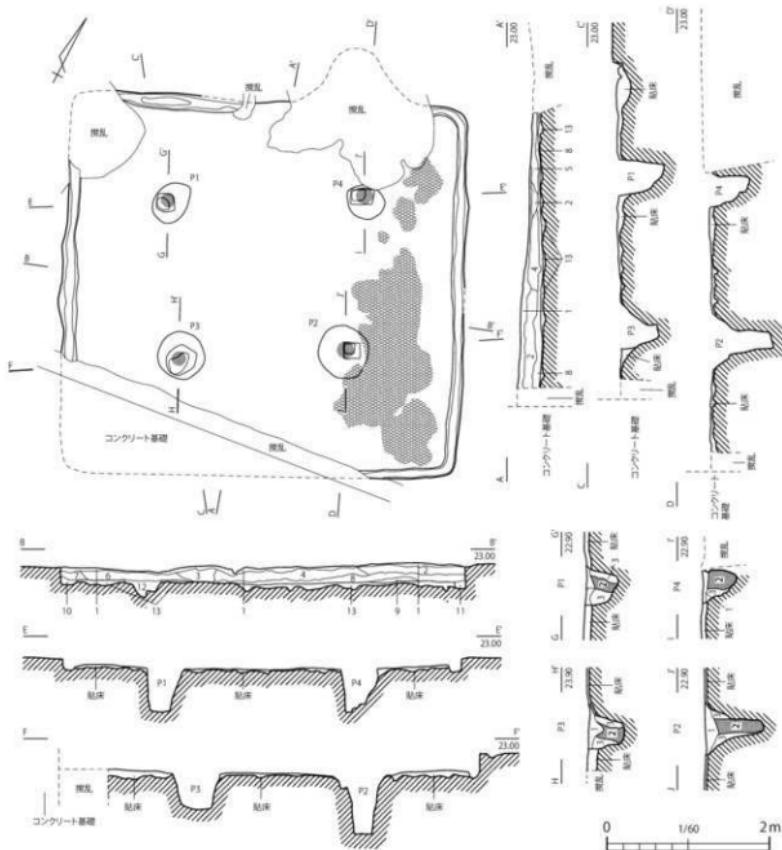
第32図 135号住居跡(2)(1/4・1/8・1/30・1/60)



第33図 136号住居跡(1)(1/30・1/60)



第34図 136号住居跡(2) (1/8・1/30・1/60)



137号住居跡

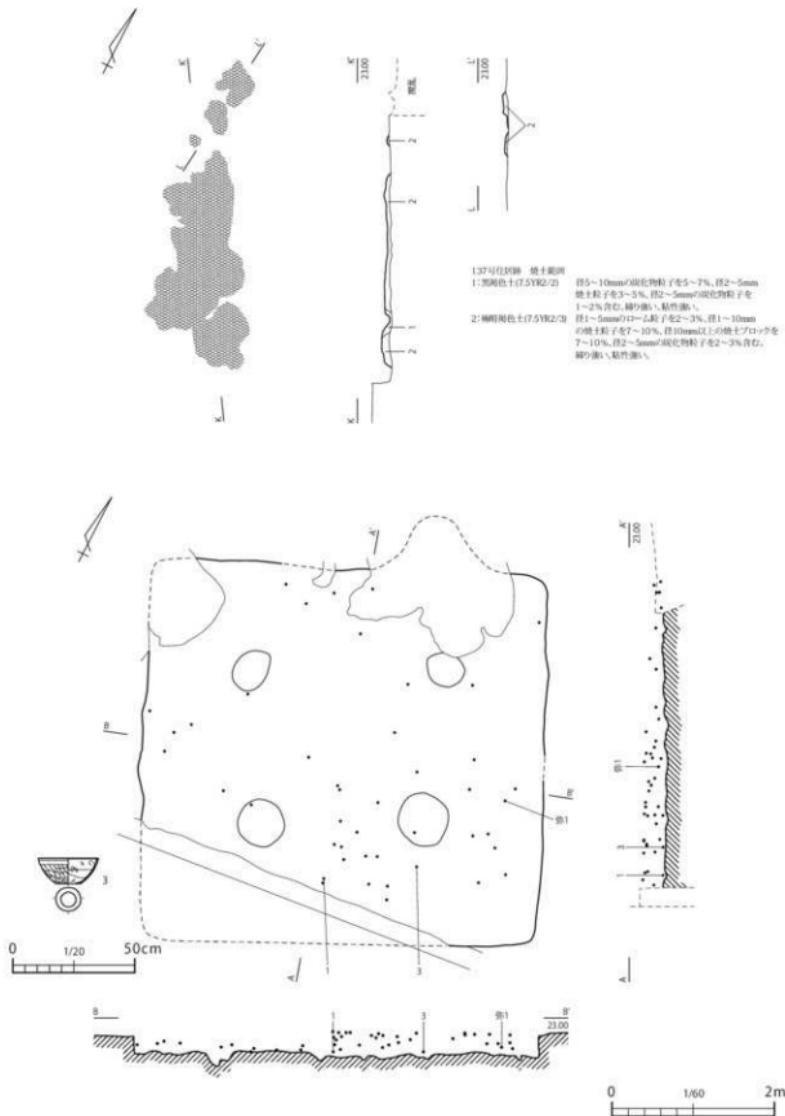
- 1: 黒褐色土(10YR2/2) ①1~2mmの土粒子を5%~7%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 2: 黒褐色土(10YR2/2)
- 3: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~10mmの土粒子を5%~7%, ②10mm以上の土粒子を2%~3%含む。緑り強め、粘性強い。
- 4: 黑褐色土(10YR2/2) ①2~10mmの土粒子を7%~10%, ②2~5mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 5: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~2mmの土粒子を2%~5%, ②10mm以上の土粒子を5%~7%含む。緑り強め、粘性強い。
- 6: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~5mmの土粒子を7%~10%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 7: 黑褐色土(10YR2/2) ①5~10mmの土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 8: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~2mmの土粒子を2%~3%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 9: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~2mmの土粒子を2%~3%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 10: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~2mmの土粒子を2%~3%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 11: 黑褐色土(10YR2/2) ①5~10mmの土粒子を2%~3%含む。緑り強め、粘性強い。
- 12: 黑褐色土(10YR2/2) ①10mm以上の土粒子を2%~3%含む。緑り強め、粘性強い。
- 13: 黑褐色土(10YR2/2) ①10mm以上の土粒子を2%~3%含む。緑り強め、粘性強い。

137号住居跡 P1~P4

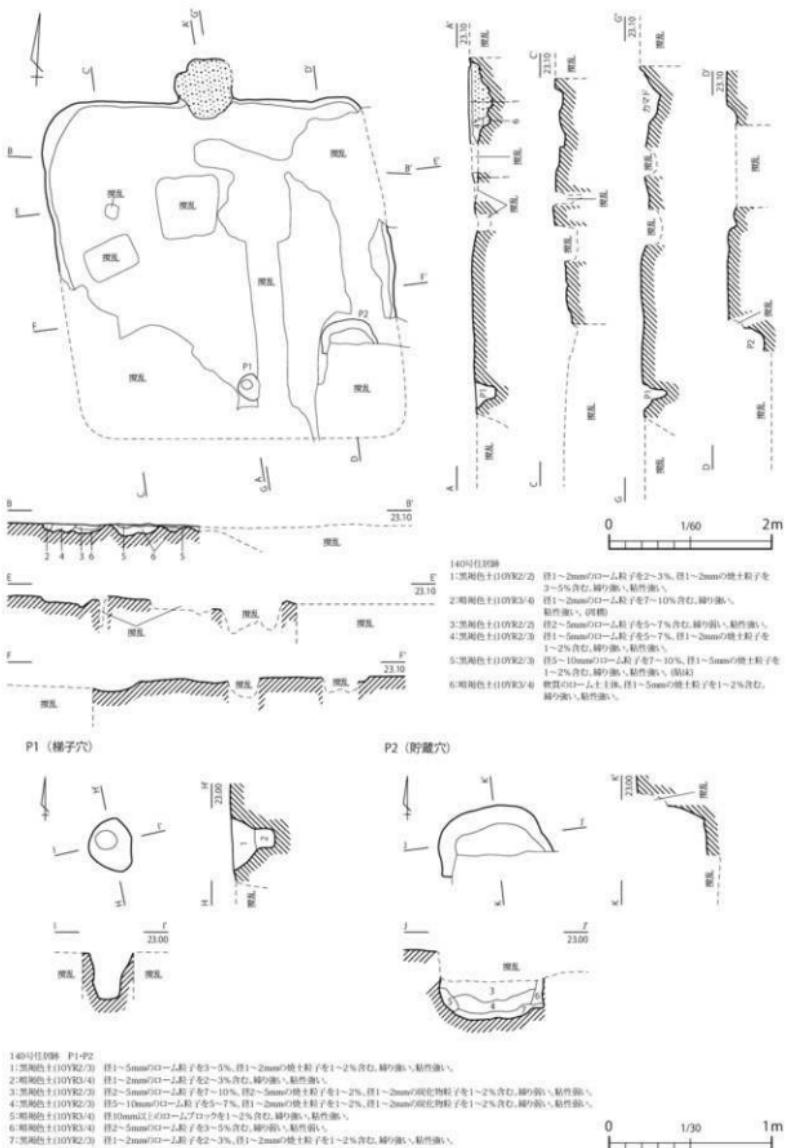
- 1: 黑褐色土(10YR2/2) ①1~5mmの土粒子を7%~10%, ②1~2mmの礫土粒子を1%~2%含む。緑り強め、粘性強い。
- 2: 黑褐色土(10YR2/2) ①5~10mmの土粒子を3%~5%含む。緑り強め、粘性強い。土の口上部付近に、10mm
- 3: 黑褐色土(10YR2/2) ①10mm以上の土粒子を2%~3%含む。緑り強め、粘性強い。

第35図 137号住居跡 (1) (1/60)

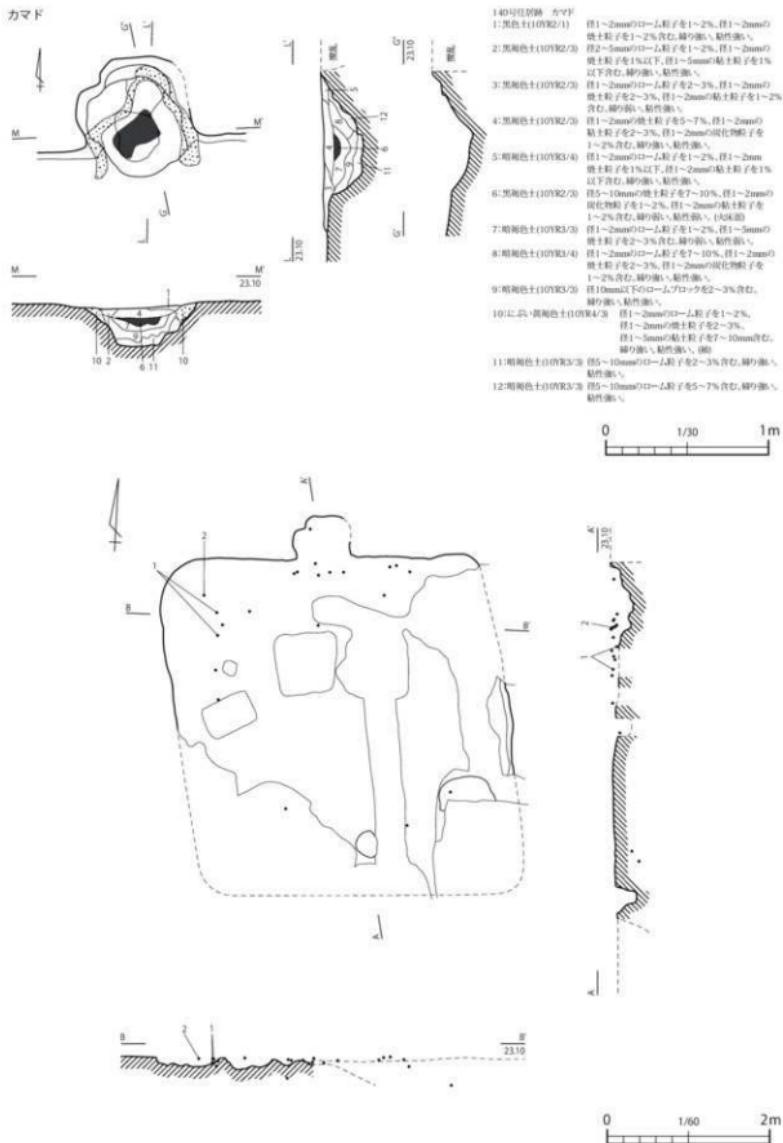
焼土範囲



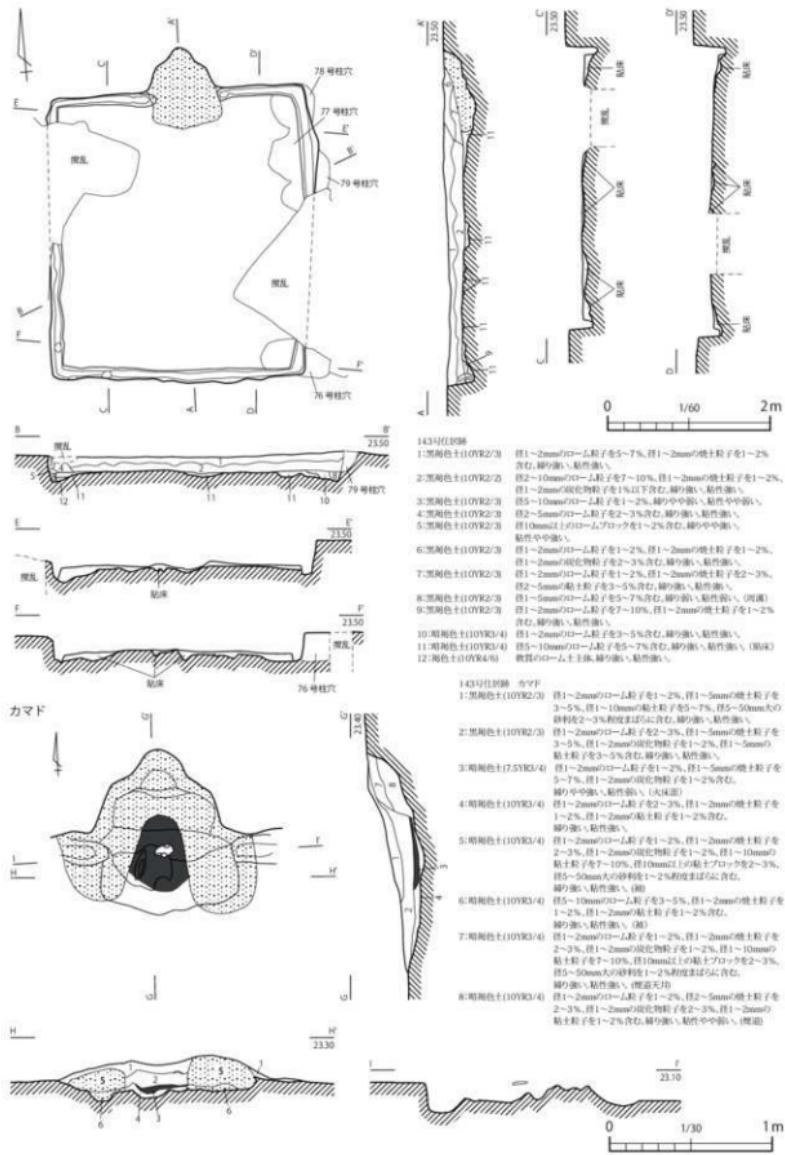
第36図 137号住居跡(2) (1/20・1/60)



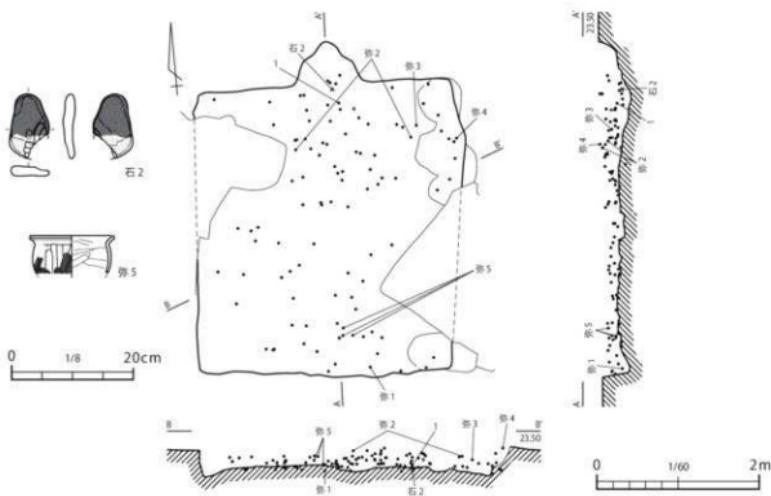
第37図 140号住居跡(1)(1/30・1/60)



第38図 140号住居跡(2) (1/30・1/60)



第39図 143号住居跡(1)(1/30・1/60)



第40図 143号住居跡(2) (1/8・1/60)

83号柱穴



A ————— K'



B ————— B'



131号柱跡

86・87号柱穴



A ————— K'

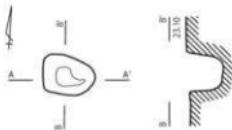


86号柱穴



87号柱穴

85号柱穴



A ————— K'



0

1/40

2m

83号柱穴

- 1: 黒褐色土(10YR2/3) 深2~5mmの3~4cm粒を3~5%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
2: 黑褐色土(10YR2/3) 深1~2mmの3~4cm粒を7~10%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。

84号柱穴

- 1: 黑褐色土(10YR3/3) 深1~2mmの3~4cm粒を2~7%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
2: 黑褐色土(10YR3/4) 深5~10mmの3~4cm粒を3~5%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。

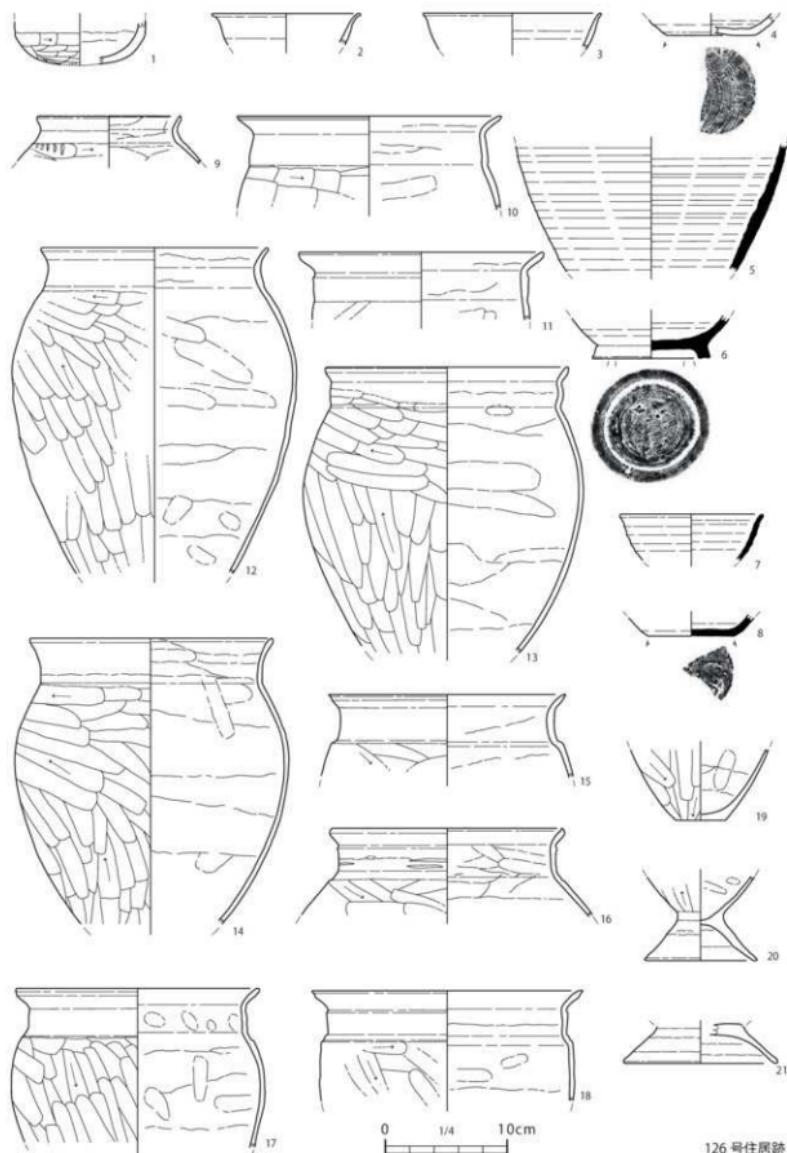
86号柱穴

- 1: 黑褐色土(10YR2/3) 深2~5mmの3~4cm粒を2~7%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
2: 黑褐色土(10YR2/4) 深5~10mmの3~4cm粒を10~15%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。

87号柱穴

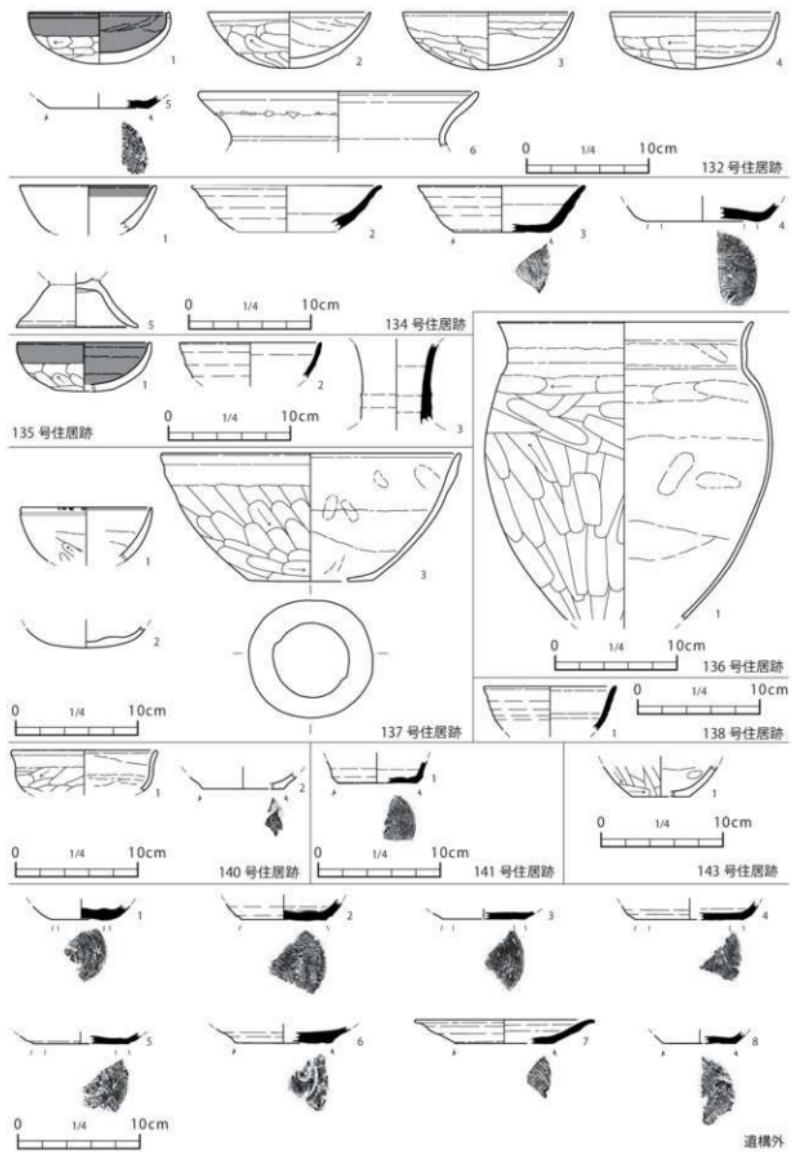
- 1: 黑褐色土(10YR2/3) 深1~2mmの3~4cm粒を2~7%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
2: 黑褐色土(10YR2/2) 深1~2mmの3~4cm粒を2~3%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
3: 黑色土(10YR1.7/1) 深1~2mmの3~4cm粒を1~2%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
4: 黑褐色土(10YR2/2) 深2~5mmの3~4cm粒を2~5%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
5: 黑褐色土(10YR2/3) 深2~5mmの3~4cm粒を7~10%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。
6: 黑褐色土(10YR2/3) 深5~10mmの3~4cm粒を5~7%含む。練り脂 \downarrow 、粘性 \downarrow 。

第41図 古代の柱穴 (1/40)



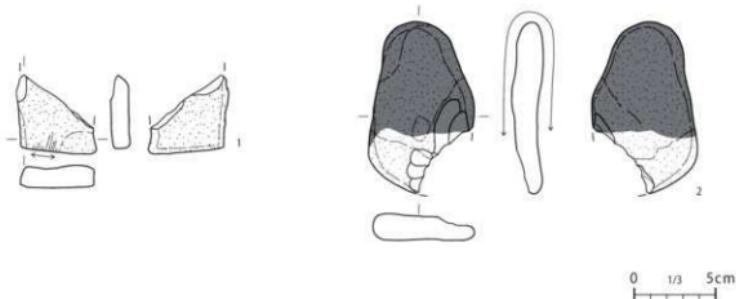
第42図 古代の土師器・須恵器(1) (1/4)

126号住居跡

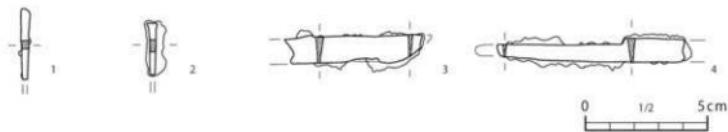


第43図 古代の土師器・須恵器(2)(1/4)

石器



鉄器



第44図 古代の石器・鉄器 (1/2・1/3)

第7表 古代の竪穴住居跡 計測値一覧表

擇別番号	開版番号	住居番号	調査区	グリッド	平面形	長軸 (m) ※○内は推定	短軸 (m) ※○内は推定	壁高 (m) ※○内は推定	主軸方向	付属施設	柱穴	備考
24～ 26	20・ 21	126	VII	25・26-G・H	長方形	4.55 (3.96)	—	0.34	N 100°W	カマド（座壁中央）	3	9世紀前半～中葉
26	22	131	IX②	30・31-I	（方形）	—	—	0.32	—	—	—	8世紀前半 北西端のみ突出、 北端にカマドがあつたと思われる。
27・ 28	23・ 24	132	IX③	30・31-F・G・ H	方形	(5.7) (5.5)	—	0.3	N 14°W	カマド（座壁中央）	3	7世紀後半
29・ 30・ 31	25・ 30・ 27	134	XI	50・51-H・I	隅丸方形	(4.2)	3.93	0.1	N 76°W	カマド（座壁中央）	—	9世紀初頭
31・ 32	27・ 28	135	XII	53・54-H・I	隅丸方形	(4.25)	4.1	0.3	N 13°W	カマド（北壁西端） 棒子穴	3	7世紀後半
33・ 34	29・ 30	136	X	33・34-F・G	隅丸方形	2.4	2.4	0.1	N 94°W	カマド（座壁中央）	—	9世紀初頭 棒子穴
35・ 36	31・ 32	137	X	35・36-H・I	方形	4.9	4.55	0.28	N 25°W	—	4	7世紀後半 北壁東端にカマド があつたと思われ る。
37・ 38	33・ 34	140	XII①	45・46-I・J	隅丸方形	(4.2)	(4.15)	0.8	N 9°W	カマド（北壁中央） 棒子穴、防壁穴	—	7世紀後半
39・ 40	35・ 36	143	VII	24-G	方形	3.6	3.15	0.35	N 5°W	カマド（北壁中央）	—	9世紀後半

第8表 古代の土師器・須恵器 観察表(1)

番号	西暦	遺構名 出土地点	番号	器種	a:口径(cm) b:底径(cm) c:高さ(cm) d:残存高(cm) ※()内は想定値	胎土	焼成	色調 ※()内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
42	40	126号住居 跡	1	土師器 环	d:3.7	良好。 細砂粒 含む。	良好。	に赤い模様 10YR6/4	外面:ケズリ・ナデ。 内面:ナデ。	10%	7世紀後半
42	40	126号住居 跡	2	須恵器 土器器 环	a:12.2 d:2.6	良好。 細砂粒 含む。	良好	褐 2.5YR6/8	回転力を利用した成形。	5%	9世紀初頭
42	40	126号住居 跡	3	須恵器 土器器 环	a:14.6 d:3.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	褐 5YR6/8	回転力を利用した成形。	5%	9世紀初頭
42	40	126号住居 跡	4	須恵器 土器器 环	b:7.4 d:1.3	良好。 細砂粒 含む。	良好	明赤褐 5YR5/8	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向:右。	10%	9世紀初頭?
42	40	126号住居 跡	5	須恵器 瓶	d:10.2	良好。 細砂粒 を微粗 に含む。	良好	灰 5Y6/4	回転力を利用した成形。	30%	9世紀初頭 腹部下半のみ残存。 外面にスジのよう な付着物あり。
42	40	126号住居 跡	6	須恵器 瓶	b:9.6 d:3.3	良好。 細砂粒 を微粗 に含む。	良好	灰 N4/0	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後外周へラブリを 施して下方を取付け。ナデ。 高台の結合部は外無。 糸切りの方向:右。	15%	9世紀前半~9世 紀中葉
42	40	126号住居 跡	7	須恵器 环	a:10.6 d:3.8	良好。 細砂粒 を微粗 に含む。	良好		回転力を利用した成形。	10%	9世紀前半~9世 紀中葉
42	40	126号住居 跡	8	須恵器 环	b:7.1 d:1.5	良好。 細砂粒 を微粗 に含む。	良好	灰 7.5Y6/4	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向:右。	10%	9世紀前半
42	40	126号住居 跡	9	土師器 白口縁	a:11.6 d:3.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤褐 2.5YR4/8	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	10%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	10	土師器 甕	a:21.6 d:7.5	良好。 細砂粒 含む。	良好	暗赤褐 2.5YR3/4	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	10%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	11	土師器 甕	a:19.9 d:5.5	良好。 細砂粒 含む。	良好		外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	5%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	12	土師器 甕	a:18.5 d:26.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤褐 10YR4/8	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	40%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。 全体的に摩耗して いる。
42	40	126号住居 跡	13	土師器 甕	a:20.0 b:(3.0) c:(27.0) d:23.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	暗赤褐 2.5YR5/8	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	70%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	14	土師器 甕	a:20.1 b:(3.4) c:(27.7) d:23.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤褐 2.5YR4/8	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	70%	9世紀初頭 口縁部「く」の字 形から「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	15	土師器 甕	a:19.4 d:6.6	良好。 細砂粒 含む。	良好	黄灰 2.5Y4/1	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	10%	9世紀中葉 口縁部「コ」の字 形への移行期。
42	40	126号住居 跡	16	土師器 甕	a:18.8 d:7.1	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤褐 5YR4/6	外面:ケズリ。 内面・ナデ。 口縁部:ナデ。粘土帯の輪轆み痕 残る。	5%	9世紀中葉 口縁部「コ」の字 形への移行期。

第8表 古代の土師器・須恵器 観察表(2)

編 號 序 号	同 名 地 點	遺 構 名	番 号	器種	a:口徑(cm) b:底径(cm) c:器高(cm) d:残存高(cm) ※()内は推定値	胎土	焼成	色調 ※○内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
42	40	126号住居跡	17	土師器 甕	a: 20.0 d: 13.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/6	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	30%	9世紀中葉 口縁部「コ」の字形
42	40	126号住居跡	18	土師器 甕	a: 22.2 d: 9.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤褐 5YR4/6	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	10%	9世紀中葉 口縁部「コ」の字形
42	40	126号住居跡	19	土師器 甕	b: 4.1 d: 5.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/8	外面:ケズリ。 内面:ナデ。	10%	9世紀初頭?
42	40	126号住居跡	20	土師器 臼付甕	b: 9.2 d: 6.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/6	外面:胸部 ケズリ。 脚部:ナデ。 内面:ナデ。	15%	9世紀初頭?
42	40	126号住居跡	21	土師器 臼付甕	b: 12.6 d: 3.2	良好。 細砂粒 含む。	良好	橙 5YR6/8	外面:ナデ。 内面:ナデ。	5%	9世紀初頭?
43	41	132号住居跡	1	土師器 甕	a: 11.6 b: 2.9 c: 4.2	良好。 細砂粒 を多く 含む。	良好	橙 7.5YR6/6 (明赤褐 2.5YR5/8)	外面:ケズリ・ナデ。 内面:ナデ。赤彩。 口縁部:ナデ。外面に沈擦黒文。 赤彩。	95%	7世紀後半
43	41	132号住居跡	2	土師器 甕	a: 13.4 b: 3.0 c: 4.6	良好。 細砂粒 を少量 含む。	良好	赤 10YR5/4	外面:ケズリ・ナデ。 内面:ナデ。 口縁部:ナデ。外面に沈擦黒文。	40%	7世紀後半 全体的に摩耗して いる。
43	41	132号住居跡	3	土師器 甕	a: 14.0 b: 3.0 c: 4.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	明黄 7.5YR5/6	外面:ケズリ・ナデ。 内面:口縁部:ナデ。	20%	7世紀後半 全体的に摩耗して いる。
43	41	132号住居跡	4	土師器 甕	a: 13.9 b: 3.5 c: 4.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤 7.5YR6/4	外面:ケズリ・ナデ。 内面:口縁部:ナデ。	40%	7世紀後半 全体的に摩耗して いる。
43	41	132号住居跡	5	須恵器 甕	b: 8.2 d: 1.0	良好。 細砂粒 を少量 含む。	良好	灰 N4/0	回転力を利用した成形。 底部回転基切り後人調整。 系切りの方向:右。	10%	9世紀前半
43	41	132号住居跡	6	土師器 甕	a: 23.0 d: 4.5	良好。 細砂粒 含む。	良好	明赤褐 5YR5/8	外面:ナデ。粘土供の輪轉み痕が 残る。 内面:ナデ。	10%	7世紀後半 口縁部のみ残存。 長削製。
43	41	134号住居跡	1	土師器 甕	a: 11.2 d: 3.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	明黄褐 10YR7/6 (明赤褐 5YR5/8)	—	10%	8世紀中葉? 混合型。 全体的に摩耗して いる。
43	41	134号住居跡	2	須恵器 甕	a: 15.6 b: 17.8 c: 10.8 d: 3.6	良好。 細砂粒 含む。 口縁部 斜状物 質を微 量含む。	良好	オリーブ緑 2.5Y4/3	回転力を利用した成形。	10%	9世紀前半
43	41	134号住居跡	3	須恵器 甕	a: 13.8 b: 7.8 c: 3.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	オリーブ黒 5Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転基切り後人調整。 系切りの方向:右。	20%	9世紀前半
43	41	134号住居跡	4	須恵器 甕	b: 9.0 d: 1.5	良好。 細砂粒 含む。 白色骨 針状物 質を微 量含む。	良好	灰 N5/0	回転力を利用した成形。 底部回転基切り後外周ハラケズ り。 系切りの方向:右。	10%	8世紀後半~9世 紀前半
43	41	134号住居跡	5	土師器 甕	b: 10.0 d: 4.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	黑 7.5Y1.7/1	—	20%	9世紀前半?
43	41	135号住居跡	1	土師器 甕	a: 11.0 b: (4.8cm) c: 4.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	赤 10YR7/4 (赤褐 2.5YR4/6)	外面:ケズリ・ナデ。 内面・口縁部:ナデ。赤彩。	15%	7世紀後半

第8表 古代の土師器・須恵器 観察表(3)

編 號 序 号	同 系 統 號 序 号	遺 構 名 出 土 地 點	番 号	器 種	a:口徑(cm) b:底径(cm) c:器高(cm) d:残存高(cm) ※()内は推定値	胎 土	燒 成	色 調 ※()内は赤彩	成形・調整	残 存 率	備 考
43	41	135号住居跡	2	須恵器 环	a: 11.6 b: 2.9	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰N4/0	回転力を利用した成形。	10%	9世紀前半? 内外面に火津痕あ り。
43	41	135号住居跡	3	須恵器 長颈瓶	d: 6.1	良好。 細砂粒 含む。	良好	オリーブ黒 7.5Y3/1	回転力を利用した成形。	10%	9世紀前半? 頭部のみ残存
43	41	136号住居跡	1	土師器 甕	a: 20.9 (3.9) c: (26.3) d: 24.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	暗赤褐色 SYR3/6	外面:ケズリ。 内面・口縁部:ナデ。	60%	9世紀後期 口縁部「く」の字 形から「口」の字 形への移行期。
43	41	137号住居跡	1	土師器 环	a: 10.8 d: 4.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	橙 10YR6/6	外面:ケズリ・ナデ。 内面・口縁部:ナデ。 外面・内面とともに洗練彫文。 口縁部:刻みあり。	10%	7世紀後半
43	41	137号住居跡	2	土師器 环	b: 5.8 d: 1.6	良好。 細砂粒 含む。	良好	にせい黄褐 10YR6/4	—	10%	7世紀後半
43	41	137号住居跡	3	土師器 甕	a: 24.6 b: 10.1 c: 10.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	橙 7.5YR6/8	外面:ケズリ・ナデ。 内面・口縁部:ナデ。	30%	7世紀後半 底部穿孔。 後に転用した可能 性あり。
43	41	138号住居跡	1	須恵器 环	a: 10.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	暗灰 N3/0	回転力を利用した成形。	10%	9世紀前半?
43	41	140号住居跡	1	土師器 环	a: 12.0 d: 3.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	明褐 7.5YR5/6	外面:ケズリ・ナデ。 内面・口縁部:ナデ。	15%	7世紀後半
43	41	140号住居跡	2	須恵器 系土器 环	b: 6.7 d: 1.0	良好。 細砂粒 含む。	良好	橙 7.5YR6/6	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後未調整。	5%	9世紀後半?
43	41	141号住居跡	1	須恵器 环	b: 6.4 d: 1.8	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰 7.5YR5/1	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後未調整。	5%	7世紀後半
43	41	143号住居跡	1	土師器 甕	b: 4.8 d: 2.4	良好。 細砂粒 含む。	良好	黑褐 7.5YR3/2	外面:ケズリ。 内面:ナデ。	10%	底部のみ残存。
43	41	X区 36-G	2	須恵器 环	b: 4.6 d: 1.1	良好。 細砂粒 含む。	良好	にせい黄褐 10YR4/3	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後外周ヘラケズ り。 系切りの方向:右。	5%	8世紀後半
43	41	X区 表土	3	須恵器 环	b: 7.0 d: 1.3	良好。 細砂粒 含む。	良好	暗灰 N3/0	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後全面ヘラケズ り。	5%	8世紀後半?
43	41	X区 表土	4	須恵器 环	b: 6.8 d: 0.5	良好。 細砂粒 含む。 白い骨 粉状物 質を微 量に含 む。	良好	オリーブ黒 5Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後、外周ヘラケズ り。	5%	8世紀後半~9世 紀前半
43	41	X区 表土	4	須恵器 环	b: 8.8 d: 1.2	良好。 細砂粒 含む。 白色骨 粉状物 質を含 む。	良好	灰 10Y6/1	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後外周ヘラケズ り。	5%	8世紀後半~9世 紀前半
43	41	X区 表土	5	須恵器 环	b: 7.8 d: 0.6	良好。 細砂粒 含む。 白色骨 粉状物 質を含 む。	良好	灰 10Y5/1	回転力を利用した成形。 底部回転系切り後外周ヘラケズ り。 系切りの方向:右。	5%	9世紀前半

第8表 古代の土師器・須恵器 観察表(4)

辨別番号	国版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a:口徑(cm) b:底径(cm) c:高さ(cm) d:残存高(cm) ※○内は推定値	胎土	焼成	色調		成形・調整	残存率	備考
								※○内は赤彩				
43	41	X区 36-G	6	須恵器 环	b: 8.0 d: 1.1	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰	10Y6/1	回転力を利用した成形。 底部回転舟切り後木調整。 舟切りの方向：右。	5%	9世紀前半
43	41	XII区 7	7	須恵器 环	a: 14.7 b: 8.1 c: 1.9	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰	オリーブ 5Y4/2	回転力を利用した成形。 底部回転舟切り後木調整。	10%	9世紀後半
43	41	XII区 表土	8	須恵器 环	b: 5.9 d: 0.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	オリーブ灰	10Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転舟切り後木調整。 舟切りの方向：右。	5%	9世紀後半?

第9表 古代の石器 観察表

辨別番号	国版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	刃種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	備考
44	42	126号住居 跡	1	砥石	砂岩	4.8	4.5	1.1	40.2	大部分欠損	表面凹部あり。
44	42	143号住居 跡	2	支脚	砂岩	10.4	6.2	1.4	136.6	一部分欠損	全面被熱。 頭部～中部に付着物あり。

第10表 古代の鉄器 観察表

辨別番号	国版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	備考
44	42	126号住居 跡	1	不明	2.9	0.4	0.35	1.1	部分欠損	棒状の鉄製品。 断面方形。 下部欠損。
44	42	132号住居 跡	2	針	2.1	0.4	0.5	1.7	部分欠損	断面方形。 針頭保存。
44	42	134号住居 跡	3	刀子	5.6	1.1	0.3	6.8	部分欠損	刃部先端・茎部欠損。平造り。
44	42	135号住居 跡	4	刀子	7.6	1.0	0.3	10.9	部分欠損	刃部先端・茎部欠損。平造り。片側。
-	42	126号住居 跡	5	鉄津	2.9	2.7	1.6	27.3	完形	写真国版のみ掲載。

IV 自然科学分析

北区十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の樹種同定分析委託報告

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

北区十条台遺跡群南橋遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭および古代の集落跡に伴う遺構が検出されている。本報告では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土した炭化材について、用材選択を明らかにするための樹種同定を実施する。

2. 試料

試料は、XI②区 141号住居跡から出土した炭化材 3点 (No.6～8) である。

3. 分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、横断面（木口）・放射断面（粧目）・接戦断面（板目）の3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

4. 結果

樹種同定結果を表 11 に示す。炭化材は、広葉樹 2 分類群（コナラ属クヌギ節、クリ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Cerris* ブナ科

環孔材。年輪の始め（早材部）に大型の道管が 1～2 列配列した後、急激に道管径を減じ、単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高のものと複合放射組織がある。

- ・クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め（早材部）に大型の道管が 2～3 列以上配列する。晚材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高。

5. 考察

弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡（XI②区 141号住居跡）から出土した炭化材は、コナラ属クヌギ節とクリに同定された。クヌギ節は、日本にクヌギとアベマキの 2 種があるが、現在の関東地方ではクヌギが広く分布するのに対し、アベマキは分布していない。また、出土種実遺体のデータベース（石田ほか, 2016）をみても、当該期の東京都や北区に隣接する埼玉県においてアベ

第 11 表 樹種同定結果

調査区	遺構	番号	形状	樹種
XI②区	141号住居跡	No.6	破片	コナラ属クヌギ節
		No.7	破片	コナラ属クヌギ節
		No.8	破片	クリ

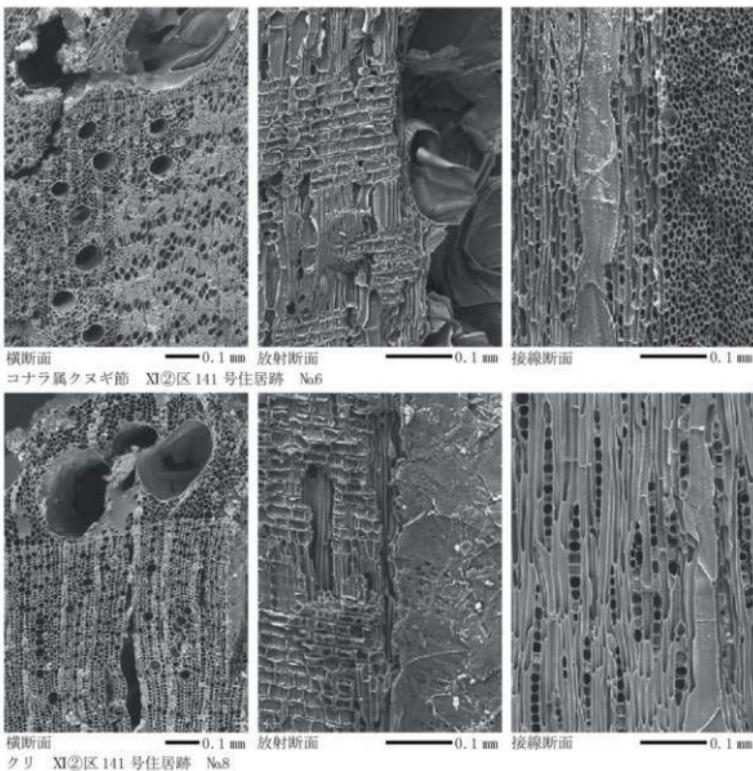
マキが出土した事例は確認できない。これらの点から、今回のクヌギ節はクヌギの可能性が高い。クヌギは、コナラと共に関東地方における二次林の主要な構成種となる落葉高木である。コナラが乾いた台地上によく生育するのに対し、クヌギはより湿った環境を好み、エノキ等と共に河畔林を構成することもある。クヌギの木材は、重硬で強度が高い。クリは二次林等に生育する落葉高木である。木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

樹種同定結果から、141号住居跡では、強度の高いクヌギ節（クヌギと考えられる）やクリが建築部材等に利用された可能性がある。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、本遺跡周辺では、西ヶ原遺跡や飛鳥山遺跡において、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材の樹種同定が実施されている。その結果をみると、西ヶ原遺跡では、3軒の住居跡から出土した炭化材5点について同定が実施されており、Y201号住居跡でクヌギ節とクリ、他の2軒から出土した3点は全てクヌギ節に同定されている。Y201号住居跡の結果は、本遺跡の結果に類似する。飛鳥山遺跡では、5軒の住居跡から出土した24点について同定が実施されており、クヌギ節を中心として、ムクロジ、オニグルミ、タケ亜科が僅かに混じる結果が報告されている。飛鳥山遺跡ではクリは確認されていないが、クヌギ節の多い結果は本遺跡の結果を評価する上でも注目される。

なお、クヌギ節やクリは、現在の植生や周辺の地形を考慮すれば、周囲の河川（石神井川など）沿いの河畔や台地斜面等に生育していた可能性がある。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所,
- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原 新,2016,日本の遺跡出土大型植物遺体データベース,植生史研究 ,24(1),18-24.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所 ,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所 ,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所 ,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所 ,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所 ,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,444p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.



第 45 図 十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

V 調査の成果と課題

中十条アパート地区・王子・王子母子アパート地区的両地区を通して、各時代の調査の成果と課題についてまとめる。(第46図、第12表)

1 繩文時代

遺構は竪穴住居跡1軒、柱穴1基、土坑6基が検出された。弥生時代後期以降の遺構や擾乱により調査前に削平された部分もあるが、深さがある構造のため下半部が遺存していた土坑も存在した。土坑はそれぞれ距離を置いて分布し、北側では約12mから34m、南側の26号土坑と22号土坑の距離は南北約80mの間隔を持ち、規則性は認められない。形態は、平面形が細長く幅が狭い(9・14・18・22・26号)、楕円形で幅がやや広い(8号)に大きく分けられる。縦断面は9・14号を除き、片側はほぼ垂直に掘削されるが、反対側は上場より壁面を削り込む構造であることが確認された。壁面の遺存状態は崩落の痕跡があまり認められず、長期にわたる使用は想定されない。規模は最大の26号土坑で、長軸長約3.1m×短軸長約1.1m×深さ約1.7mを測る。8号土坑は当初の規模は長軸長約2.3m×短軸長約1.5m×深さ約1.3mの規模であったが、土坑が完全に埋没した後に中央部を掘り返し、長軸長約1.8m×短軸長約1.0m×深さ約1.3mの土坑を作り直した可能性が高い。この規模は約1/2程の調査に留まつたが、推定復元でほぼ14号土坑の規模に相当する。

133号住居跡は、5・6層の褐色土による貼床が確認され、堆積土が弥生時代後期以降の遺構とは異なることから、繩文時代の竪穴住居跡として調査した。遺物が出土しておらず、帰属時期など詳細は不明である。88号柱穴も堆積土から、繩文時代の柱穴とした。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構の覆土や表土から主に出土しており、土器は前期前葉・中葉・後葉、中期後葉、後期前葉のそれぞれ深鉢の破片である。石器は石鏃・石錐・剥片・石皿が出土している。

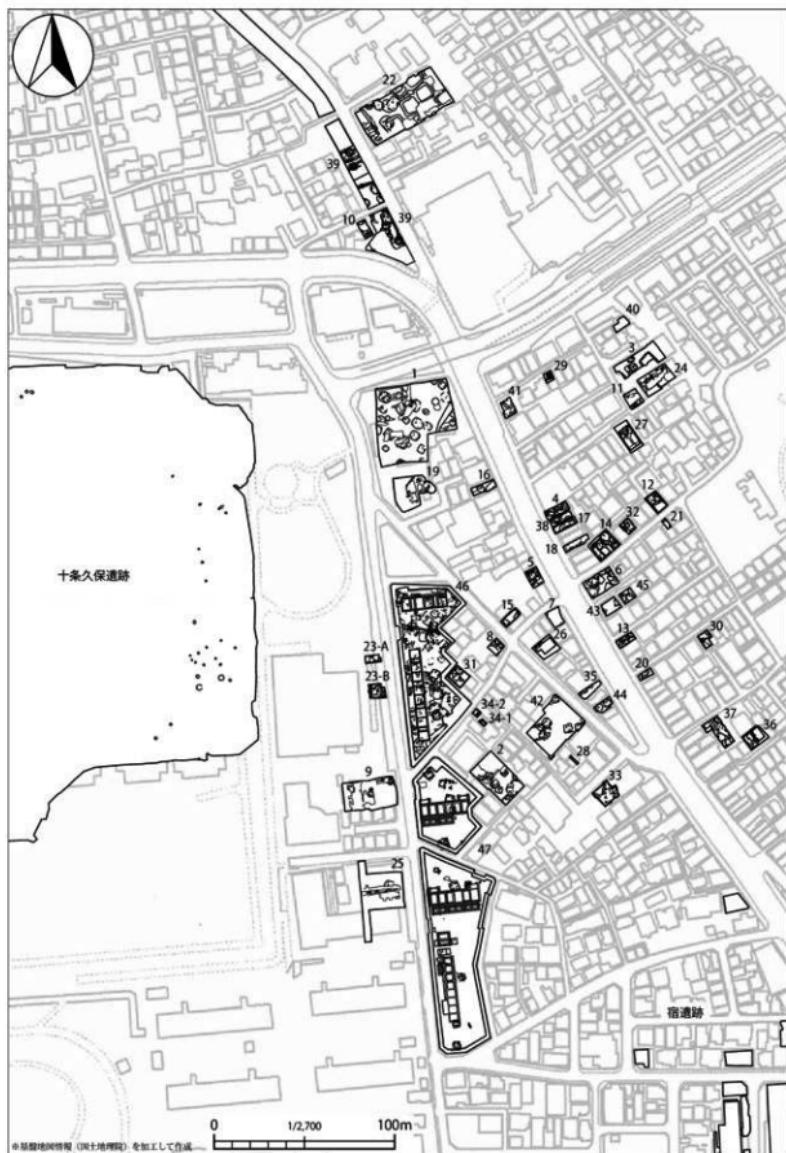
南橋遺跡では、北区教育委員会が実施してきた調査でも繩文時代の遺構の検出は少なく、今回の調査でも集落を形成した積極的な痕跡は認められなかった。

(飯塚)

2 弥生時代後期から古墳時代初頭

(1) 南橋遺跡の土器の分類(第47図)

北区内の遺跡から出土した弥生時代後期の土器群は、後期中頃から後期後半を1~3期に分けた編年案を基にしている(黒沢1996)。それを踏まえ道合遺跡の報告では、弥生時代後期から古墳時代初頭を4期に分けた編年を提示し、集落の整理を行った(丹野他2010)。南橋遺跡の該期の土器編年は、北区教育委員会が1996年に刊行した『南橋遺跡Ⅱ』にて、3地点から9地点出土の土器を、遺構の前後関係と一括土器をもとに1期からV期まで6期に分ける編年案が示されている(小林他1996)。ここではその後に実施された南橋遺跡の調査により良好な資料が蓄積されており、都道補助83号線整備事業に伴う十条台遺跡群の調査、及び南橋遺跡と一体と考えられる十条久保遺跡の土器群の様相



第 46 図 南橋遺跡調査地点全体図 (1/2,700)

第12表 南橋遺跡調査地点一覧表(1)

地点	所在地	調査面積(m ²)	報告書	発行年	図文	弥生時代後期～古墳時代初頭	古代
1	中十条1-2-18	2,000	南橋遺跡	昭和62年	—	住居跡31、方形周溝墓2	—
2	王子本町2-11-6	430	文化財研究紀要第3集	平成元年	—	住居跡7、方形周溝墓2	住居跡2(9世紀初頭)
3	中十条1-3-17	230	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡5	—
4	中十条1-3-10	70	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡5	住居跡3(8世紀前半)
5	中十条1-2-1	78	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡9	住居跡1(9世紀前半～中葉)
6	王子本町2-8-8	228	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡8	住居跡3(7世紀後半1、8世紀中葉～後半1、9世紀初頭～中葉1)
7	王子本町2-9-9	75	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡2	—
8	中十条1-1-22	45	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡1	住居跡2(7世紀後半1)
9	十条台1-3-16	630	南橋遺跡II	平成8年	—	住居跡2	住居跡2(8世紀前半～後半1、9世紀初頭～中葉1)
10	中十条1-6-3	50	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡3	住居跡1
11	中十条1-3-17	42	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡1、溝跡1	住居跡1(10世紀前半)
12	中十条1-3-4	60	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡4	—
13	王子本町2-8-6	45	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡1	住居跡6(9世紀初頭1、10世紀中葉～後半1)
14	中十条1-3-6	109	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡9、土坑1	溝跡1
15	中十条1-2-2	37	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡2	—
16	中十条1-2-22	56	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡2	—
17	中十条1-3-9	35	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡2	—
18	中十条1-3-8	49	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡2	住居跡2(7世紀後半1)
19	中十条1-2-18	300	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡3、方形周溝墓3	—
20	王子本町2-5-8	28	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡1	住居跡1
21	王子本町2-8-12	14	南橋遺跡Ⅲ・宿跡Ⅱ	平成15年	—	住居跡2	住居跡1
22	中十条1-13	1,122	南橋遺跡IV	平成16年	—	住居跡9、方形周溝墓10	—
23	十条台1-2-5	100	文化財研究紀要第18集	平成17年	—	住居跡7、小穴1	住居跡2(8世紀中葉～後半)
24	中十条1-3-17	210	文化財研究紀要第19集	平成18年	—	住居跡2	溝跡3
25	十条台1-3-20	580	十条台遺跡群南橋遺跡	平成18年	—	住居跡2	住居跡1(7世紀後半)
26	王子本町2-9-6	43.9	文化財研究紀要第23集	平成22年	—	住居跡1	—
27	中十条1-3	58.5	文化財研究紀要第23集	平成22年	—	住居跡7	住居跡3(平安)、柱立柱建物2(平安)
28	王子本町2-14-12	6.0	北区埋蔵文化財調査年報 —平成22年度—	平成24年	—	—	—
29	中十条1-4-6	22.8	北区埋蔵文化財調査年報 —平成22年度—	平成24年	—	住居跡1、土坑1	—
30	王子本町2-5-14	43.2	北区埋蔵文化財調査年報 —平成25年度—	平成27年	—	住居跡2	住居跡2(9世紀前半～中葉)
31	中十条1-1-2	76.8	北区埋蔵文化財調査年報 —平成25年度—	平成27年	—	住居跡2	住居跡2(8世紀後半)、土坑3(8世紀1、9世紀前半以降1、奈良・平安1)

第12表 南橋遺跡調査地点一覧表（2）

地点	所在地	調査面積 (m)	報告書	実行年	圖文	弥生時代後期～古墳時代初頭	古代
32	中十条 1-3-4	40.4	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 25 年度－	平成 27 年	—	住居跡 5	—
33	王子本町 2-14	112.6	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	—	方形周溝墓 1	住居跡 1 (10世紀前半), 獨立柱建物 1 (9世紀後半以前), 土坑 2 (奈良・平安)
34	王子本町 2-11-4	19.3	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	—	住居跡 2	—
35	王子本町 2-9	49.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	—	住居跡 1	住居跡 2 (9世紀初頭)
36	王子本町 2-4-9	64.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 27 年度－	平成 29 年	—	住居跡 3, 性格不明遺構 1	住居跡 1 (9世紀前半～中葉), ピット
37	王子本町 2-4	131.3	東京都北区 十条台遺跡群 南橋遺跡発掘調査報告書 －王子本町 2-4－	平成 28 年	—	住居跡 5	住居跡 1 (9世紀前半～中葉), 獨立柱建物 1 (9世紀前半～中葉)
38	中十条 1-3-10	43.1	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 28 年度－	平成 29 年	—	住居跡 5, 性格不明遺構 1	住居跡 2 (8世紀前半)
39	中十条 1-3-19	1,273	北区十条台遺跡群 －十条地(区)百道一休憩施設事業に伴う埋 蔵文化財発掘調査－	平成 30 年	—	住居跡 10, 穴六状遺構 3, 土坑 1, 柱穴 20, 方形周溝墓 1, 溝跡 2	—
40	中十条 1-3-19	27.6	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 29 年度－	平成 31 年	—	—	—
41	中十条 1-4-6	56.9	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 30 年度－	令和 2 年	—	住居跡 1, 方形周溝墓 1	—
42	王子本町 2-10	552.2	東京都北区 十条台遺跡群 南橋遺跡－王子本町 2-10 地点－発掘 調査報告書	令和元年	—	住居跡 4, 方形周溝墓 1	住居跡 5 (8世紀中葉～ 後半 3, 8世紀後半 2)
43	王子本町 2-8-7	63.3	北区埋蔵文化財調査年報 －令和元年度－	令和 3 年	—	住居跡 1	住居跡 1 (9世紀初頭)
44	王子本町 2-9	46.3	北区埋蔵文化財調査年報 －令和元年度－	令和 3 年	—	住居跡 2	—
45	王子本町 2-8-8	55.0	北区埋蔵文化財調査年報 －令和 2 年度－	令和 4 年	—	住居跡 2	住居跡 2 (9世紀初頭)
46	中十条 1-1 ほか	2,774	北区十条台遺跡群南橋遺跡－都宮中十 条アパート及び都宮王子・王子母子ア パート撤去事業に伴う埋蔵文化財発掘 調査－ 第 1 分野	令和 4 年	土坑 4	住居跡 101, 獨立柱建物 5, 方 形周溝墓 3, 土坑 14, 柱穴 46	住居跡 12 (7世紀後半 1, 8世紀中葉～後半 1, 9 世紀前半～中葉 6, 9世 紀後半 2, 9世紀後半～ 10世紀初頭 1), 獨立柱 建物 1 (9世紀後半), 土 坑 2, 柱穴 5
47	王子本町 2-12-2 ほか	4,698	本報告書	令和 5 年	住居跡 1、 土坑 1、 柱穴 1	住居跡 5, 獨立柱建物 1, 土坑 4, 柱穴 8, 溝跡 1	住居跡 9 (7世紀後半 4, 9世紀初頭 2, 9世紀后 半～中葉 1, 9世紀後半 1), 柱穴 4

を踏まえ、今回の調査で出土した土器群の位置付けと集落の展開を整理することを目的とし、新たに遺跡全体の土器の器種分類と編年を行った。

分類図(第47図)は今回の調査地点から出土した土器をもとにしているので、図には遺跡全体のすべての器種を網羅してはおらず、番号のないものは今回の地点からは出土していない。なお伊勢湾岸系の土器の分類・編年は(赤塚1990・1997)、近畿の庄内式系の二重口縁壺や高环の分類と編年は(寺沢1986・森岡・西村2006)に拠った。

- ・壺[複合口縁装飾壺(25~27、33・34)、複合口縁壺(19・24)、直口壺(18・21~23)、二重口縁壺、庄内式系二重口縁壺、無頸壺、広口壺(28~31)、脚付広口壺(32)、小型壺:ミニチュア(20)]。
- ・壺[台付甕刷毛壺(1・4・5)・ナデ甕(3)・S字状口縁台付甕(2)、受け口状口縁甕、平底甕]。
- ・高环[縄文の文様を持つ在地系(12・13)、口縁が大きく水平に開く撇入のもの、伊勢湾岸系の有段高环(16・17)、同有稜低脚高环(15)、塊形低脚高环(14)、庄内式系有段高环、中実脚高环]。
- ・塊(6~9)。
- ・小型器台(10・11)。

(飯塚)

(2) 南橋遺跡の土器編年(第48図)

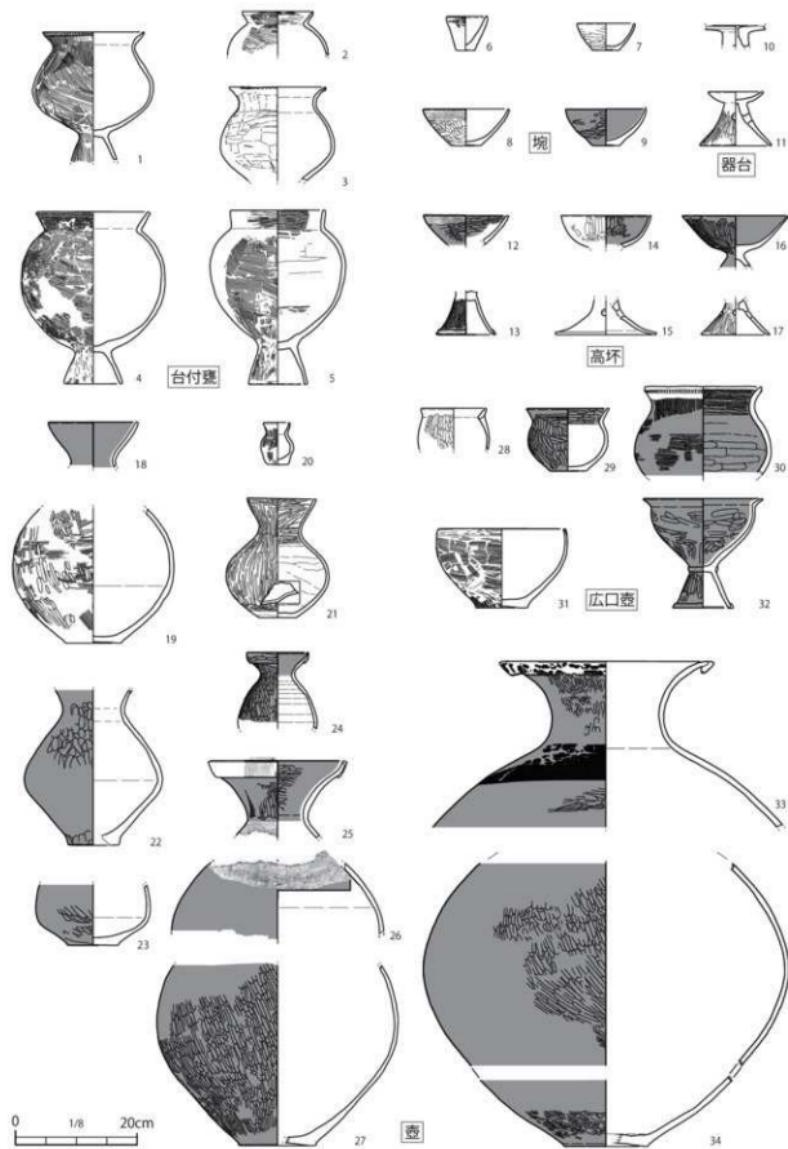
土器編年にはあたり、器種分類と各器種の型式変化を元にし、一括性の高い資料を基本に、単体でも良好な資料も含め、各種土器の変化する時期をⅠ期からⅤ期の5期に分けて整理した。ここでは報告書のまとめとして編年の概略を示す。調査地点は、北区教育委員会による各調査地点の通し番号を用い、今回の調査区は遺物の注記に用いた中十条アパート地区:JMNA、王子・王子母子アパート地区:JMOA、また都道補助83号線整備事業に伴う調査地点:Jホ83として表す。

各期の土器の特徴を概略し、標識とする資料を()内に示す。

Ⅰ期-複合口縁壺のうち装飾壺には大型(1)と小型があり、肩部と口縁部の地文に羽状縊文(1)ないしは網目状燃系文を施し、連続山形文銀歯文、平行沈線、縱形区画、S字状結節により区画を設ける。文様は主に羽状縊文を主体としたものから、網目状燃系文を主体とするものへと変化する。口縁には複数の棒状浮文を一単位として貼り付け、刻みを設けるものがある。直口壺にも肩部、口唇部に縊文ないしは櫛描文による文様を持つもの(8)、菊川式の影響が残る櫛描文を持つものも認められ、無文もみられる(9)。広口壺は丁寧なヘラミガキと赤彩で仕上げる精製土器で、大型と小型に分かれる。無頸壺はこの時期に限られ、北区内では田端西台通遺跡SZ07(丹野他2012)に良好な資料が認められる。

台付甕のうち刷毛甕には法量から小型と中型があり、胴部は大きく張り、口縁は大きく外反し、口唇部に刻みを持つ(13)。ナデ甕には中型のものがあり、肩部に粘土紐を貼り付け刻みをつける東京湾岸系も認められる。

高环には在地系の环部が半球状で、口縁部及び口唇部、脚部裾に縊文による文様を持つもの(19)、大きく口縁が水平に開くものがある。これらに加え、伊勢湾系の有段高环は、环部には明瞭な稜線を持ち、口縁は開きが弱く外傾して開き(20)、脚部は内湾汽味である(21)。Ⅱ期の同器種の型式変化から、Ⅰ期に出現していたものと考えられる。小型器台は東海系器台AがⅠ期の後半に出現していた可能



第47図 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器分類図（1/8）

性が高い。塊は小型の精製土器である。

I期の複合口縁の装飾壺は古い段階のものは破片資料によるものが多く、文様構成や施文具の詳細な分類、高环の型式変化とともに、1地点などのI期の遺構の重複の分析などから、今後2つの小期に分けられる可能性がある。北区内の資料では、七社神社前遺跡2号方形周溝墓（小林他1988）、道合遺跡後期古段階とほぼ平行するものと考えられる。

（標識資料：1地点SI14、6地点3号住居跡、10地点2号住居跡、32地点SI01、37地点SI01・02、十条久保SE34など）

II期～IV期まで継続する器種組成がほぼ揃う時期である。複合口縁の大型の装飾壺は文様の簡略化が進み、この時期に消滅する（2）。直口壺は無文になり、大型と小型があり、肩部から口縁はなだらかに外反する。大型は胴部に強い張りを持ち、中位に最大径を持つ（10）。小型は胴部下半に最大径を持つ。広口壺は精製土器が主体であるが、粗製土器や、精製で脚部を持つ広口壺が出現する。

台付甕には刷毛甕とナデ甕があり、両者とも胴部は大きく張りを持ち、口唇部に刻みを持つものと持たないものがある。刷毛甕には大型が加わり、IV期まで継続する。刷毛甕の口縁は大きく「く」の字状に外反し（14）、大型・中型は胴部の伸長が認められる（15）。ナデ甕は小型のものにはほぼ限られる。刷毛甕の製作は、I期から認められる、身から口縁の外面調整を大きく3段階に分けて仕上げる製作技法が確立する。

高环は伊勢湾系に限られ、有稜低脚高环は环部の稜は強く、有段高环は环部の稜は弱くなり口縁は大きく逆「ハ」の字状に開き（22）、脚部も外へ開くものへと変化する（23）。II期後半には环部の稜の消失と脚部の裾の開きが進む（24）。小型器台のうち東海系器台B類は（29）、脚部から受部が柱状で、脚部と受部は接合により貫通孔を作り出す。他の小型器台には器高が低く、受部は浅い小皿状で、脚部に透孔を3箇所持つものが出現し（30）、以降の型式変化が認められる。また貫通孔を持たないものも出現する。塊は縄文の文様を持つものが残り、平底で内湾して立ち上がるものと、平底で内湾して中位で屈曲して口縁が聞くものに分かれれる。手捏ねによるミニチュアもみられる。北区内の資料では、赤羽台遺跡八幡神社地区H-5号住（小林他1990）、豊島馬場遺跡SK11（小林他1995）などとほぼ平行するものと考えられる。

（標識資料：1地点SI18・SI23、4地点2号住居跡、22地点SI02・SI05・SH02、30地点SI03、Jホ83IB区4号遺構など）

III期一複合口縁壺は大型で、口縁帯の幅が広い（3）、狭い（4）があり、どちらも胴部の張りは強く、口縁は外傾し、口唇部はやや直立する。二重口縁壺もこの時期に出現した可能性が想定される。また二重口縁壺には、肩部に撚糸文による装飾を持つものも残る。直口壺は胴部の張りは強く、頸部から口縁は強く屈曲し立ち上がる（11）。広口壺には精製土器と粗製土器があり、簡略化した作りのものにも赤彩するものが認められる。また37地点3号住上層からは吉ヶ谷式の壺が出土しているが、吉ヶ谷式の搬入は全体に少ない。

台付甕は刷毛甕とナデ甕が継続し、刷毛甕は胴部が大きく張りを持ち、口縁が直立ぎみに立ち上がり、口唇部に刻みを持つものに加え（16）、胴の張りが弱いものが出現する。S字甕は小型b類が、口縁の形状や、肩部の張りの強さから見て、この時期に含まれる可能性が高い。

高环は伊勢湾系の有段高环（25）・有稜低脚高环が継続し、塊形低脚高环も認められる。小型器台

は縦断面がX字状で貫通孔を持つものと持たないものへ変化し、口径は最大になる(31)。塊は中位で屈曲するものには文様が残存し、上げ底で口縁が大きく開く。北区内の資料では、豊島馬場遺跡 SEO7 とほぼ平行するものと考えられる。

(標識資料: 5 地点 6 号住居跡、22 地点 SI04・SI09・SH01・SH07、23 地点 B 区 SI03、J ホ 83 1B 区 3 号遺構など)

IV期-Ⅱ期に揃った器種のうち台付甕を除き、広口壺や伊勢湾系の高环などがこの時期で消滅する。複合口縁壺は大型が継続し、胴部の張りは弱く、口縁は外反する(6)。二重口縁壺や頸部に突帯を持つものなどがある。庄内式系の装飾文様を持つ二重口縁壺は、口縁部の開きが浅く、短く立ち上がる点などから、庄内式から布留式にかかる時期のものとし(寺沢 1986)、IV期に含めた。直口壺は最大径を胴部下半に置き(12)、頸部から口縁が屈曲して立ち上がる。墳墓からは大型のものがみられる。広口壺は小型のもので、小型の精製の脚付の広口壺も認められる。

台付甕は刷毛甕が継続し、胴部の張りは弱く、口縁の立ち上がりは直立気味で、口唇部の刻みは消失する(17)。S字甕 b 類は小型に加え大型もみられる。

高环のうち塊形低脚高环の部は浅く、有段高环は脚部の退化と坏部の開きが弱くなる(26)。小型器台は受部が小型化し、ほとんど立ち上がりを持たず、口径は小さくなり、貫通孔は省略される(32)。塊は中位で屈曲するものは、底部が上げ底で、口縁が内湾気味に立ち上がる。V期に出現する小型丸底壺に似るが、II期以降の型式組列が確認され、底部が上げ底であるなどの形態的特徴から、両者は異なるものと判断される。

(標識資料: 3 地点 5 号住居跡、4 地点 6 号住居跡、6 地点 4 号住居跡、22 地点 SH04・05 など)。V期一複合口縁壺は大型が継続し(7)、直口壺も継続する可能性が高い。台付甕は刷毛甕が残り、胴部の張りは弱く、口縁は短く直立に立ち上がる(18)。また平底甕が出現し、その後、台付甕にとつて代わる。法量は台付甕の脚部を外した大きさで、刷毛調整でナデやケズリの調整はまだ見られない。高环には庄内式系の有段高环と、柱状高环(27)があり、また新たに小型丸底壺が認められる。

庄内式系の有段高环は塊形高环とともに、近畿在来系の高环群に大きな影響を与え、布留式期まで系譜が辿れる器種と位置付けられている(森岡・西村 2006)。本資料は口縁の立ち上がりが短く外傾する点などの特徴から、この器種の最終形態として、布留 O 式(寺沢 1986)、布留式古段階(森岡・西村 2006)に含まれるものと考えられる。V期は遺構の減少とともに資料も少ないが、器種組成に大きな変化が認められる時期であり、集落の大きな画期となった時期である。

V期に続く平底甕が主体となる時期の資料には第 6 地点 9 号住居跡があり、さらに荒川区町屋四丁目実揚遺跡 SD09(坂上他 2006)、田端不動坂遺跡第 17 地点 8 号土坑(中島他 2003)などの資料に繋がる。古墳時代前期中頃から中期の土器編年は、今回の調査成果と直接的な関連を持たないためここでは最小限に触れるにとどめ、台付甕消滅直後の資料である第 6 地点 9 号住居跡を仮にVI期としておくことにする。

(標識資料: 6 地点 7 号住居跡)。

(島崎)

(3) 中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区出土土器の様相

JMNA 地区では遺構の重複が激しく、遺物の遺存状態も住居跡の廃絶後に時間を置いて廃棄したも

の、前代の土器破片が住居跡の埋め戻し土に含まれて流入したものなどがあり、図示した資料は必ずしも出土した住居跡の存続期間や廃絶時期を示すものではない。これらを踏まえた上で、今回出土した各期の土器の様相を概略する。()内に出土遺構と図版番号を示した。また今回の調査区からは、Ⅴ期の資料は出土していない。

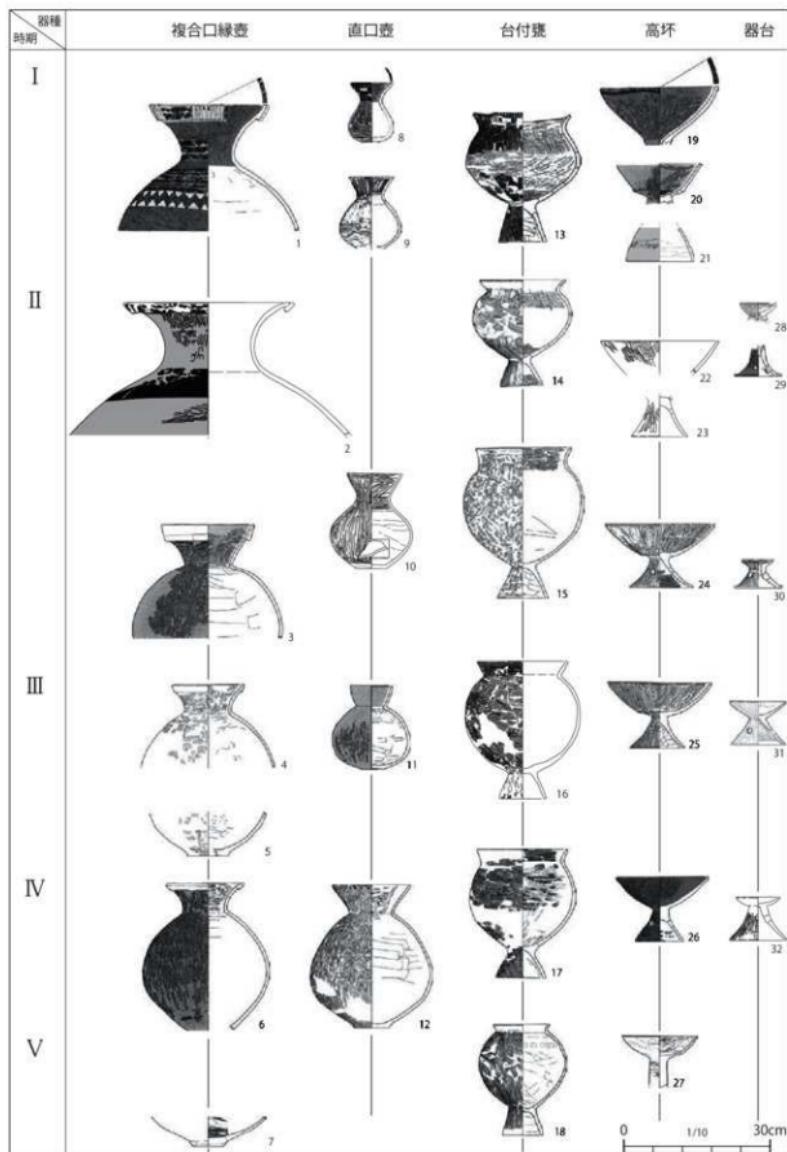
[Ⅰ期の土器] 複合口縁装飾壺は破片資料 72 点のうち、羽状縄文 27 点で、網目状撚糸文を持つものが主体で、他に櫛描文 3 点、格子状条線 1 点がある。肩部の文様は鋸歯文を主体とし(10 住 4)、平行沈線文 4 点(92 住 1)、S 字状結節文 3 点(41 住 23)、平行沈線文+縦区画文 4 点が認められる。縦区画文を持つ装飾壺は、大田区久ヶ原遺跡では幾何学文壺としては新しい要素とされ、大田区の弥生土器編年では後期Ⅳ期に位置付けられており、大田区久ヶ原 4-22-4 地点 1 号住居跡出土の壺は単節縄文を沈線で区画するものである(大田区博 2017)。本調査地点の平行沈線+縦区画文を持つものは、羽状縄文(1 号周溝墓 23)、網目状撚糸文(34 住 2)などがあり、この地域で文様が展開した可能性が考えられる。

台付壺(62 住 2)は形態的特徴からこの時期に含まれる。高杯には口縁部と口唇部に縄文を持つものの(2 住 1)、脚部の裾に粘土紐を貼り付け縄文を施文するもの(62 住 5)がある。

[Ⅱ期の土器] 複合口縁の装飾壺(31 住 2)の底部は上げ底で、胴部が大きく張りを持ち球体に近く、外面赤彩。胴部最大径約 57cm、全長は推定復元で約 70cm に近い大型である。(35 住 1)は折り返し口縁に似るが、肩部は S 字状結節文 3 段に羽状縄文、口縁に縄文を施文し、外面を赤彩。残存部の最大径は 55cm を測る。器種は異なるが、北区内では七社神社前遺跡第 2 号方形周溝墓、田端西台通遺跡 SZ11 などの墳墓から大型の装飾壺が出土しており、本調査区では住居の廃絶後に破片が廃棄された状態で出土しており、墳墓とは異なる様相で出土した。他の複合口縁の装飾壺のうち(67 住 5)は肩部に文様帯を持ち、(12 住 1)の胴部破片などを含め、炉に埋設され転用された。(1 号周溝墓 1)は頸部が細く括れ、口縁は内湾して立ち上がる古い要素を残す。肩部の張りは弱く、S 字状結節文区画に羽状縄文、口縁部は羽状縄文、口唇部に縄文施文後、棒状浮文貼り付け、外面と口縁内面を赤彩。(2 号周溝墓 1)は胴部の張りが弱く、外面赤彩。これも縄文を持つ複合口縁の装飾壺と推定される。直口壺は(141 住 3)、胴部の張りが強く、口縁は肩部から強く屈曲して立ち上がる。広口壺の精製土器には、口縁に刻みを加え全面を赤彩する(141 住 4)、全面赤彩する(4 住 1)、外面と口縁内面を赤彩する(1 号周溝墓 2)、赤彩はないがミガキ調整仕上げの(115 住 1)も含まれ、本調査区のⅡ期の典型的な広口壺として位置付けられる。また精製土器で脚部を持つ広口壺は(113 住 1)、脚部内面を除いて赤彩する。この器種は、北区内では七社神社前 2 号方形周溝墓、J ホ 83-1B 区 25 号(方形周溝墓)(Ⅳ期)などに類例がある。また刷毛調整でヘラミガキを省略した粗製の広口壺(113 住 2)は、脚付広口壺(113 住 1)の上に 2 を截せたものが転倒した状態で出土しており、粗製の広口壺がⅡ期から出現していることが明らかになった。台付壺はⅡ期の良好な資料は認められなかった。

高环のうち、有段高环は(31 住 1)、口縁は大きく開き、口唇で僅かに外傾する。有段低脚高环(1 号周溝墓 13)は、脚裾に沈線による文様を描く精製土器で、出土層位からも方形周溝墓に伴う可能性が高い。壺(113 住 3)は小型で、口縁及び口唇部を縄文で施文する。小型器台は(JMNA 遺構外 3)、脚部から受部が柱状で、脚部と受部の接合による貫通孔を作り出し、脚部に 3箇所の円孔を持つ。

[Ⅲ期の土器] 壺(36 住 13)は胴部が球体に近く、複合口縁壺の可能性が考えられる。小型の複合



第48図 南橋遺跡 土器編年表 (1/10)

口縁壺(122住3)は最大径を胴下半におき、口縁は内湾氣味に立ち上がる古い要素を残し、内面胴部を除き赤彩する。直口壺とみられる(18住1)は器壁が厚く、胴部は算盤玉状に強い張りを持ち、頸部から口縁が直立氣味で、口縁は緩やかに外傾するものと推定される。台付甕は90号住から中型の刷毛甕の良好な組み合わせが出土しており、(90住2)は胴が強く張り、口縁は「く」の字状で口唇部の刻みはない。(90住1)は(90住2)と比べ胴の張りは弱く、口縁は直立し、口唇部に刻みを持つ。(90住3)は脚部と口唇部を欠くが、胴が強く張り、口縁は「く」の字状である。3個体の台付甕は次節の土器の出土状態で触れるが同時に廃棄されており、法量はほぼ同規格で、(90住1)の方が口唇部の刻みを除き、形態的にはIV期の台付甕の特徴を先取りしている。また50号住には刷毛甕(50住2)とナデ甕(50住1)があり、両者は小型で、胴部に張りを持ち、刷毛甕は口縁が直立氣味に立ち上がり、ナデ甕は口縁が「コ」の字状に外反する。どちらも口唇部に刻みを持つ。

高环には、有段高环(92号柱穴3・5)、塊形低脚高环(36住1・2、122住7)などがある。塊(41住1・125住1)は、II期の(113住3)と同形態であるが、文様の消失からIII期に含めている。またミニチュアの手捏ね土器の壺(41住7)と塊(41住8)などもこの時期に含まれる可能性がある。小型器台は縱断面がX字状で、貫通孔を持つものがある(92号柱穴5)。

[IV期の土器] 複合口縁壺は良好な資料が見られなかった。壺(53住5)は、口縁が内湾して立ち上がり口唇部で短く外傾する特徴から、伊勢湾系のヒサゴ壺の可能性があるが、胴部を欠くので断定はできない。広口壺は(119住1・2)、小型に限られる。台付甕は刷毛甕で(53住1)に中型の良好な例で、(24住1・4、45住1)などの小型のものが含まれる。S字甕b類には、(24住25・41住5)などがあるが、遺存状態が良好でなく、煮沸形態としては客体的である。小型器台(45住2)は、受部はほとんど立ち上がりを持たず、口径は小さく、脚部3箇所に円孔を持ち、貫通孔は省略されている。

(4) 住居廃絶後に廃棄された土器の出土状態

住居の廃絶後に、竪穴内に廃棄された土器の出土状態について、特徴的な方を整理する。

[装飾壺の廃棄] 31号住居跡からは東南部の床面から、大型装飾壺の底部と胴部の破片が廃棄された状態で出土した。肩部から口縁部を欠き、底部と胴部が直接接合しなかったことなどから(31住2-1・2-2)、別の場所で打ち欠いたのち、31号住居跡内に各部位を廃棄したものと考えられた(第1分冊図版24)。

35号住居跡からは、埋め戻し途中の住居跡の炉跡から北東部の径約1mの範囲にわたり、大型壺の肩部から口縁部を廃棄した状態で出土した。肩部以下は打ち欠かれており(35住1)、別の場所で打ち欠いたのち、埋め戻し途中の35号住居跡の中へ廃棄したものと解釈された(第1分冊図版28)。

31号住居跡・35号住居跡から出土した装飾壺は大型のもので、通常では填墓の供献用ないしは壺棺としての用途が想定される装飾壺である。ここではこれらを打ち欠いた行為の後、別の場所の住居跡に廃棄する行為が行われたことが確認された。

[壺・広口壺・高环の廃棄] 18号住居跡からは、完全に埋め戻した状態の主柱穴P3の上で、底部を穿孔し、口縁を打ち欠いた直口壺を(18住1)、その場で廃棄した状態で出土した(第1分冊図版19)。

67号住居跡では、廃絶した住居跡の炉跡の上に、坏部を打ち欠いた高环の脚(67住4)を正位置で置き、その上に直口壺の肩部以下を打ち欠いた口縁(67住2)を口縁側を上にして重ね、さらにその

上に直口壺の肩部以下を打ち欠いた口縁部(67住1)を口縁側を上にし、重ね置いた状態であったものが、堆積土の土圧などにより、壺の口縁2個体が西側に倒れ込んだものと判断された(第1分冊図版51)。

113号住居跡からは炉跡の北側で、脚付広口壺(113住1)の上に粗製の広口壺(113住2)をのせたものが、北側に倒れた状態で出土し、その東からは約20cm離れ、塊(113住3)が正位置で置かれたままの状態で出土した(第1分冊図版71)。七社神社前2号方形周溝墓からも、周溝北東部からまとまって出土した土器群の中に、精製の広口壺・粗製の広口壺とともに脚付広口壺が出土しており(北区1988)、組成の共通性が窺える。

115号住居跡からは北東隅壁直下の床面に、広口壺(115住1)が正位置で置かれた状態で出土した(第1分冊図版72)。

122号住居跡からは、埋め戻し途中の住居跡西北部から、底部を打ち欠いた可能性の高い複合口縁壺(122住3)が、口縁を下にして置かれたものが倒れた状態で出土した(第1分冊図版77)。

92号柱穴からは、掘立柱建物の柱材を抜き取った後、底部を打ち欠いた赤彩の高环(92柱穴3)、環部を打ち欠いた高环脚部(92柱穴4)、胴部から肩部以上を打ち欠いた直口壺(92柱穴1・2)、受部を打ち欠いた小型器台(92柱穴5)を、抜き取り穴から控え土の周間に廃棄した後、掘方全体を埋め戻している状況が確認された(第1分冊図版85)。

【台付壺の廃棄】 62号住居跡の炉跡からは、台付壺(62住2)が正位置で置かれたものが、倒壊した状態で出土した(第1分冊図版47)。脚部壠は欠損していることから、竪穴住居跡の廃絶後、脚部の壠を打ち欠いた台付壺を据え置いた状況が想定された。

90号住居跡からは、北西部の床面から僅かに覆土が堆積した後、東側から脚部を打ち欠いた高环(90住5)、北壁側から台付壺2個体(90住1・2)、西壁側から口唇部と脚部を打ち欠いた台付壺(90住3)が出土した。台付壺1と2はほぼ完形に復元され、東側に1の個体が、西側で2の個体がまとまっており、それぞれが同じところで廃棄されたものと判断された(第1分冊図版63)。

ここでは土器の出土状態を整理した。北区内では住居跡の廃絶に伴い「赤砂」と土器を用いた住居の廃絶儀礼が、田端不動坂遺跡第17地点や道合遺跡などで確認されている。しかし南橋遺跡では今回の調査区を含め「赤砂」を蒔く儀礼は確認されておらず、また十条久保遺跡の井戸跡からは、井戸の廃絶にともなう土器を用いた儀礼行為が確認されている。今後の良好な類例の増加により、それぞれの遺跡の内容の違いによる集団内の儀礼行為のあり方が明らかになるものと考えられる。

(5) 集落の構造復元

A 竪穴住居の規模と構造

竪穴住居跡はJMNA地区で101軒、JMOA地区で5軒の計106軒検出された。JMNA地区では重複が激しいため掘方の全形を把握できた竪穴住居跡の数は少なく、JMOA地区は遺存状態が良好でなかったが、概ね床面積の平面規模から大・中・小型の3つのグループに分けられる。ただし大型住居跡は24号住居跡を除いて、他は炉と柱穴の配置から規模を復元した数値を基にしているが、それほど大きく数値が異なることはないものと考えられる。

- ・大型：面積60～50m²前後(19・24・41号住居跡)
- ・中型：面積28～16m²前後(7・10・32・36・46・50・55・61・71・87・100・127号住居跡)

21m²前後が5軒と多く、127号住居跡が推定面積28m²で他の中型の中では傑出する。

- ・小型：面積14～10m²前後(12・35・42・51・53・62・67・74・129・138・141号住居跡)

掘方の平面形は、円形・楕円形と隅丸方形・隅丸長方形に大別され、大型・中型住居跡は土器の様相からⅠ期からⅣ期へ、平面形が前者から後者へと変遷する。

竪穴住居跡うち中型・大型は、基本的に4本の主柱穴、炉跡、貯蔵穴、梯子穴(出入のための昇降用梯子を固定した柱穴)により構成される。小型は炉跡を設けるが、主柱穴の数は一定ではない。

B 堀立柱建物の構造

(1) 中十条アパート地区の様相(第49図)

JMNA地区では北群から4箇所、JMOA地区からは1箇所で、堀立柱建物を構成する柱穴群が検出され、整理作業を経て数棟の堀立柱建物を復元した。JMNA地区から41・44・42・47号住居跡と重複する柱穴群から2号・3号堀立柱建物跡が、41号住居跡の西側で4号堀立柱建物跡が復元された。これらは遺構の重複の激しい箇所であることから、さらに数基の建物跡が存在した可能性が推定される。また復元された柱穴も、掘方内部での作り替えが確認されている。また32号住居跡と34号住居跡の間で5号堀立柱建物跡が復元された。

2号堀立柱建物跡(P15-20-16)は、梁行1間×桁行1間(約2.7m×3.0m)の南北棟で、東南隅の柱穴掘方は41号住居跡により破壊され失われたものと想定された。確認面の掘方の径は0.7mから0.5m、掘方底面の標高は23.0mから23.1mであり、P15・P20は掘方の底面に暗褐色土を層厚約10cm以内で硬化した面を設けた後、柱を建てた状況が確認される。柱痕の径は、P15で約0.2m、P20で約0.3mである。床面積は約8.1m²を測る。

3号堀立柱建物跡(P21-11-17)は、梁行1間×桁行1間(約3.1m×約3.6m)の東西棟で、東南隅の柱穴掘方は41号住居跡により破壊され失われたものと想定された。2号堀立柱建物跡と位置的に重複し、規模は一回り大きく、前後関係は明確でない。確認面の掘り方の径は0.6mから0.5m、掘方底面の標高は23.1mから23.2mである。床面積は約11.2m²を測る。

4号堀立柱建物跡(P26-30-27-23)は、梁行1間×桁行1間(約2.4m×約3.4m)の南北棟で、P30はP89に切られているため残存部での数値になるが、掘方底面の標高は23.1mでほぼ揃えられており、P26は掘方底面で柱のあたるところを層厚約5cm程に暗褐色土で固め、その上に柱を建て周囲に控え土を入れて固定した状況が確認された。柱痕の径は約0.2mである。床面積は約8.2m²を測る。

5号堀立柱建物跡(P4-2-10)は、梁行1間×桁行1間(約2.4m×約4.4m)、北東隅の柱穴掘方は攪乱により消失したことを想定したが、東西棟とすると、他の堀立柱建物跡と比べて桁行が長いので、あるいはP2-P10の北側の延長上に柱穴が伸び、1間×2間の南北棟であった可能性も想定される。P10は34号住居跡に切られており、34号住居跡はP6・P7に切られており、この地区でも堀立柱建物が建て替えられていった可能性がある。確認面での掘方の径は約0.6m、掘方底面の標高約23mで揃えられている。柱の固定の仕方にはP2のように掘方底面に黒褐色土で固めてから柱を建てるものと、固めることはしないで直接底面に柱を建て、周囲に控え土を入れて固定するものが確認された。

P89は2号から4号堀立柱建物跡を構成する柱穴より大型で、周囲からはこれに対応するような柱穴は、攪乱部も丁寧に遺構確認したが検出されなかったことから、単独で建てた柱の柱穴の可能性

も想定される。また P59 もその可能性が推定されるが、調査区の西端からの検出であるため、掘立柱建物の東南隅の柱穴の可能性も残している。

6 号掘立柱建物跡 (P91-P92) は、19 号住居跡の覆土中から掘り込まれており、19 号住居跡は長軸推定 8 m で、主柱穴は北東部から P9 が検出されている。JMNA 地区から検出された大型竪穴住居跡の主柱穴は、24 号住居跡で径 0.4 m から 0.5 m、深さ 0.5 m から 0.7 m。41 号住居跡で径約 0.7 m、深さ約 0.7 m、柱痕径約 0.3 m。大型住居跡と推定される 39 号住居跡で径 0.6 m、深さ 0.7 m で、大型住居跡の主柱穴の規模にそれほど差は認められず、P91・P92 が卓越した規模を持つ。P91 の掘方は楕円形で、径約 1.8 m × 1.0 m、深さ 1.4 m。P92 は径約 1.6 m × 1.2 m、深さ約 1.4 m。底面の標高は P91 が 21.4 m、P92 が 21.5 m で揃えられている。P91 は調査所見として西側から東側へ作り替えており、P92 も同じ掘方内での作り替えが確認され、嵩上げした底面を暗褐色土で層厚 10 cm 程に固めた後、径約 0.5 m の柱を建てており、作り替え時の底面の標高はどちらも 22.0 m に揃えられている。また P92 は最後に柱を抜き去った後、土器を用いた儀礼を行ってからに完全に埋め戻している状況が確認されている。これらのことから、P91・92 は通常の竪穴住居跡の主柱穴ではなく、独立した大型掘立柱建物跡の柱穴と判断した。本遺構の周囲は特に攪乱が著しく、他の柱穴を積極的に確認したが、柱筋が北に延びるかは確認できなかった。また柱間隔が 5 m と広いことから主柱穴の間に束柱が想定され、19 号住の P8 は P92 から西へ 90 度折れ、距離も西への延長約 2.5 m に位置することから、束柱の可能性も考えられる。

6 号掘立柱建物跡とした P91・P92 は類例の少ない構造であり、南橋遺跡 34 地点からは SI03 が遺跡の中で最大規模の長軸 12 m を測る竪穴住居跡で、その主柱穴は本調査地点の P92 と同様な構造を持ち、時期はⅣ期と考えられ、P92 が先行する。34 地点 SI03 の建物全体の構造復元を通じ、P91・92 の構造復元との比較を行い、P59・P89 のような単独で存在する柱穴に相当する可能も含め、位置付ける必要がある。

(飯塚)

(2) 王子・王子母子アパート地区の様相(第 49 図)

JMOA 地区では、調査区北側の柱穴群で梁行 2 間 × 衍行 2 間の 7 号掘立柱建物跡が復元された。①東西 63 号柱穴 -68 号柱穴 -62・65 号柱穴 / 南北 63 号柱穴 -79 号柱穴 -76 号柱穴の列、②東西 60 号柱穴 -68 号柱穴 -62・65 号柱穴 / 南北 60 号柱穴 -80 号柱穴 -76 号柱穴の列、③東西 64 号柱穴 -69 号柱穴 -61 号柱穴 / 南北 64 号柱穴 -80 号柱穴の列に分かれ。重複が激しいため 1 棟の掘立柱建物の建て替えと思われ、③→①→②の順での建て替えを復元したが、これら以外にも数度の建て替えがあったと推測される。また、7 号掘立柱建物跡の南側で 126 号住居により切られた状態で検出された、81・82 号柱穴も掘立柱建物跡の可能性がある。

柱穴の掘方は径 0.3 ~ 0.6 m 前後、確認面からの深さは 0.7 m 以内であるが、全体的に削平を受けていることから、本来はさらに深い掘り込みであったと思われる。どの柱穴もローム層をハード層中まで掘り込んでいることから、礎板などを敷いた可能性は無いと考えられる。また、68・69・76 号柱穴は、掘方内部での作り替えが確認されている。柱痕は 60・61・65 号柱穴で確認された。床面積は①で約 13.3 m²、②で約 12.1 m²を測る。

7 号掘立柱建物跡と JMNA 地区の 4 号掘立柱建物跡は、直線距離で約 80m 離れており、7 号掘立

柱建物跡と4号掘立柱建物跡の間には、主にⅠ・Ⅱ期の竪穴住居跡と方形周溝墓が密に分布しているため、ここに他の掘立柱建物が建っていた可能性は低いと思われる。

7号掘立柱建物跡は同時代の竪穴住居跡と重複は無く、住居の無い空闊地に占地し、同じ場所での建て替えを繰り返していたものと思われる。これは4号掘立柱建物跡にも同様のことが言え、4号掘立柱建物跡の場合、建て替えの痕跡は無いが、住居の無い空闊地に占地している。この2棟の掘立柱建物跡の例から、弥生時代後期から古墳時代初頭の南橋遺跡では、住居の無い広場のような場所に掘立柱建物を建てる傾向があった可能性を考えることができる。

C 墓域について

方形周溝墓のあり方（第50図）

周溝墓は南西隅にまとまっており、それぞれⅡ期の竪穴住居跡を切っているが、1号周溝墓の周溝下層の出土土器(1・13)や、2号周溝墓の上層の壺形土器などから、3号周溝墓は時期の限定を明確にし得ないが、ほぼⅡ期の後半に構築されたものと判断した。

1号方形周溝墓は北溝の北東部が東に向かって立ち上がっており、北東隅に陸橋部を想定して南東に折れるものとみても、推定で東西径19mを測る大型の方形周溝墓となる。周溝の断面は箱形で、幅は確認面で約2.2m、深さは0.5mから0.7mを測る。規模は1地点のSH02とほぼ同規模と見ることができる。

2号方形周溝墓はJMOA地区の4号溝跡と繋がる可能性が高いものと考えられる。その場合の規模は、南北径約13mを測り、東西径は約14mと推定される。

3号方形周溝墓は北側の陸橋部の位置から、東西径が約10mと推定される。

(島崎)

D 集落の展開

(1) 中十条アパート地区（第51図）

JMNA地区では特に遺構の重複が著しく、同じ場所ないしは直ぐ横に、前の竪穴住居を埋め戻し、新しく竪穴住居を作り替える例が多く確認された。北東部の12号住居跡周辺や中央部の67号住居跡周辺では、8～9軒の竪穴住居が次々と作り替えられていた状況が判明し、またアパートの基礎内部からも、調査前に煙滅していた箇所を除いても、124号住居跡周辺では多数の重複関係が認められる。竪穴住居と掘立柱建物の同時に存在した遺構を特定し、集落の推移を完全な形で復元することは難しい。

土坑は全体で10基検出され、平面形は10・17号が円形、他は方形・長方形で、分布は竪穴住居跡の重複の激しい箇所に偏在していた。時期は竪穴住居跡との重複関係から、1号がⅠ期、4号がⅡ期、5号がⅣ期と時期が限定されるものもあるが、10・11号土坑はⅡ期以降、12・16・17号土坑がⅢ期以降で、13・15号土坑の時期は不明である。他に竪穴住居跡との重複や攢乱などにより消失したものも存在したものと推定しても、集落の存続期間から各時期に2～3基ほどが構築されたものと推定され、竪穴住居の付属施設である可能性が想定された。

ここでは南橋遺跡の土器編年により設定された時期区分に基づき、遺構の展開を整理する。しかし同じ時期区分の中にも重複があるため、完全な同時存在の遺構を示すものではない。なお遺構の分布が比較的薄い51号住居跡から4号掘立柱建物跡と85号住居跡と13号土坑を結んだ範囲より北側

を北群、それより南側を南群として分ける。54号住居跡は南群に含める。また南群の東に隣接する31地点の調査成果も合わせることとした。

【Ⅰ期】(南群)61・62・63・73・76・77号住居跡。(北群)44・46・49号住居跡、5号掘立柱建物跡。1号土坑。その後の遺構の重複からみて、これらがこの時期に含まれるものと判断した。南群では小型の住居が散在し、同一地点での建て替えがすでに認められ、南群の31地点では1軒の竪穴住居跡(SI02)が位置する。北群には中型の46号住居跡を含むが、小型が主体である。

【Ⅱ期】(南群)55・64・67・71・95・100・113・115・123号住居跡。1～3号方形周溝墓。(北群)2・4・12・13・14・19・34・35・79・131号住居跡、2号・3号掘立柱建物跡。4号土坑。調査区全面に住居の分布が広がる。同一地点での建て替えも多くなり、隣接する31地点SI01は中型の住居と推定される。南群では中型の71号住居跡に接して113号住居跡、55号住居跡、31地点SI01などの中型住居の周間に67号住居跡などの小型住居が分布する。またアパート建物基礎内で検出された、重複の激しい竪穴住居跡もいくつか含まれる可能性がある。北群では大型住居の19号住居跡が北西隅に位置し、34・35・4号住居跡との間に、ある程度の空閑地を設けて分布した可能性がある。また南群と北群の間の空閑地は顕在化し、またⅡ期後半には南端に1・2・3号周溝墓が築かれ墓域となる。周溝墓の立地は、大型住居の成立とともに集落が大きく展開し、その広がりと関わった可能性があり、南橋遺跡の集落全体の中で位置付ける必要がある。

【Ⅲ期】(南群)90・122号住居跡。(北群)7・9・18・36・41・50号住居跡。4・6号掘立柱建物跡。また北群の79号住居跡を切って造られたP59もこの時期に含まれる。北群の41号住居跡の主に北側と南側に竪穴住居跡が分布し、入口を南側、炉を北側に設置して方向をほぼ揃えている。41号住居跡の西側には接するように4号掘立柱建物跡が位置する。また41・36・18号住居跡の間で建て替えが頻々に行われたことが想定された。南群では遺構は薄くなる。

【Ⅳ期】(南群)119号住居跡。(北群)24・32・39・45・51号住居跡。5号土坑。南群は遺構が薄い状況が継続する。北群では、39号住居跡は炉と主柱穴の構造と配置から判断して、24号住居跡と同規模の大型住居に復元され、また同時期の45号住居跡を壊している。北群では、24・32・39・51号住居跡の間に空閑地を設けている。また単独で存在したP89もこの時期と考えられる。

本調査地点では隣接する31地点を含め、Ⅱ期に大きく集落が発展し、Ⅲ期からⅣ期が集落の盛期であるが、減少傾向であるⅣ期も遺構数は少なくなるが、北群で大型住居跡は継続しており、大型住居を核として発展してきた集団関係に大きな変化ないまま集落が収束していく様相が指摘される。

(飯塚)

(2) 王子・王子母子アパート地区(第52図)

遺物はⅠ期のものも出土するが、遺構は明確でない。平面形態が138号住居跡がこの時期に含まれる可能性がある。Ⅱ期になると、127号住居跡が作られ、JMNA地区南群の竪穴住居跡の広がりが、JMOA地区北端まで延びていたことが確認された。JMNA地区71号住居跡のまとまりに含まれる形で127号住居跡が作られたと思われる。しかし、Ⅱ期後半以降、当該地は墓域になったため、本来構築された竪穴住居跡の基數を復元することはできない。またⅡ期後半には、141号住居跡が作られた。

7号掘立柱建物跡は127号住居跡の東側に位置しており、おそらく、JMNA地区南群の竪穴住居

跡の広がるⅡ期のものであると思われる。しかし同じ地点で複数回の建て替えが認められ、明確な構築時期は不明である。

JMOA 地区は、JMNA 地区と比べ当該期の遺構の検出数が全体的に少なく、JMOA 地区が南橋遺跡の集落の南端となる可能性がある。北端は 22 地点であると考えられ、東端を 24 地点、西端を 9 地点として、現時点で南橋遺跡は南北約 500m、東西約 200m の規模の集落であると考えられる（第 46 図）。

掘立柱建物跡は、JMNA 地区ではⅠ期の 5 号掘立柱建物跡は構造が明確でなく、またⅢ期の大型の 6 号掘立柱建物跡は今後の類例を踏まえた上での検討が必要である。他は 1 間 × 1 間で床面積が約 8 m²から 11 m²の小型の倉と推定される掘立柱建物跡（2 ~ 4 号）が、Ⅰ期からⅢ期に大型の竪穴住居跡を含む竪穴住居跡群に囲まれた広場的な空閑地に場所を移して構築している。特にⅢ期には大型住居である 41 号住居跡と棟を揃えて近接していることが特徴として挙げられる。

一方南側の JMOA 地区では、7 号掘立柱建物跡は 127 号住居跡の東南部で、JMNA 地区南群の竪穴住居跡群の遺構を構築しない開放的な空閑地に占地し、同じ場所での複数回の建て替えが確認されており、さらにその南側にも別の掘立建物跡が存在した可能性も想定される。7 号掘立柱建物跡は 2 間 × 2 間で、①の段階で約 13.3 m²、②の段階で 12.1 m²であり、JMNA 地区の掘立柱建物跡より床面積が広い。時期的にもⅠ期からⅡ期にかけてのものと推定される。

今回の調査では、南橋遺跡の JMNA 地区と集落の南端にあたる JMOA 地区では、掘立柱建物跡の構造や規模、占地やあり方が異なる点が指摘される。

南橋遺跡から西側に 150 ~ 200m の所に位置する十条久保遺跡からは、当該期の井戸址が検出されており、南橋遺跡の人々の水場であった可能性が高い。十条久保遺跡の第 14 号土坑、第 206 号井戸址と JMOA 地区の 141 号住居跡から下部に焼成後の穿孔がある直口壺が出土していることからも、儀礼行為の共通性も窺われる。今後、集落の詳細な分析を通じて、墓制を含め、祭礼・儀礼のあり方を復元する必要がある。

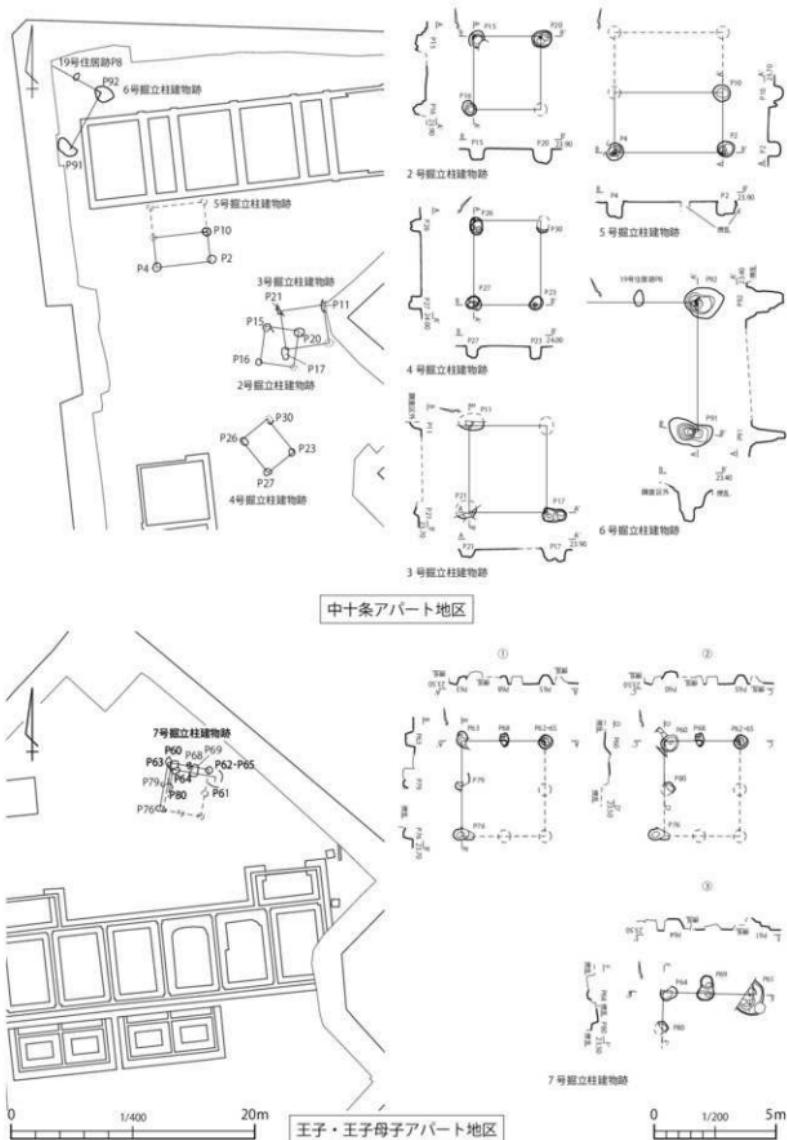
3 古代

(1) 中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区的集落の様相（第 53 図）

古代の土器編年は基本的に（穂田 2000）に拠り、7 世紀から 8 世紀初頭については（山内 2012）を参照した。

JMNA 地区で竪穴住居跡 11 軒、掘立柱建物跡 1 棟、JMOA 地区で竪穴住居跡 9 軒が検出され、概ね以下に含まれる。

- ・7 世紀後半(5 期) - 58・132・135・137・140 号住居跡
- ・8 世紀前半(6 期) - 131 号住居跡
- ・8 世紀中葉から後半(7 期) - 28 号住居跡
- ・9 世紀初頭(9 期) - 134・136 住居跡
- ・9 世紀前半から中葉(10 期) - 57・59・72・104・120・126・142 号住居跡
- ・9 世紀後半(11 期) - 60・69・143 号住居跡、1 号掘立柱建物跡
- ・9 世紀後半から 10 世紀初頭(11 から 12 期) - 101 号住居跡

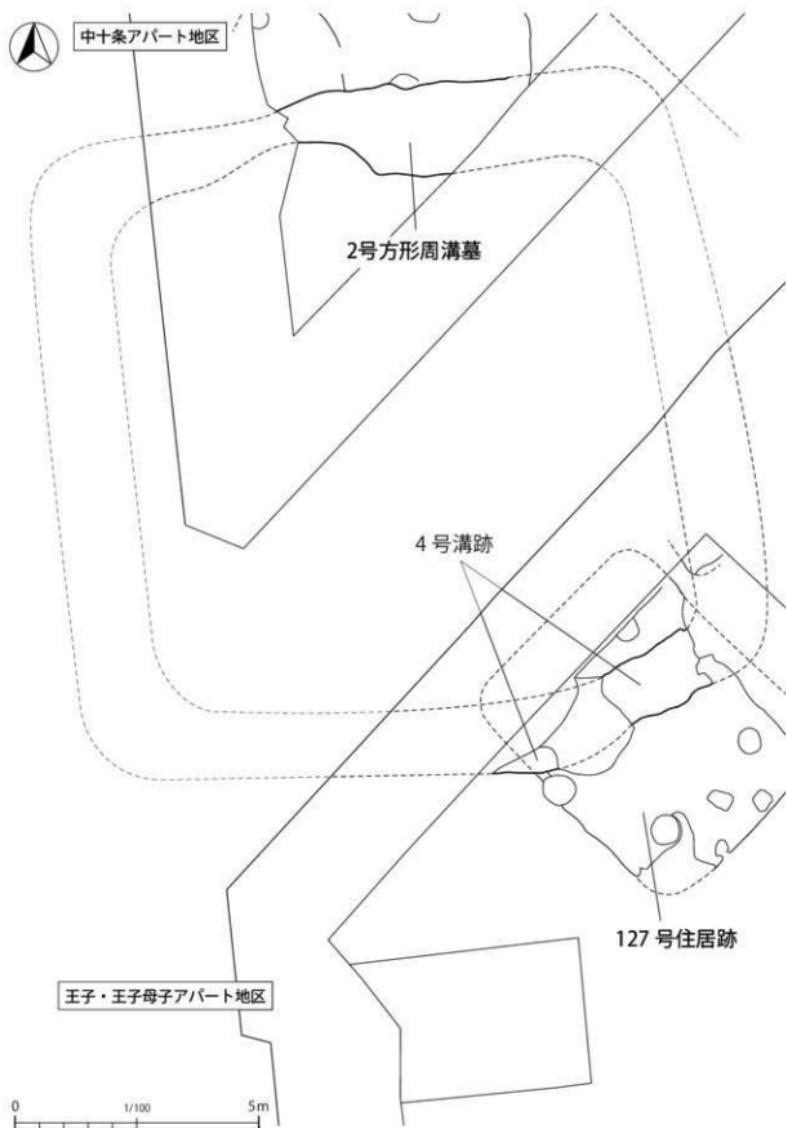


第49図 中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭の
掘立柱建物跡 (1/200・1/400)

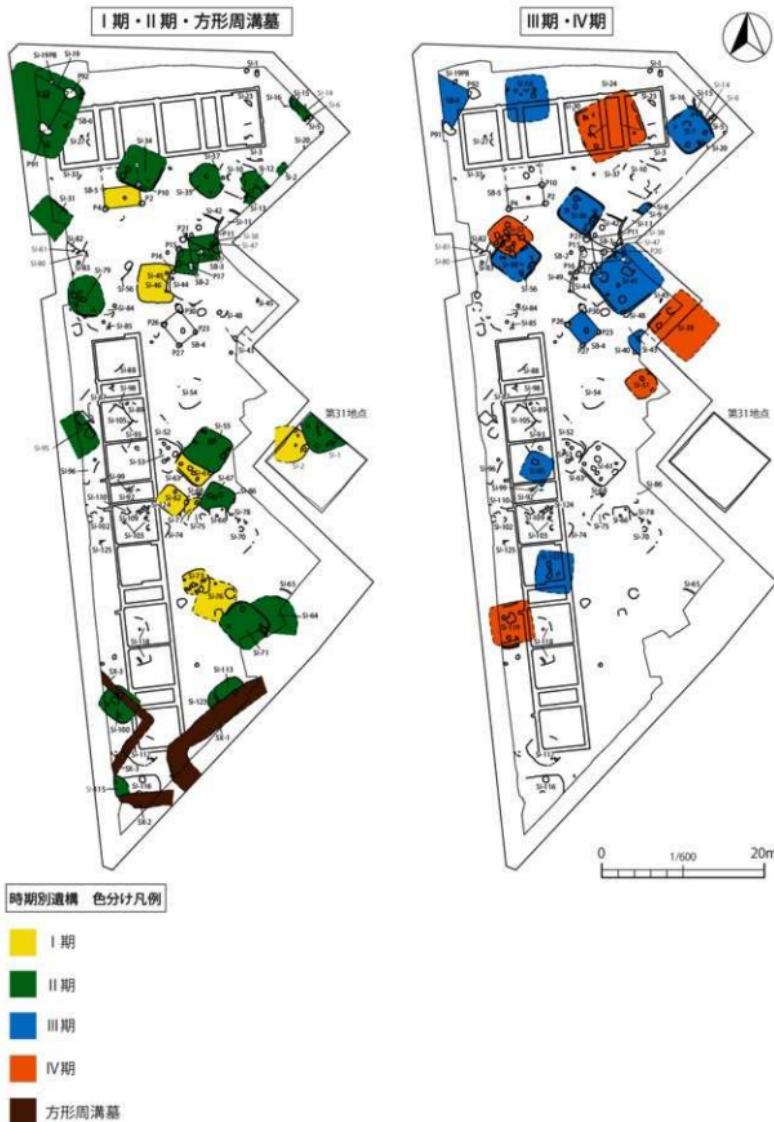
JMNA 地区では 120・72・60 号住居跡や 142・59・57 号住居跡は、同じ場所で切り合いを持ち、構築を繰り返し、さらに 57 号住居跡は 1 度、60 号住居跡は 2 度の作り替えが認められた。比較的新たに住居を建てる空閑地が存在するにも関わらず、同じ地点での建て替えや同じ住居の複数回の作り替えが認められる点、9 世紀後半代に 1 号掘立柱建物跡が、北側の 69 号住居跡と南西側の 60 号住居跡に挟まれた空間に構築しており、一つのまとまりを形成している点が JMNA 地区の古代の集落の特徴である。

JMOA 地区では、それぞれの時代で空閑地を利用した竪穴住居を構築している点、竪穴住居を構築する範囲が南北にわたって広範囲である点が、古代の集落の特徴である。

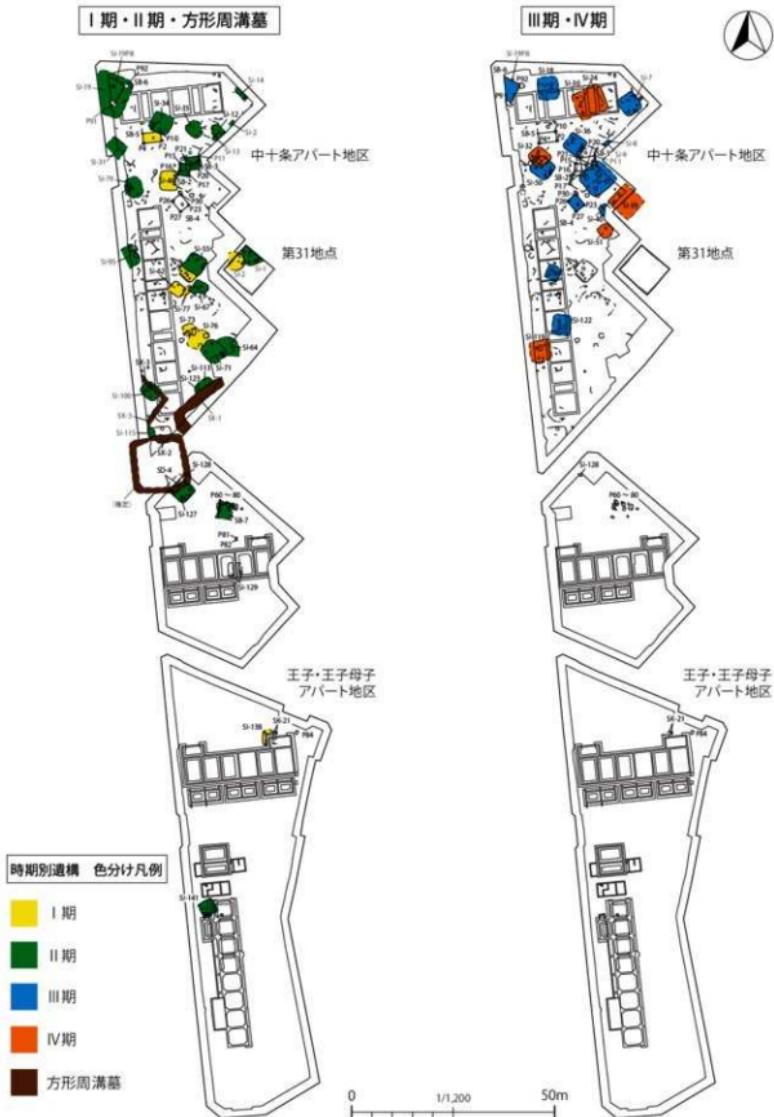
(島崎)



第 50 図 2号方形周溝墓・4号溝跡 (1/100)



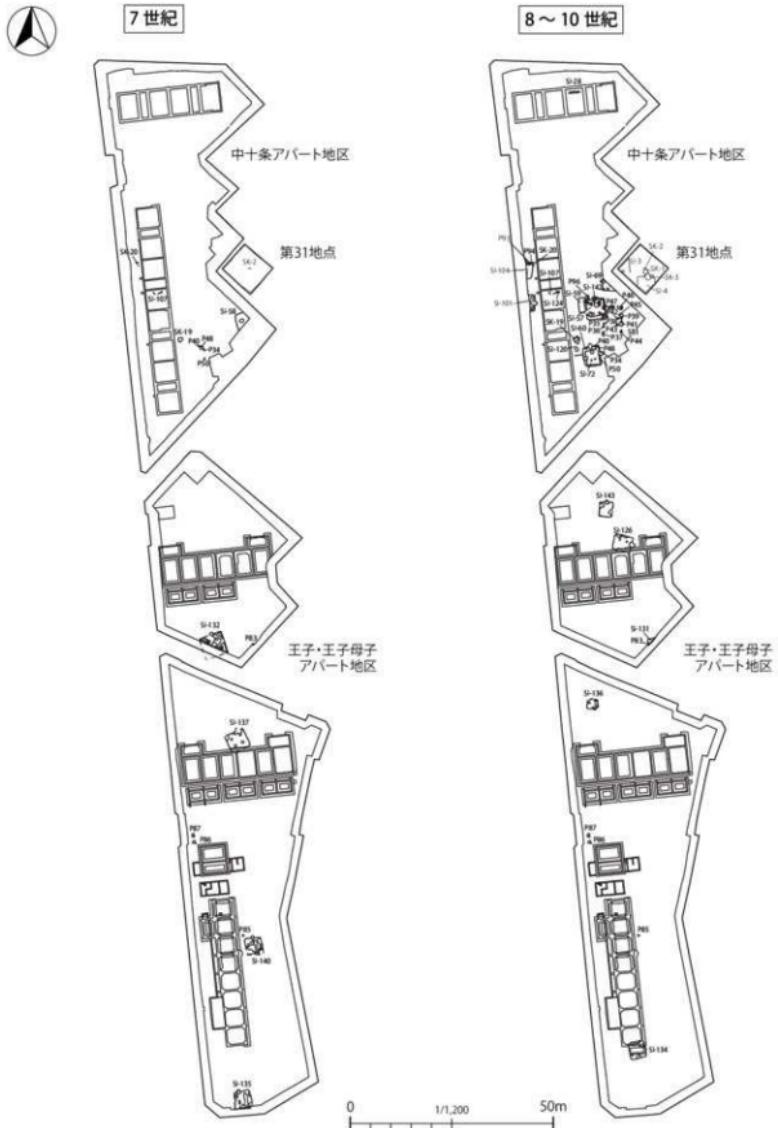
第51図 中十条アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭 時期別遺構分布図（1/600）



第52図 王子・王子母子アパート地区 弥生時代後期から古墳時代初頭 時期別遺構分布図

(1/1,200)

— 95 —



第53図 中十条アパート、王子・王子母子アパート地区 古代 時期別遺構分布図（1/1,200）

引用・参考文献

- 相原正人 2005 「南橋遺跡第23地点発掘調査報告」『文化財研究紀要』第18集 東京都北区教育委員会
- 赤塚次郎 1990 「V 考察 I 遷國式土器」『遷國遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 1997 「付論2 遷國I・II式再論」「西上免遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴田千花 2000 「第VI章 成果と課題 第2節 豊島都衙周辺の古代における集落と遺物」『中里峠上遺跡II・田端西台通遺跡IV・田端不動坂遺跡IV・田端町遺跡II』 東京都北区教育委員会
- 鈴田千花・牛山英昭 1999 「十条久保遺跡」十条久保遺跡調査会
- 新井悟・坂上直嗣 2003 「南橋遺跡III・宿跡II」 東京都北区教育委員会
- 飯塚武司・島崎瑛美ほか 2018 「十条台遺跡群I・十条地区沿道一体整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」 東京都埋蔵文化財センター
- 五十嵐祐介 2006 「南橋遺跡第24地点発掘調査報告」『文化財研究紀要』第19集 東京都北区教育委員会
- 板倉貢之・高橋直子 2006 「十条台遺跡群 南橋遺跡 一十条台一丁目3番地20号地点ー」 共和開発株式会社
- 岩崎岳彦・宅間清公ほか 2021 「北区埋蔵文化財調査年報」一令和元年度ー 東京都北区教育委員会
- 牛山英昭 2006 「古墳時代中期の区画溝と高環 一南橋遺跡第24地点の調査からー」『文化財研究紀要』第19集 東京都北区教育委員会
- 牛山英昭・新井悟 2001 「十条久保遺跡II」十条久保遺跡調査会
- 牛山英昭・高阪勇佑ほか 2022 「北区埋蔵文化財調査年報」一令和2年度ー 東京都北区教育委員会
- 牛山英昭・宮川和也ほか 2016 「東京都北区 十条台遺跡群 南橋遺跡 王子本町2-4地点」 株式会社CEL
- 大田区郷土博物館 2017 「土器から見た大田区の弥生時代ー久ヶ原遺跡発見、90年ー」展示図録 大田区郷土博物館
- 北区飛鳥山博物館 2012 「北区埋蔵文化財調査年報」一平成22年度ー 東京都北区教育委員会
- 2015 「北区埋蔵文化財調査年報」一平成25年度ー 東京都北区教育委員会
- 2017 「北区埋蔵文化財調査年報」一平成27年度ー 東京都北区教育委員会
- 黒沢浩 1996 「第二章 米づくりと人びとの生活 第二節 土器と人びとの交流」『北区史 通史編 原始古代』 東京都北区
- 小林三郎ほか 1988 「七社神社前遺跡I」北区教育委員会
- 1995 「豊島馬場遺跡」 東京都北区教育委員会
- 小林三郎・中島広順ほか 1996 「南橋遺跡II」 東京都北区教育委員会
- 小林重義・鈴木敏弘ほか 1990 「赤羽台遺跡八幡神社地区ー」東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 坂上直嗣ほか 2006 「町屋四丁目実掘遺跡」大成エンジニアリング株式会社
- 宅間清公・遠竹陽一郎ほか 2019 「北区埋蔵文化財調査年報」一平成29年度ー 東京都北区教育委員会
- 2020 「北区埋蔵文化財調査年報」一平成30年度ー 東京都北区教育委員会
- 丹野雅人・松崎元樹ほか 2012 「田端西台通遺跡」 東京都埋蔵文化財センター
- 丹野雅人・飯塚武司 2010 「道台遺跡」 東京都埋蔵文化財センター
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡 国道24号線横原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(II)』 奈良県教育委員会
- 東京都北区教育委員会 1989 「北区埋蔵文化財調査報告」『文化財研究紀要』第3集 東京都北区教育委員会
- 2010 「平成20年度 区内遺跡本発掘調査・確認調査・試掘調査報告」『文化財研究紀要』第23集 東京都北区教育委員会

- 遠竹陽一郎 2017 「十条台遺跡群 南橋遺跡 一中十条 1-3-10 地点一発掘調査報告」『北区埋蔵文化財調査年報』一平成
28 年度— 東京都北区教育委員会
- 遠竹陽一郎・伊藤和人 2016 「十条台遺跡群 南橋遺跡 一王子本町 2-9 地点一確認調査報告」『北区埋蔵文化財調査年報』
一平成 26 年度— 東京都北区教育委員会
- 遠竹陽一郎・伊藤和人ほか 2016 「十条台遺跡群 南橋遺跡 一王子本町 2-14 地点・王子本町 2-11-4 地点一発掘調査報告」
『北区埋蔵文化財調査年報』一平成 26 年度— 東京都北区教育委員会
- 遠竹陽一郎・遠藤知成ほか 2019 『東京都北区 十条台遺跡群 南橋遺跡 一王子本町 2-10 地点一発掘調査報告』
株式会社東京航業研究所
- 富田健司 2004 『南橋遺跡IV』 東京都北区教育委員会
- 中島広顕・新井悟 2003 『田端不動坂道路V』 北区教育委員会
- 中島広顕・陣内康光ほか 1987 『南橋遺跡』 東京都北区教育委員会
- 森岡秀人・西村歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」『古式土師器の年代学』
(財)大阪府文化財センター
- 山内淳司 2012 「第7章まとめ 第3節 古墳時代後期～古代」『東京都北区 御殿前遺跡』 独立行政法人 国立印刷局 大成工
ンジニアリング株式会社
- 山崎太郎 2022 『十条台遺跡群南橋遺跡 都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化
財発掘調査』第1分冊 東京都埋蔵文化財センター

図版 1



1. 王子・王子母子アパート地区着手前①（北から）



2. 王子・王子母子アパート地区着手前②（北から）

図版2



1. VIII区、IX①区全景（南から）



2. IX②区全景（北から）

図版 3



1. IX-3区全景（北から）



2. X区全景（南から）

図版 4



1. XI①区全景（北から）

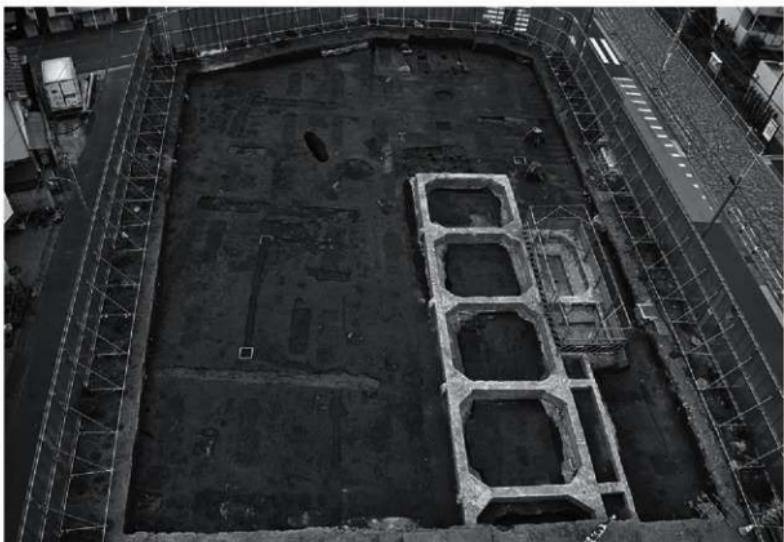


2. XI②-1、2 区全景（北から）

図版 5



1. XI②-3区全景（東から）



2. XII区全景（北から）

図版6



1. VIII区基本層序 (A) (南から)



2. VIII区基本層序 (B) (西から)



3. IX区基本層序 (C) (北から)



4. X区基本層序 (D) (西から)



5. X区基本層序 (E) (東から)



6. XI区基本層序 (F) (東から)



7. XI区基本層序 (J) (西から)



8. XII区基本層序 (L) (北から)

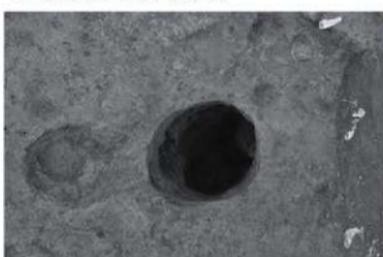
图版 7



1. 133号住居跡全景（西から）



2. 133号住居跡完掘（西から）



3. 88号柱穴完掘（東から）



4. 88号柱穴堆積土層（東から）



5. 22号土坑完掘（南から）



6. 22号土坑堆積土層（南から）



7. 26号土坑完掘（南から）



8. 26号土坑堆積土層（南から）

図版 8



1. 127号住居跡全景（西から）



2. 127号住居跡完掘（西から）

図版 9



1. 127号住居跡 P4 完掘（南から）



2. 127号住居跡 P4 堆積土層（東から）



3. 127号住居跡 P5 完掘（南から）



4. 127号住居跡 P5 堆積土層（東から）



5. 127号住居跡遺物出土状況（南から）



6. 127号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）



7. 128号住居跡完掘（南から）



8. 128号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

図版 10



1. 129号住居跡全景（南から）

2. 129号住居跡完掘（南から）



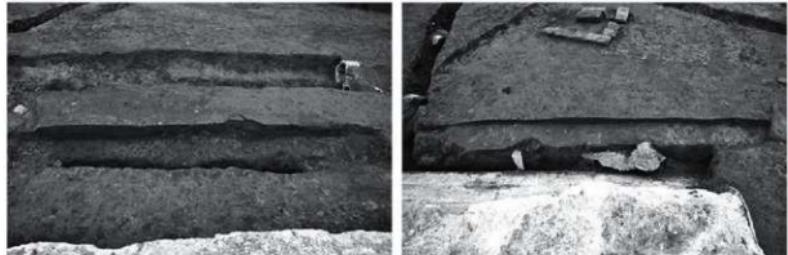
3. 129号住居跡 A-A' 堆積土層（西から）

4. 129号住居跡 C-C' 堆積土層（南から）



5. 138号住居跡全景（南から）

6. 138号住居跡完掘（南から）



7. 138号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

8. 138号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 11



1. 141号住居跡全景（北から）



2. 141号住居跡完掘（北から）

図版 12



1. 141号住居跡遺物出土状態（北から）



2. 141号住居跡土器出土状態①（北から）



3. 141号住居跡土器出土状態②（北から）



4. 141号住居跡P1完掘（南から）



5. 141号住居跡P2完掘（北から）

図版 13



1. 弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群（南から）



2. 60号柱穴完掘（東から）



3. 60号柱穴堆積土層（東から）



4. 61号柱穴完掘（東から）



5. 61号柱穴堆積土層（東から）

図版 14



1. 65号柱穴完掘（東から）



2. 65号柱穴堆積土層（東から）



3. 62・65号柱穴完掘（東から）



4. 62号柱穴堆積土層（東から）



5. 63号柱穴完掘（東から）



6. 63号柱穴堆積土層（東から）



7. 64号柱穴完掘（東から）



8. 64号柱穴堆積土層（東から）

図版 15



1. 66号柱穴完掘（南から）



2. 66号柱穴堆積土層（南から）



3. 67号柱穴完掘（東から）



4. 67号柱穴堆積土層（東から）



5. 68号柱穴完掘（西から）



6. 68号柱穴堆積土層（西から）



7. 69号柱穴完掘（東から）



8. 69号柱穴堆積土層（東から）

図版 16



1. 70号柱穴完掘（南から）



2. 70号柱穴堆积土層（南から）



3. 73号柱穴完掘（東から）



4. 73号柱穴堆积土層（東から）



5. 75号柱穴 A-A' 堆积土層（東から）



6. 75号柱穴 B-B' 堆积土層（東から）



7. 76号柱穴完掘（北から）



8. 76号柱穴堆积土層（北から）

図版 17



1. 77・78・79号柱穴完掘（北から）



2. 77号柱穴堆積土層（南から）



3. 78号柱穴堆積土層（西から）



4. 79号柱穴堆積土層（南から）



5. 80号柱穴完掘（南から）



6. 80号柱穴堆積土層（南から）



7. 81・82号柱穴完掘（西から）



8. 81・82号柱穴堆積土層（西から）

図版 18



1. 84号柱穴完掘（東から）



2. 84号柱穴堆積土層（東から）



3. 21号土坑完掘（東から）



4. 21号土坑堆積土層（北から）



5. 23号土坑完掘（南から）



6. 23号土坑堆積土層（東から）



7. 24号土坑完掘（南から）



8. 25号土坑堆積土層（東から）

図版 19



1. 4号溝跡完掘①（東から）



2. 4号溝跡完掘②（西から）



3. 4号溝跡 A-A' 堆積土層（東から）



4. 4号溝跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 20



1. 126号住居跡全景（西から）



2. 126号住居跡完掘（西から）

図版 21



1. 126号住居跡カマド全景 (西から)



2. 126号住居跡カマド完掘 (西から)



3. 126号住居跡カマド N-N' 堆積土層 (西から)



4. 126号住居跡カマド M-M' 堆積土層 (南から)



5. 126号住居跡師器出土状態 (西から)



6. 126号住居跡須恵器出土状態 (西から)



7. 126号住居跡鉄器出土状態 (南から)



8. 126号住居跡 B-B' 堆積土層 (東から)

図版 22



1. 131号住居跡全景（西から）



2. 131号住居跡完掘（西から）



3. 131号住居跡焼土範囲（西から）



4. 131号住居跡 A-A'堆積土層（南から）



5. 131号住居跡 B-B'堆積土層（西から）

図版 23



1. 132号住居跡全景（東から）



2. 132号住居跡完掘（東から）

図版 24



1. 132号住居跡カマド全景（南から）



2. 132号住居跡カマド完掘（南から）



3. 132号住居跡カマド J-J' 堆積土層（西から）



4. 132号住居跡カマド内出土土器出土状態（西から）



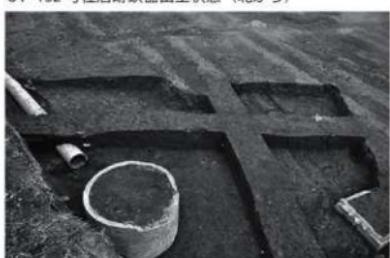
5. 132号住居跡出土土器出土状態（西から）



6. 132号住居跡出土鐵器出土状態（北から）



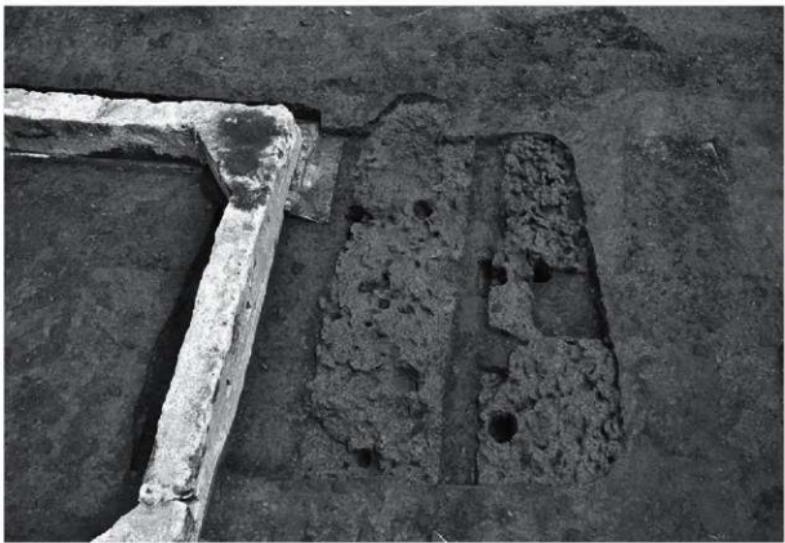
7. 132号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）



8. 132号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）



1. 134号住居跡全景（西から）



2. 134号住居跡完掘（西から）

図版 26



1. 134号住居跡カマド焼土範囲（西から）



2. 134号住居跡カマド完掘（西から）



3. 134号住居跡カマド I-I' 堆積土層（西から）



4. 134号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）



5. 134号住居跡 P1 完掘（西から）



6. 134号住居跡 P1 堆積土層（西から）



7. 134号住居跡鉄器出土状態（西から）



8. 134号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）

図版 27



1. 135号住居跡全景（東から）



2. 135号住居跡完掘（東から）

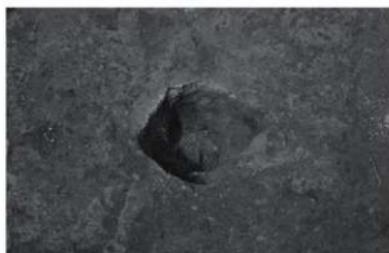
図版 28



1. 135号住居跡カマド全景（南から）



2. 135号住居跡カマド完掘（南から）



3. 135号住居跡P3完掘（南から）



4. 135号住居跡P3堆積土層（南から）



5. 135号住居跡P7完掘（南から）



6. 135号住居跡P7堆積土層（東から）



7. 135号住居跡鉄器出土状態（南から）

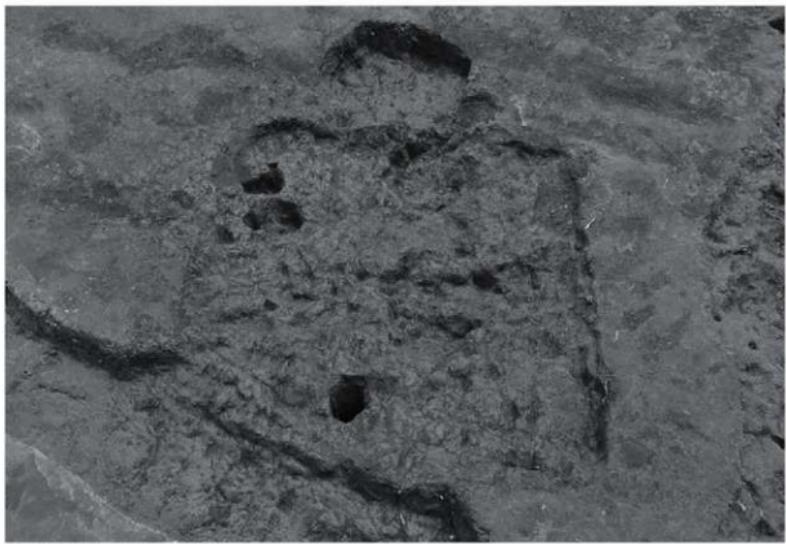


8. 135号住居跡B-B'堆積土層（南から）

図版 29

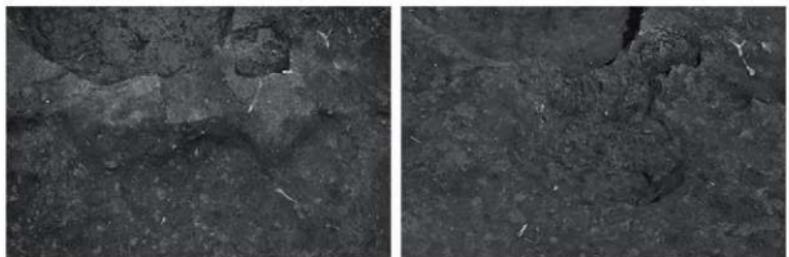


1. 136号住居跡全景（西から）



2. 136号住居跡完掘（西から）

図版 30



1. 136号住居跡カマド全景（西から）

2. 136号住居跡カマド完掘（西から）



3. 136号住居跡 P1 完掘（西から）



4. 136号住居跡 P1 堆積土層（西から）



5. 136号住居跡土師器出土状態①（西から）



6. 136号住居跡土師器出土状態③（西から）



7. 136号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）



8. 136号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 31

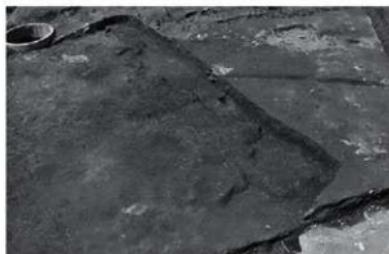


1. 137号住居跡全景（西から）



2. 137号住居跡完掘（西から）

図版 32



1. 137号住居跡焼土範囲全景（南から）



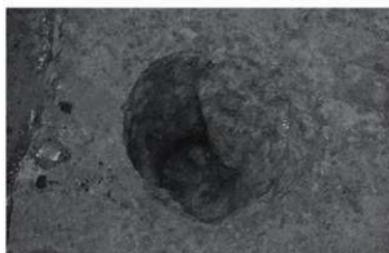
2. 137号住居跡焼土範囲堆積土層（西から）



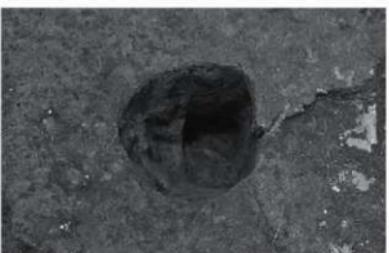
3. 137号住居跡P1完掘（東から）



4. 137号住居跡P2完掘（東から）



5. 137号住居跡P3完掘（東から）



6. 137号住居跡P4完掘（東から）



7. 137号住居跡A-A'堆積土層（東から）



8. 137号住居跡B-B'堆積土層（南から）

図版 33

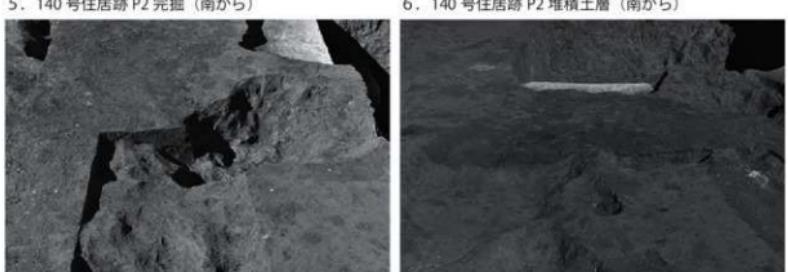
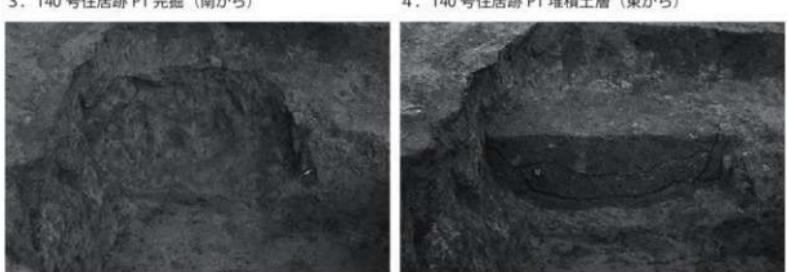
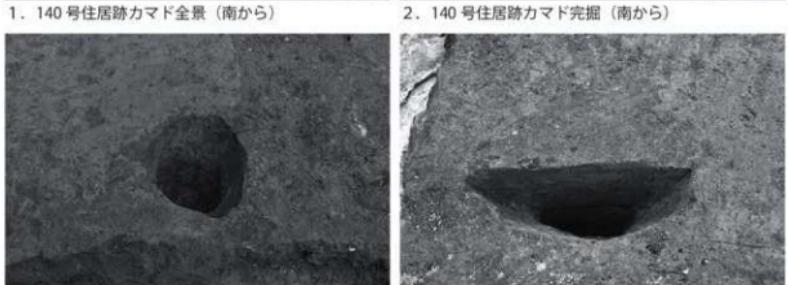
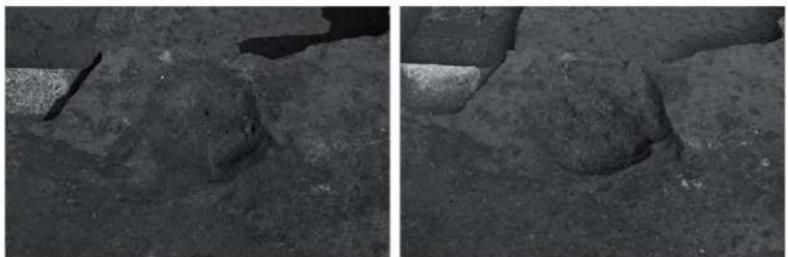


1. 140号住居跡全景（南から）



2. 140号住居跡完掘（南から）

図版 34



図版 35



1. 143号住居跡全景（南から）



2. 143号住居跡完掘（南から）

図版 36



1. 143号住居跡カマド全景（南から）



2. 143号住居跡カマド完掘（南から）



3. 143号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）



4. 143号住居跡カマド G-G' 堆積土層（東から）



5. 143号住居跡カマド石製支脚出土状態（南から）



6. 143号住居跡カマド石製支脚出土状態-近接（南から）

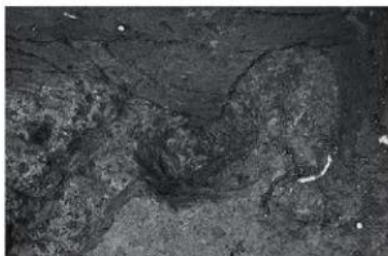


7. 143号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）



8. 143号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

図版 37



1. 83号柱穴完掘（西から）



2. 83号柱穴堆積土層（西から）



3. 85号柱穴完掘（南から）



4. 85号柱穴堆積土層（南から）



5. 86号柱穴完掘（東から）



6. 86号柱穴堆積土層（東から）

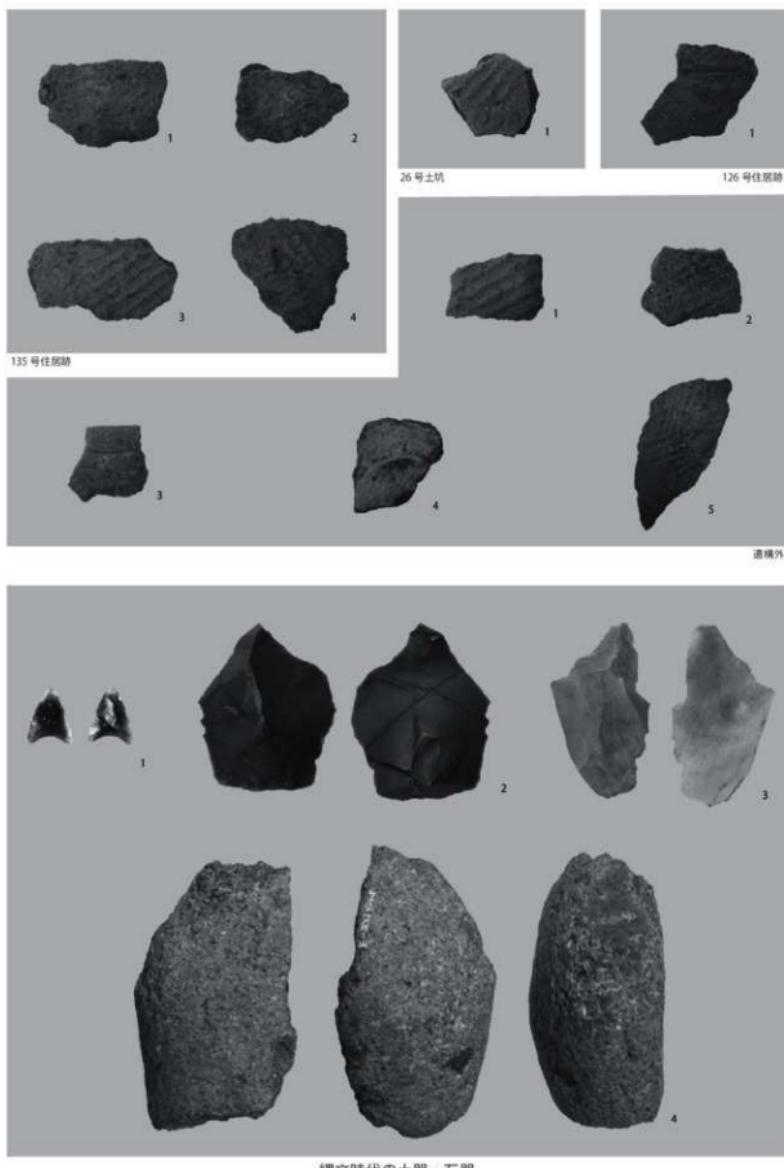


7. 87号柱穴完掘（東から）

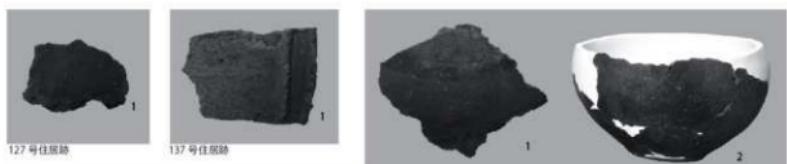


8. 87号柱穴堆積土層（南から）

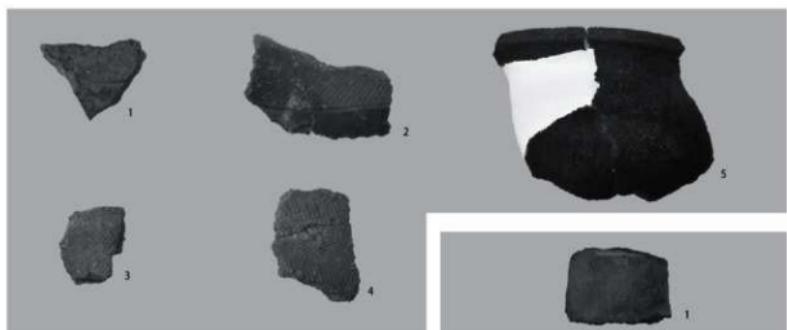
図版 38



図版 39



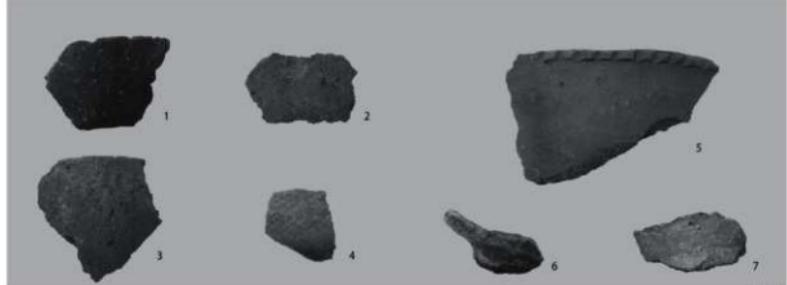
141号住居跡



143号住居跡



4号溝跡



遺構外

弥生時代後期から古墳時代初頭の土器

図版 40

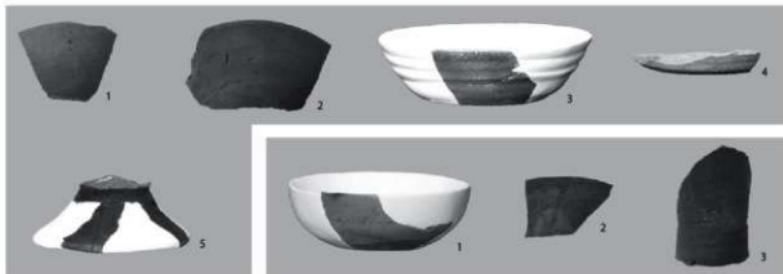


古代の土師器・須恵器（126号住居跡）

図版 41



132号住居跡



134号住居跡

135号住居跡



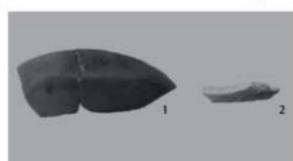
136号住居跡



137号住居跡



138号住居跡



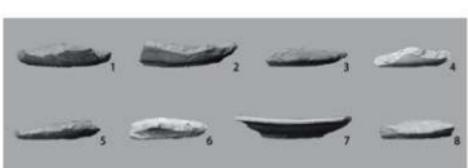
140号住居跡



141号住居跡



143号住居跡



遺構外

古代の土師器・須恵器（126号住居跡以外）

図版 42



古代の石器・鉄器

報 告 書 抄 錄

印刷仕様

表紙	レザック	215kg (四六判)
見返し	上質紙	135kg (四六判)
巻頭	マットコート紙	90kg (四六判)
本文	上質紙	70kg (四六判)
写真図版	マットコート紙	90kg (四六判)
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準適合	
製版線数	150 線 (カラー 175 線)	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

北区

十条台遺跡群南橋遺跡 第2分冊

—都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋
蔵文化財発掘調査—

東京都埋蔵文化財センター調査報告第372集

2023年9月29日 発行

公益財団法人東京都教育支援機構
編集・発行 東京都埋蔵文化財センター
東京都多摩市落合一丁目14番2
TEL 042 - 374 - 8044

印刷 株式会社サンワ

東京都千代田区飯田橋 2-11-8